心を無くした男と、嘘つきな王サマ

朝霧=Uroboross

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※ネタバレが大量に含まれております!!２部６章未履修の方、またはネタバレ見ないで進めたい方はブラウザバックを推奨します。

時は１９９０年代。日本のとある都市にて万能の願望器たる聖杯を求める戦争――第四次聖杯戦争が行われようとしていた。

時を同じくして、事故に巻き込まれたことで、逸般人だらけのＦａｔｅ時空に転生してしまった少年、『朝露（アサツユ）虚映（コエイ）』。奇しくも、彼は聖杯を求める戦いへと巻き込まれてしまう。

様々な陰謀が埋めく中、彼が呼び出したのは、本来は呼び出されるはずのない存在。ＦＧＯにて、ブリテンを、世界を滅ぼすために、その策謀による猛威を振るった、『妖精王を騙るモノ』であった――――。

祝・オベロン実装（今さらすぎる）、そして「あれ？オベロンまだ少ないな」と思い付いて書き上げただけの行き当たりばったり小説でございまふ。

完全見切り発車なので拙いのはご容赦下さい。

目次

キャラ設定等 1
第四次終了時：設定 5
第四次聖杯戦争／ｚｅｒｏ編
どうしてこうなる？ 9
とりあえず、作戦会議 15
裏話：オベロン① 22
戦線開幕 30
”呪塊妖精” 37
お願い、帰って？ 43
さて、じゃあ遊ぼっか 49
いいね、最高だ 55
退場の時だよ、ご老人 62
騙すのも楽じゃあない 69
聖杯問答（前編） 76
聖杯問答（中編） 83
聖杯問答（後編） 91
厄災の進撃 98
『聖剣』解放 106
オベロン②：記憶 112
決戦前夜 119
妄執の騎士、喝采の卑王 126
ご愁傷サマ 132
『彼方と落ちる夢の瞳』 137

幕間：英国／事件簿編

幕間①：第四次感想戦 ―― 143
幕間②：英国旅行 ―― 148
幕間③：会談 ―― 154
幕間④：妖精と謂ふ者 ―― 160
幕間⑤：妖精と謂ふ者 続 ―― 166
幕間⑥：魔眼収集列車 #1 ―― 173
幕間⑦：魔眼収集列車 #2 ―― 179

キャラ設定等

・〈主人公〉

名前：朝露　虚映（あさづゆ　こえい）

※傭兵稼業の時は『アルレッキーノ』と名乗っている。

魔術系統：『風』、『無』

身長／体重：１６５．４ｃｍ／５５．５ｋｇ

性別：男性

年齢：１９歳

誕生日：六月六日

詳細：『風』魔術系統の中でも中堅に位置する『朝露家』の最後の血筋。転生者ではあるが、Ｆａｔｅについての知識はまちまちかつウロ覚え。

一人っ子で、１４歳までは両親共にいたが、とある魔術礼装の制作中に術式が暴走、物理的に蒸発してしまい、天涯孤独に。

家と金はあったが、前世から『刺激ある生活』に飢えていたのもあって傭兵業を営み始める。キテレツな戦術で先が読めず、むしろこれ何も考えてないのでは？と錯覚させる。勿論、何も考えてない。

楽しいことが好き、面倒事は嫌い、興味ない相手はどうでもいい、強い敵を踊らすのは愉しい。精神破綻者とよくいわれるが、ある意味間違っていない。

『浅ましくも生き続けようとするものが気持ち悪い』というオベロンに対し、『永久の平穏を希う（こいねが）世界が気持ち悪い』という虚映。似ているようではあるがその根底は真逆。だが、だからこそ馬が合い、結局の着地点が一緒になる。

趣味は読書と傭兵業。たまに野良猫と戯れては噛まれている。リンゴと洋ナシが好き。納豆は嫌い。

〈サーヴァント〉

・オベロン

クラス：Ｐｒｅｔｅｎｄｅｒ（現・聖杯戦争中はキャスターとして活動）
詳細：言わずもがな、ＦＧＯ：2部6章『アヴァロン・ル・フェ』において黒幕として、『騙す者』の意味を持つプリテンダークラスのサーヴァントとして登場した。
こちらのオベロンはカルデアに破れ、奈落の穴を落ちていく中眠りにつこうとしていたところ、虚映の『虚構魔術』により霊基が”こちら側”と接続、『真夏の夜の夢』を触媒にして召喚された。
召喚当初はかなり不機嫌だったが、マスターとの相性がいいと判ると、二人で”落とし穴”を企てたりなど共謀するような仲に。
「ま、良くもなく悪くもなくってとこじゃない？」とはオベロンの言。
基本的にマスターの魔力量から、行動自体には問題ないが戦闘行動にやや不利益がある。その為、基本的にはＦＧＯにおける一臨・二臨の姿でいる。
その後、間桐邸の蟲蔵に侵入し、内部の虫を全て掌握し、桜ちゃんと一緒に全て略奪してきた。これにはお爺様も激おこ。
余談だが、この虫達の出番は、性質・見た目的にかなり後になってしまうのであった。

・〈その他の登場人物〉
・『間桐／遠坂　桜』
↓原作の展開から救済された子。養子に出されてからそれほど長く経っていなかったため、見た目の変化は小さく、精神もギリギリ繋ぎ止められていられた範囲内。
オベロンによって助けられた後は虚映の義兄妹として『朝露　桜』となっている。陰はあるものの、虚映のお蔭で原作より表情がよく出る。
助けられた時の『小さな小さなお姫様』というオベロンの言葉が記憶に新しい。今は虚映の知識を借りて『虚数魔術』の性質を学び、制御できるよう特訓している。

近所の人達からは”仲良しな兄妹”として認知されている、

・『雨竜　龍之介』

↓虚映が教会から帰って来て数日後に発見・捕捉され、『邪魔だから』という理由で始末された。

原作で海魔に喰われた男の子は、無事に来年小学校を卒業する。よかったね。

・『間桐　蔵硯＝マキリ・ゾォルケン』

↓蟲蔵の虫達を全部奪われて怒り心頭、激おこムカチャッカファイヤーなう。

オベロンのせいだとはバレてはいないが、時間の問題でもある。しかし、当のオベロンとは最も相性が悪いと言える。

・『言峰　綺礼』

↓無関心。強いてあげるなら『敵になる人物の情報が一人知れた』というだけ。

〈その他〉

・『虚構魔術』

↓虚映の持つ『無属性魔術』。”存在しないものを象る”術式であり、使う人によっては『ボクの考えたさいきょうのまじゅつ』ができあがる。

ただし、準備・展開・発動の全段階において気の遠くなるほどの時間がかかる。最長十年単位なんてザラ。さらには消費魔力もバカにならないので、虚映も初めは何度も死にかけていた。今でも過度になると視界が真っ赤になるレベル。

『ストック』という、術式を閉じ込めた宝石系統の結晶を作ることで瞬時に発動できる。それでも制作にかなりの時間と技術を要する。

自分の思い描いた理想の力ができる夢のような力であり、使い方を

一つでも誤れば即座に自滅する体内爆弾――いわゆる”デーモンコア”のそれである。

〈登場術式〉

・『星天投影鏡』

↓ホロスコープ。”その光景を目視する”千里眼とは違い、”未来に起こり売る光景を過去のものとし、それを投射する”もの。その特性のため、多人数で見ることができるが、再使用に最低でも一年はかかる。

ストック：計5回分（内三回は使用済み）

・『対・千里眼術式』

↓虚映がこの魔術系統の特性を知って真っ先につくりあげた、『千里眼によって自身を見られなくする』術式である。オベロン召喚後、『対人理』スキルを参考に術式を新しくしている。

なぜ作ったのかというと、「千里眼組に目をつけられるとロクなことにならない。主にマーリンとか」とのこと。

ストック：計7回分（内4回使用済み）

・『誤認隠蔽術式』

↓正体をわからなくさせる術式。相手からは、時には旧友、時には宿敵だったりと、その姿を誤認させることによって自らの能力などを隠蔽する。

複雑化はするが、見せる姿の指定もできる。ただし、多用しすぎると逆にバレやすくなる。

ストック：計12回分（内7回使用済み）

第四次終了時：設定

・朝露（あさづゆ）　虚映（こえい）＝アルレッキーノ
性別：男性
年齢：２０歳（第四次終了後）
誕生日：１０月１６日
身長／体重：１６８．５ｃｍ／５８．０ｋｇ
イメージカラー：グレイブルー／コアブラック
魔術属性：『五大元素：風』『虚構』
起源：『空虚』『隔執』

本編の主人公。普段は常識的で優しく、のんびりとしているが、内面は刹那的享楽に酔う精神破綻者。その正体は、『たった一人を排斥することによる、人類が望んだ自滅願望』を体現した存在。

転生者だが、前世にて周りと手を取り歩もうとした結果、嘲笑と裏切りによって孤立した。そのため、『正義の味方』や『勇者』などといった善性の塊をひどく嫌う

魔術属性は『風』の『共鳴』。一種のテレパシー系に長けている。こちらは家系魔術であり、諸事情によって継承不足なため、できることは少ない。

だが、代わりに固有魔術として『虚構魔術』を使える。属性としては『空』に当たり、望みと対価が充分であれば万象に携われる。ただし、相応の対価が必要であり、なおかつ非常にコスパが悪い。なので大抵のものはストックを使って賄っている。

現在は無人となった間桐邸を改造し、表向きには自身の大工房として所有している。とは言え、住んでいた和式邸宅の方も使用しており、家族団欒の際や貴重品などはこちらに置いてある。

将来に向けて就活中。なぜか知らないが、物理と数学の教師免許を取得済み（前世では苦手分野だった）。

・オベロン・ヴォーティガーン

クラス：〈キャスター〉→〈プリテンダー〉
第四次聖杯戦争からの虚映のサーヴァント。それまでは『妖精王（オベロン）』として振る舞っていたが、身内だけのときは『奈落の虫（三臨の時）』の姿になっている。
虚映のことは、藤丸立香（カルデアのマスター）が『好敵手』だとすると、彼は『悪友』だと認めている。ある程度の指示は聞きはするが、それ以外はお互いに好き勝手やっているそして大体は事後報告。
第五次聖杯戦争開始時までに、優しく嘆願（笑顔で恫喝）して、虚映作の”仮想宝具”をいくつか所持している。なお、この件に関して当人曰く、「手札は多ければ多いほどいい。そうだろ？」とのこと。

〈所持している仮想宝具一覧〉
・『堕穢せし湖光（ケイオス・アロンダイト）』
→『無毀なる湖光』の”なんちゃって”パクり宝具。過剰使用するとぶっ壊れる。不壊属性とは。
・『今は崩れし紺藍の魔城（コ■ブ■・オ■・■■■イ■■ム）』
→詳細不明。第四次から五年以内に作られたものとされる。半ば崩れた、血塗れの城壁が見える。
・『黄昏を臨む終秋の亡森（■■■エー■■■■■■ト）』
→詳細不明。第四次から五年以内に作られたものもされる。黄葉が吹き散る、夕暮れ時の森が見える。

・遠坂　桜　→　朝霧　桜
本来は間桐家の養子として惨たらしい日々を背負うところを、オベロンが救出したことにより、虚映の暫定的な『従兄妹』として迎え入れられる。『妹』ではないのは、色々と不都合な部分が見えてしまうからである決して個人的事情ではない。
魔術属性はもちろん『虚数魔術』。加えて、魔力量が人並み以上に開花したため、虚映の製作活動を手伝うこともある。魔術協会からの”

封印指定”対策として、虚映の『風・共鳴』も違和感を持たれない程度に習得している。
最近の悩みは食べ過ぎで太らないか心配なのと、いい加減子供扱いはやめてほしいと思う反面、このまま甘えたいと思う難儀な乙女心をどうにかしたいとか。

〈その他〉
・朝霧家両親、及び一族
はじめはマトモだったが、次第に非人道的なことに手を出しはじめていた。虚映を『作品』としか見ていなかったために根絶やしにされた。ナムナム。

・間桐家生き残り一家
↓虚映に殺されず、まだ冬木市のどこかに住んでいる。なぜか知らないが、通帳に贅沢しなければ普通に過ごせるだけのお金が入ってた。
犯人曰く、「ワカメは大事だから、うん」。

・言峰　綺礼（愉悦神父）
↓初めは愉悦できない（・ω・）としていたが、ギルガメッシュと居たとき（＝原作）と大して変わらず愉悦できているため、あまり不便していない。
ただ、遠坂家の資産に関してはザルになってしまうため、虚映に一任していたりする。やっぱりザルだった（なお、虚映はそれ含めて一度過労で倒れかけた。愉悦）。
虚映達とは、第五次が始まるまで不可侵としている。開始後に関しては言うに能わず。けどなぜかご近所さん的なノリになることが多い。

・遠坂家

↓遠坂母は原作通り記憶障害持ちになってしまっている。凛ちゃんは四苦八苦しながら頑張っており、いずれまた桜ちゃんと家族付き合いがしたいと思っている。

トキオミの葬式から一年後、間桐家と同じく贅沢しなければ数年は持つ程度のお金が振り込まれた。しかし、二年と経たずにすぐ溶けた。

犯人曰く、「サービスであげたら、なんかパッと消えてた。何言ってるかわからねー（以下略）」。

・虚映の通帳

↓間桐家は割と節約してる。遠坂家はすぐ溶けた。桜ちゃんの学費は問題なし。生活費も問題なし。

ただしお小遣いはあんまり無い。虚映は宇宙猫。後に彼は語った、「大金に胡座をかいてはいけない」と。妖精王は呆れていた。

第四次聖杯戦争／ｚｅｒｏ編
どうしてこうなる？

初めまして諸君、冒頭からいきなりで失礼する。いや、本当はこんな口調じゃあないんだけれども。少し自己紹介してもいいかしら、いいよね？

え？なんで唐突すぎるのかって？だってさぁ……。

「やぁ、初めまして。随分と面白い喚ばれ方みたいだね。おっと、自己紹介、自己紹介。僕はオベロン。妖精王オベロン。一応キャスターとして来てみたけれど、君がマスターでいいのかな？」

だれが”黒幕”を呼べと言ったのか、吊し上げて問い質したいぐらいです……。

話をしよう。割と慌ててるから言葉が雑になってしまうが。

オレの名前は『朝露（アサヅユ）虚映（コエイ）』。未だ人気のソシャゲ『ＦＧＯ』のプレイヤーの一人だった・・・。そう……あれは今から３６万、いや、一万……とか言うほど昔じゃなくて、簡単に言うと『周回してて周り見てなかった事故』なんですよ、ええ。

しかもテンプレ通りなら神様に会って「転生シマスカー？」みたいなこと聞かれるんだろうけど、そんなこともなくて。気づいたら転生してたというわけ。

転生した家はどうやら魔術師の家系だったみたいで、隠すまでもな

いことだから言うと、家系術式は『風魔術』に分類されるらしい。詳しいことまではついぞ教えてくれなかったから何とも言えないのよね、これ。

それと実はもう一つ、親にすら言ってないものがあるんだけど――

――それはまた追々。

そんなこんなで現在は二十歳手前、何をしているかと言うと――

――親のコネ使って冬木市にいます。なんで？

原因は分かっている。『親』だ。本当ならうちの父親が参加するはずだった『冬木の聖杯戦争』。けれど、魔術の実験中に術式が暴走。腐るほどの大金残して両親は物理的に蒸発。そして今に至る。

それから冬木市に到着し、親が遺していた深山町の一区画の家に引っ越して荷物を運ぶ。家はそこそこ大きいものの、前世で見た衛宮邸と比べると一回り小さいぐらい？かな。

中の整理をしていると、やっぱりありました地下室。降りていくと、まぁ呼び出す準備をしていたのだろう、書きかけの魔方陣が描いてあった。実際のところ、冬木市に来た瞬間、手の甲に鋭い痛みを覚えたから、もうマスターとしては登録されてしまっているんだろう。

どうしようもないので夜までお気に入りの本ども読むなりして時間を潰していた。

そして、刻限となる。

「はぁ……やりますか。

――素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。祖には――――――我が望郷アルカディア」

かつて聞いた理想郷。あるはずのない自由の都。そんな子供っぽいものでもいいだろうとオリチャーを入れてみる。ダメならダメでいいかな、と思ったし。

思えば、そんな気持ちがいけなかった。今さらだけど。

「――降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処ここに。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷しく者。

汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤のま――

――ツクチュンアアアイッ!!畜生めぇ!?」

やっちまっただぁぁぁ!!?そんなことあるぅ!?

こんな一世一代レベルの大事な場面で普通くしゃみなんかするか…?まぁいいさ、魔方陣もうんともすんとも言わないし、失敗だろこれ。

「はぁ～ぁ、くっだらね。止めだ止め。ま、聖杯なんてどうでもいいしねー。戻って寝るか――――っとと。って、あ」

緊張していたんだろうなぁ、硬い身体を背伸びをしてほぐそうと

思った。そうしたら、暇潰しに持ってきて、退かした机の上に置いておいた最近お気に入りの本――”シェイクスピア作『真夏の夜の夢』”――が魔方陣の中に落ちて――

「うおっ!?」

魔方陣がとびきりの魔力反応を叩き起こす。そこから現れたのは、メルヘンな絵本の王子様の様な格好をしたサーヴァント――――――

っておい、ちょっと待て。抑止よ、それは”アリ”なのか。

「やぁ、初めまして。へぇ、随分と面白い喚ばれ方みたいだ。おっと、自己紹介、自己紹介。僕はオベロン。妖精王オベロン。一応キャスターとして来てみたけれど、君がマスターでいいのかな?」

――と、ここまでが冒頭の出来事までの経緯と言ったところだ。そろそろ落ち着いてきたので話し方を元に戻そうと思う。

こうやって落ち着いたことでなんとなく読めてきたが、とりあえずはまぁ意志疎通を図るとしようか。

「あー……っと。そうだ、名目上オレがあんたのマスターということになる」

「それは良かった。この通り、お飾りの王様だけど、微量ながら君の力になるよ」

人当たりのよさそうな笑顔を浮かべるオベロン。はっきり言って、正体を知ってると胡散臭くて仕方がない。と、普通は思うだろう。
そもそも、ＦＧＯにおいてオベロンというのは、他人の心を読み通す『妖精眼』を持っている。だが、残念ながらオレには効かない。もう一つの術式が作用しているからな。
――というわけで、ちょいとカマをかけてみましょう。
「宜しく頼むよ――〝ライダー〟のオベロン」
「――。おいおい、しっかりしてくれよマスター。僕は〝キャスター〟だよ？」
うん、嘘だな。オレがライダーと言った瞬間に固まったのが見えていた。それに少し本性の片鱗が出ている。
とは言え、地下室でこうも長話するのも〝つまらない〟。なので彼を上へ連れていき、とりあえずは応接間に通す。
その後、応接間にだけ秘匿用の隔離結界を、なるべく他陣営に悟られないように静かに張る。そして、オレはオベロンの前に座り、喧嘩をふっかけてみることにした。
「さてと、これで他の奴らには聞こえないし知られない。というわけで――なんで来たのかな？『プリテンダー』」
「――へぇ」
オベロンの顔が変わる。さっきと変わらない微笑みを浮かべてはいるが、その笑みはどちらかというと、そうだな――『警戒』に近いだろう。
なので、勝負を仕掛ける。こういう時に前世の知識があると中々〝楽しい〟もんだ。
「惚けるなよ。――〝ブリテン〟、〝カルデア〟、〝藤丸　立香〟」
「……」
黙る。つまりは図星。やはりこのオベロンは間違いなく、ＦＧＯの２部６章の黒幕、現在と未来に対する大嘘つき。そして――
「『奈落の虫』」
「――驚いたなぁ。君、一体何者だい？まぁ別に知りたくもない

けどさ」
　オベロンがついに破顔する――――嫌悪の、だが。
　やれやれ、こんなのを召喚するなんて、オレも中々ヤキが回ったものだな。さて、ここからどうするべき、か。
「それに君、なんなの？俺の『妖精眼』が機能しないとか、本当に人間？」
「失敬な、まだ人間だよ。この先どうなるかは知らねぇけどな」
　さて、この先の『原作知識』とやら、ウロ覚えでどこまでいけるもんかね。現状はオベロンとの完全な協力体制の確立、本来のマスター候補である『雨竜　龍之介』の対処、そしてこの先の展開をどうしていくか。
　中々先の読めない状況になってきたけれど、存外、昔のような平々凡々な生活じゃあ味わえないような、面白味があるじゃないか。

とりあえず、作戦会議

目下のところ、今目の前にいるこのオベロンが、『妖精國のオベロン』であることが判った上に、恐らくはカルデアとの決着までの記憶を有している。それもそうだろうに。オベロンはカルデアに負け、奈落へと落ちていったのだから。

ただ、少し飛ばしすぎたのかもしれないな。さっきからずっと懐疑的な目で見られてる＝すこぶる警戒されてるわ、これ。うーむ、さて、どう話を綴っていこうか……。

「――――　んー、止めた。あんたと腹探り合うのはこっちに不利すぎる」

「はぁ？」

いわゆる快楽主義なオレからしたら、このオベロンと腹の内を探り合うのはちと不利に過ぎる。理由としては、

一つ、前世の記憶についての言い訳がしにくいにも程がある。

一つ、あくまで”光景を視る”ための『千里眼』と違って、”心を視る”ための『妖精眼』を誤魔化し続けるのには無理がある。

そしてなによりも――――『奈落の虫』にはストレートに話した方が”舞台”も盛り上がるだろう。

「そら、こっちの”偽装”も解いたから、なんで知ってるかぐらいはわかるだろ」

「情緒不安定かよ。というか、そこまで具体的には見えないっての」

あれ？そうだっけ、結構昔のことだからほとんど忘れてらぁ。と思ってたら、呆れたような表情からもっと呆れたような感じになってきた。あー、視てるなコレ。

……というか、オベロンって確か――――。危ない危ない、坩堝に嵌まるとこだったわ

「ま、細かいことはいいや。とりあえず、今後の方針と対策云々から始めるぞー」

「おいおい、俺が言うのもあれだけど、君が知ってる俺を信じていいの

かよ？」
　胡乱気な目でみてくるけれど、大丈夫でしょう。本当に”否”っていうレベルだったらとっくにこの世界のことぶち壊しに来てるだろうし。
「そりゃぁな、あんたの言葉は信用できないし、あんた自身は信頼できねぇよ」
「そうだろ？だったら――――」
「けどな」
　オベロンの台詞を遮る。確かにコイツの言葉は全部ねじ曲がって嘘だらけ。加えて『気持ち悪いから』っていう理由でブリテン諸共世界――――人類史を根絶しようとした、とある数学教授もビックリな”敵（ヴィラン）”。
　けれど、だからこそ言えることがある。
「あんたのやることは信頼できるし、あんたの信条は信用できる。一夜の狂騒？なら万々歳さ。
　――――夢で済むなら容赦なんていらないだろ？」
「――――。うっわ、本心から言ってるのかよ。何？君ベリル・ガットみたいな感じの奴？」
「失礼だなオメェ。誰があんな頭トンチキ渇愛マーダリオンだよ。――――まぁだけど、狂ってはいるわな」
　目の色が変わった。口元が釣り上がっているのが自分でもわかる。というか、そんなヤバそうな顔してるかね？これ。とか言いつつ、気分が高揚してるのはホント。
　魂胆の探り合いはこれでオシマイ。一旦空気を落ち着かせるためにテキトーにお茶を沸かして差し出し、自分も一緒になって飲む。
　あー、うまい、お茶うめぇー。キメてるわー、これ」
「本心声に出てるぞー。まぁそこそこってぐらいの味だけどさ。――――それで、ここからどうするのかな？”マスター”」
　お茶を置いてオレを見据えるオベロン。成る程、どうやら乗り気ではあるらしい。良き哉。
　なので、オレもお茶を置いて語る姿勢を取る。前世については後々

バレるだろうけど、そこはそれ。あくまで今は、開発中ではあるがオレだけの魔術礼装である”アレ”の結果としよう。
「まず端的に、今回の聖杯戦争の目標は”勝たない”ことだ」
「ふぅん……？つまるところ、あれか。ジョーカー的な動きしろってことかい？」
いいね、流石オベロン。”勝たない”の一言だけで動きまで読み当ててきやがった。そういう頭回るとこにシビれちゃうね。
「そーゆーこと。ぶっちゃけてしまえば、オレ達は聖杯が要らない。いるとしても”目的の為の保険”でしかない。なら結局は要らないだろ？」
「そうだねぇ。欲しがる理由も湧かないし、いいんじゃない？」
うーん、この。さすがにまだ三臨じゃなくて一臨の姿だけど、このなんとも言えない違和感としっくりくる雰囲気のこのチグハグ。流石はオベロンと言ったところか。
思考が脱線しかけているので路線戻して。基本的にオレもオベロンも聖杯はいらんのだよ。オベロンはいわずもがな、オレは割と本気で願いもなんにもないわけだからな。
「で、こちら当戦場の地図と要所ね。赤マーカーは”御三家”っていう、この聖杯戦争の仕組み考えた人達のいるとこ。青は特筆した龍脈のあるとこかね」
「中々準備が速いねぇ、僕のマスターは。――――それで？僕は何をすればいいのかな？」
お、役に入ったか。ならうだうだ言ってもしょうがないから、あんまり大事じゃないやつだけはしょって伝えましょうかね。
「そうだな、まずは――――――――――」

～冬木教会～

成る程、ここがアイツのハウスなわけね（唐突）。しかしまぁ、聖杯戦争において大事なプロセスとは言え、あんまり気乗りしないなぁ。

だって……ここにうちの情報与えたら、あの愉悦神父にももれなく伝わるってことだし。あーやだやだ、憂鬱なんじゃい。

「（文句言ってないでさっさと行ったら？僕も忙しいんだけど）」

うーんひどい（棒）。さてと。そんじゃま、顔も整えていきますかねぇ。はぁーどっこいしょー。

――――教会の扉が開かれる。言峰　璃正　は応対をするために作業を中断し、入ってきた御仁を出迎える。

聖堂へ入ると、そこに居たのはまだ年若い少年だった。だが、中々に修羅場を潜り抜けてきたどあろう風貌でもある。

――――この少年、只人ではない――長年の経験からそう直感した璃正は、彼に話しかけようと近寄っていく。

「ようこそ、冬木聖堂教会へ。如何されたかな？」

「お初にお目にかかります。私は　朝露　虚映　と申します。聖杯戦争における参加表明をしに参りました」

やはりか。璃正はそう思わずにはいられなかった。年若いものの、相当の修練を積んだであろう身のこなし。そして、只人ではない気

配。
「成る程……」
「もしや、規定違反でしたか？」
――若いのに、よくできた子だ――。
そう思いながら、困ったように眉を下げる少年に慌てて璃正は訂正を入れる。
「いや失礼、考え事を少々。勿論問題ないとも。ましてや、君が一番最初だ。それで、君のサーヴァントはどこかな？」
「当方のサーヴァントは現在、諸事情で席を外しております。なので、私の方からクラスと真名の登録をば、と」
はて、諸事情。喚ばれた土地に張り付けになるタイプのものか、はたまた自らは動かないタイプのものか。そう考えるも、今は彼からの答えを聞くことにする。
「承知した、少々待ちなさい。――――――待たせたね。では、宣誓と共にサーヴァントのクラスと真名を」
「私、朝露　虚映　は、聖杯戦争に参加することをここに宣言する。我がサーヴァント、クラスは――――〈キャスター〉、真名を〈オベロン〉」
璃正は、告げられたその名前に驚く。オベロンと言えば、シェイクスピア作、『真夏の夜の夢』で一躍有名になった妖精王であり、その存在は璃正でも触り程度ではあるが知っていた。
しかし、その妖精王に関する聖遺物なぞついぞ見つからず、そもそも創作上の存在だとされて見向きもされていなかったものだ。
どう喚んだのか、なぜ喚べたのか、興味がないわけではないが、それを監督役である自身が聞くのは越権行為に値するとし、自重することにした。
「――うむ。これで登録は完了した。君の武運を祈る」
「――お客人ですか？」
奥から声がかかる。振り向けば、自分の息子である『言峰　綺礼』が歩み寄ってきていた。
「おぉ綺礼か。丁度いい、彼は朝露虚映君と言ってね。お前と同じ聖杯戦争の参加者だ」

「朝露です。宜しく」
ふむ。やはり綺麗なお辞儀だ。礼儀がしっかりしている。彼らには是非とも生き残ってもらいたいものだ――――。

――――げぇぇぇ!!?綺礼!?綺礼ナンデ!?
最悪だ。初っ端から最悪な相手に顔知られちまったよ。
あーもーやだ帰りたい……帰るけどさぁ！（逆ギレ）
「やぁ、おかえりマスター。随分と楽しそうだね」
「へいへいそりゃどーも。そっちも”虫蔵”掌握オツカレサン」
うっへぇ、嫌味の応酬で笑うしかねぇわ（笑）。
オベロンにはオレが教会に行っている間に、戦力として某虫爺さんの虫蔵を掌握してもらいにいってたってわけ。
オベロンは『奈落の虫』だからこそ、虫の死骸やらなにやらを攻撃に転用できる。なら配下にする虫が多ければ多いほど強化されるのでは？と狙わせたわけサ。
お陰様でオベロンからは、『嫌味か？』と随分と睨まれちゃたけどねぇ！お互い様だよねぇ、あっはっはっはっは！
「んで、もしかしてその子――――」
「ん。あぁ、そうそう。蔵の中にいたから連れてきたよ。君、こういうの好きでしょ？」
んー、やっぱ間違いねぇな。”間桐”――――いや、まだ『遠阪桜』だな。だいぶ汚されてはいるがまだ問題ない。心臓の虫も……あー、こりゃぁ真っ先に無力化されてんなぁ……。
ってか、ここに桜連れてきちゃカリヤおじさん参戦理由どうすんの？身代わり必要になっちゃう系はやだよ？あーもーメンドクサイ

なぁ　もおおおっ。

裏話・オベロン①

――落ちていく、堕ちていく、墜ちていく。ゆっくりと、永遠に、永久に、落ちていく。

”堕ちた妖精（モース）”を放ち、カルデアに取り入り、モルガンを討ち、厄災達を解き放ち、あの厄介な神の死骸だって消してくれた。お膳立てはバッチリだった。実際、もうブリテンの跡は”奈落の虫（オレ）”が食らい尽くす　だけだった。

けど、負けた。いや、正確には目的の前半――ブリテンの崩壊はほぼ完了していた。けれど、人類史の破壊までは出来なかった。

英霊になったアルトリアと、それを信じたカルデアのマスター　――『藤丸　立香』。ほんと、憎らしいぐらいにキラキラ輝いてて、それがもう、本当にうざったらしくて。

――あぁでも、せめて”君”に会うことができたなら。

叶わないことを、鼻で嗤う。なんだ、充分に未練たっぷりじゃないか。

空が閉じる、瞼も閉じる。空を視た、星を視た。ならもう充分だ。あとは眠るだけ。永遠に醒めない、深い深い夢に――――――

――それなのに。気付けばこんな場所に、またサーヴァントとして喚ばれて、思いっきりため息を吐きたくなったさ。

聖杯戦争？やれやれ、あのカルデアのマスターみたいな奴じゃなけりゃいいんだけども。ま、そうじゃなくても騙してさっさと帰らせてもらうんだけどさ。

けれど――――俺を喚んだマスターはおかしなやつだった。

『よろしく頼むよ。”ライダー”のオベロン』

『――――』

思わず閉口してしまったよ。いやぁ、今思うとあれは悪手だったねぇ。多分あれで確信を持たれたよ。一体どうしてバレたんだろうね？

それから自己紹介してもらって、尋問まがい――――っていうか、アレ確信持った聞き方だったよね。そもそも、あのお話を一体どこから知ったのやら。

ぶっちゃけ言ってしまうと、俺より怪しかったよね。いやほら、普通は自分だけが知ってるはずのこと言われると怪しむものじゃない？俺だって同じことしてたから、そういうの判るからね。

かた思えば急に「止めた」とか言う。なんなの？情緒不安定なのかな？そう思って素直にぶつけてみる。

――――振り返って見せたその笑みを見た瞬間、俺はアイツのことがよく判った。”あぁ、コイツ同類か”ってね。

『夢で済むなら容赦なんていらないだろ？』

俺がブリテンという島――言ってみれば、”神秘”という概念が望んだ『破滅願望』に対して、コイツは多分、人類が生み出した、人類悪とは別の『破滅願望』なんだろう。もしくは、そうあれとされたか。

ぶっちゃけ、割と本気でお仲間なんて欲しくないし、ぶっちゃけ嫌いだからサボろうかと思ったけど、なんとなく”面白そうだ”とも思ってしまった。

「そうだな、まずは――――オレがなんで未来を知っているかを教えようか」

「おや、そういうのって教えてもいいのかい？」
ちょっとそれは予想外だった。確かに、なんで俺――――僕のことを知っているのかは気になってたけど、ええ？そういうのってもっとこう、引きずらない？
「オレがなんで知ってるかっていうと、オレの魔術属性が関わってくるんだわさ。
オレの魔術属性は『風』――――ってのは表向き。本当は『無』属性の『虚構魔術』っていうやつなわけ。まぁ諸々の説明は省くけど、それで作った魔術式の一つに、『星天投影鏡（ホロスコープ）』っていう、まぁ擬似的な未来視だな。それで視たってわけ」
ふむふむ、成る程――――うーん、嘘でもないけど本当でもない、ね。まだ何か裏があるんだろうけど、何かまでは解んないか。
にしても、擬似的な未来視ねぇ……。
「それは、『千里眼』とは違うのかい？」
「全く違うな。『千里眼』はあくまで〝光景を目視する〟ものだ。対してこっちの『星天投影鏡』は、〝未来に起こるであろうことを過去にして現実に映像投射する〟ものだ。
ま、簡単に言えば、直に目で視るか、映画みたいにして見るかの違いだな」
「――――――――」

いやはや……正直、絶句ものだ。確かに、性能的には『千里眼』の方が優れているだろう。けれど、こっちはそれよりとんでもない。だって、言ってしまえばこれは――――――
未来に起こりうることを多人数で見れるってわけだ。
そんなの、ぶっ壊れにも程がある。それでよく〝抑止〟に目を付けられていないな、と思ったけど、よくよく思い返したら言ってたじゃん。――『虚構魔術』って。
〝虚構〟。つまり、〝存在しないものを象る〟ということ。ならそこから推測して大体のことを理解する。
「ふんふん……。つまり、〝抑止〟とかにバレたら間違いなく目を付

けられるけど、その『虚構魔術』のお蔭で誤魔化している、と」
「全く、お前さんほんと流石だよ。こちとら全く説明してないんだがな」
おいおい、今回の僕のマスターほんとぶっ壊れすぎだろ。流石の僕でもひきつった顔になるぞ。
そんな俺の内心を知ってか知らずか、まだまだ会議は終わらない。
「まぁ、言うて発動までにバカみたいに時間かかるし、消費魔力もバカにならんしでー、ってまぁ、それは『虚構魔術』全般になんだが。
そういうわけだから、『星天投影鏡』で見た未来――――”オベロンが参戦しなかった場合の未来”でのストーリーから考えて動こうと思う」
「ちなみにだけど、僕じゃなかったら本来誰になってたのさ？」
「『ジル・ド・レェ』」
えーっと？――――うわ、興味本位で聖杯から情報覗かなきゃ良かったよ。なにこいつ、ほんと、人間の醜いところを浮き彫りにしたような奴じゃん。
ほんと、人間ってこういうやつを生み出しては消そうとする。醜い上に吐き気がしそうだ。
おっと、話に戻らないとね。
「ごめんごめん、続けて？」
「おう――――アレで視た通りなら、参加するマスターはオレを除いて六人。

まず、〈ライダー〉イスカンダル。マスターはウェイバー・ベルベット。
マケドニアの征服王だな。コイツは余程のことがない限り相手にする必要はない。敢えて狙うなら、マスターが未熟なのを狙って見誤った判断を誘うのが有効と考える。

次に、〈ランサー〉ディルムッド・オディナ。マスターはケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

コイツはぶっちゃけそこまで脅威じゃない。強いていうなら宝具にさえ気を付ければいい。マスターも水銀を操ってきはするが、『戦争』を貴族の嗜みか何かと勘違いしてるド阿呆だな。無視だ無視。

んでもって〈バーサーカー〉ランスロット。マスターは間桐　雁夜」
「は？いや待て待て。え？アレってバーサーカーになっちゃったの？」
静かに頷かれる。うへぇ、どんだけ執念貯まってんだよ。はぁ……”アイツ”から”最優の騎士”とか言われといてソレとか、笑い話にもならないね。ま、他所から聞いた話なんだけどね。
妖精國の”ランスロット”――いや、『メリュジーヌ』はあれを元にしてるっていう話だったけど、そんなことになってたんだねぇ。これだから人間は。
「コイツはお前さんの”本当の真名”を明かさない限りわからんだろうけど、コイツ自身は場合によってステータスの隠蔽やら変身やらしてくるから、嵌められないようにしないとな」
「何時から聖杯戦争はなんでもアリ大会になったのさ……」
いやほんと、聖杯戦争ってそんなトンチキなものだっけ？なんだかよくわからなくなってきたなぁ……。
あれ？もしかして、あいつの居たこの汎人類史って、相当メチャクチャだったりする？えぇ……。
「おーい、放心してるとこ悪いんだが、ここからが本題だぞー」
「あ、あぁうん、大丈夫だとも」
危ない危ない、まだ話は終わってないのにのんびりするところだったよ。まぁ、のんびりしてても勝てるだろうけどね。流石にアルトリアとか出てきたら気まずいのはあるけど。
「さて、ここからが本題というより、要注意陣営だな。こいつらがキーマンセルに成り得る、てか成る。

一人目、〈アサシン〉百貌のハサン。マスターは言峰綺礼。
サーヴァントの方は単純にワラワラと出てくるアリみたいなもん

だけど、厄介なのはマスターの方だ。端的に言うと性根の腐った聖職者。アイツ相手に近接戦闘はご法度だな。

二人目、〈アーチャー〉ギルガメッシュ。マスターは遠坂時臣。

こっちはマスターも強くはあるが、より警戒すべきはサーヴァントの方だ。

世界最古の王、”英雄王”とも称されるギルガメッシュは無尽蔵とも言える宝具をこれでもかと撃ってくる。しかも『千里眼』持ちときた。コイツに関しては”関わらない”ｏｒ”即・撤退”だ。

こいつらは互いに手を組んではいるが、ギルガメッシュの影響で言峰が裏切る。ま、残念ながらそれが何時か詳しいところは解らんがな」

ふむふむ。英雄王、ね。如何にもな奴が出てきたもんだね、いやほんと。口には出さないけど、僕はそういうの大嫌いなんだよね。

わざわざ関わる必要もないし、放置放置っと。やれやれ、中々面倒臭いメンツばかりで困るね――

「三人目、〈セイバー〉アルトリア・ペンドラゴン。マスターは衛宮切嗣」

「――――は？」

は？いや、流石に”は？”ってなるだろそれは。何？ウワサしてたら出てきましたっていうのか？勘弁してくれよ……。なんで汎人類史に来てまでアイツと顔会わせないといけないんだ。

セイバー、ね。汎人類史側とは言え、やっぱり面倒臭いな。別人とは分かってるけど、顔は絶対そっくりだろ。”アルトリア”なんて名前なんだし。

「目下のところ、こちらの最大の脅威は〈アーチャー〉と〈セイバー〉の陣営だ。特にセイバーには、お前さんの本当の名前を知られた時が一番マズイ。

ただ、脅威度はギルガメッシュの方が高いな。理由としては、セイバー――アルトリア側はマスターとの不和と、奴自身の身勝手な理想・夢想のせいで軽度の弱体化がかかってる」

「あ、そうなんだ。まぁどうでもいいけど。それで？僕は何をすればいいのさ？」
作戦は聞いた、さっさと切り上げよう。――――全く。理想を抱いて逝くのはどこのアルトリアも同じなのかい？ほんっと――――気持ち悪いね。
「そう急かさんな。まずオベロンには間桐邸に行き、そこにある、とある”蔵”の中を掌握してもらいたい」
「”蔵”ぁ？なんでまた」
”蔵”だなんて、また遠回りな。――――って思ったけど、蔵っていうぐらいだから、何かしらの聖遺物でも保管してあるのかな？
今のマスターの魔力量だと、良くて”オベロン”のままだ。”■■■■■■■■”になるにはあまりにも足りな過ぎる。それに、カルデアと戦ったときよりも遥かに弱体化してるからね。なるべく早めに戦力増強を――――
「ただの蔵じゃないぞ？その名も”虫蔵”さ」
「はははは、早速死にたいのかな？僕のマスターは。あぁ、寧ろ殺されたいのかなぁ？」
いい笑顔で言い切りやがって、腹立つなコイツ。俺が人間も、妖精も、虫も、何もかも気持ち悪くて大嫌いなのぐらい”ホロスコープ”で知ってるだろうに。
割と本気で殺してやろうかな、と”槍”を出そうと思ったけど、慌てた様子で待ったをかけられる。
「待て待て待てっ、ちゃんと理由があるんだって。
――――オベロン、お前さんは『奈落の虫』だ。言ってみれば、虫の死骸やら何やらで象られた”穴”だ。なら、少しでも触媒が多いほど助かるってものだろう？それに、あそこの虫のほとんどには魔力がそれなりにある。戦力にも糧にもなると思ったわけだ」
「ふぅん……。一応考えてはいるみたいだね。いいとも、掌握すればいいんだろう？」

――――と、ひと悶着あったのも数時間前。会議中に見せてもらった地図を頼りに間桐邸にたどり着きました、っと。

あー……なるほど。これは酷いね、吐き気がする。僕が嫌いなタイプだな。一番反応がでかいのがいるけど、後でいいや。さっさっと”虫蔵”?だったっけ。掌握してしまおうか。

――――あのさぁ……僕こういうのほんっと嫌いなんだけど。うじゃうじゃと有象無象に蠢く虫達の中に放り棄てられた裸の少女。まるで、あの時の僕みたいじゃん。

――あぁほんと、反吐が出る――――

気付けば少女を助けてしまってるし。って、心臓に虫?いいや、そこ退いてくれる?あ、あとついでに”それ”にへばりついてるヤツも取ってきてくれる?

うーん、別にどうでもいいんだけど、助けちゃったし……まぁ、マスターに任せればいいか。僕は預り知らないことだし。後なんか喚いてる”虫”がいるけど、放置でいいよね。長居してると鳥肌立ちそうだよ。

――さ、行こうか、ブランカ。今度の僕らは、どんな結末を迎えるんだろうね。最初の目的である、汎人類史の崩壊か。はたまた、カルデアの奴らみたいに、誰かを助ける”英雄”になるのか。

願わくば、今度は巧い具合に事を進めたいものだね――――

戦線開幕

――他愛ない――

――地を這う虫けら如きめ――

――ぐぁっ!!?――

「うーん、やっすい三文芝居だなぁ」

二人して同じ意見を交わしてしまう。いや、仕方ないだろこれは。アニメ見てた同時は『おぉー』とか思ってたけど、実際こうやって見ると安いにも程があるってもんだよ。

と、自宅で、予め起動しておいた”ホロスコープ”を覗きながら、ポップコーン食べながら見させてもらってます。うめうめ、あんまし好きじゃないけど。

さて、これでもうストックしてある”ホロスコープ”の起動術式はなくなったわけだ。けど、遠目の観賞はここまでいいだろう。あとは実地観戦だな。

「んで？一応あの台座に”虫”を張り付かせてるわけだけど、壊すの？」

「うんにゃ、当分は無視よ。本格的な戦闘は明日からだからな」

ソファーの背もたれによりかかる。そんでもって背伸びをする。やれやれ、仕込まないといけないものが多くて困っちゃうね。ま、是非もナイヨネッ！

然程じゃないけど重い腰を上げて書斎に向かう。ひょっこりとオベロンも付いてくるんだが……まぁ、いっか。

この書斎は、平時はただの書斎だ。だが、ある手順で本を動かすと、

机が上がり、下からオレが今まで貯蓄してきた各種『虚構魔術』の発動結晶がしまってある。
オレの『虚構魔術』はどれだけ効率化しても、びっくりするほど時間がかかる。だから予め、一工程（シングル・アクション）で発動できるよう、起動式のみを外した全工程をこの結晶に閉じ込めてある。
ちなみにこの結晶、貴金属系であればなんでもいいのです。市販オッケー安上がり、うーん、オイシイ。ただし強度は保証しない。
「んーと、〝コレ〟と、〝コレ〟と……」
「うーわ、ナニこれ。えっと――『虚式魔導砲術式（ホロウ・マナカノン）』、『魔眼屈折反射術式』、『対・千里眼術式』……いやほんとに何これ」
なんかオベロンがドン引いてる感じがするけど、オレは知らん。生き残るためだったからなぁ、兎に角作りまくったんだっけ。特に〝千里眼組〟には目をつけられたくなかったからね。
ちなみに『対・マーリン用対抗術式』もあるヨ。
さてさて、それじゃあ引っ掻き回しにいきましょうかね。
「さ――――Ｉｔ，ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ．だ」

――――夜風吹き抜けるコンテナ置き場。そこに駆け抜けるような足音がいくつか鳴り響く。そして、ふと、とある場所で止まる。
そこには、二振りの槍を持った青年が佇んでいた。やがて、鎧姿の女騎士と青年がぶつかり合う。それを遠目に見る狙撃手が二人。そして、クレーンの上から眺める〈アサシン〉が一体。
――――次いで、どこからも死角となるコンテナの陰から、ひょっこりと顔を覗かせる二人の姿。
「(うーん、あれが汎人類史のアルトリア?なんというか……鳥肌が立ちそうなんだけど)」
「(おう、間違いなくお前さんの反吐が出る『正義の味方』サマだよ)」
こっそりと戦闘を観賞しながら、念話でコソコソ話をする虚映とオベロン。本来ならば虫を放てばいいだけの話なのだが、戦場の空気感や相手の気配を知るためにも、この戦場へと来ていた。
しばらくして、拡声魔術でも使っているのか、恐らくはランサーのマスターのものであろう声が戦場に響く。

――――そこのセイバーは難敵だ、速やかに始末しろ。宝具の開帳を許す――――

「(遅くないか?いや、順当なんだろうね)」
「(まぁな。様子見しすぎってのは否定しないけど)」
そうこうしているうちに、ランサーが宝具である『破魔の紅薔薇(ゲイ・ジャルグ)』を開帳し、セイバーを追い詰めていく。
ふと、オベロンが他所を向く。何事かと思い、目線のみを向けると、どうやら”虫”からの報告を聞いているらしかった。
「(〈ライダー〉が動いたってよ)」
「(そうか、ならそろそろ、一幕目の中盤ってとこかね)」
視線を戻せば、セイバーはランサーの隠し種にしていたもう一つの宝具――『必滅の黄薔薇(ゲイ・ボウ)』を避けきれず、あえなく”聖剣”を封じら

れてしまっていた。
「(あーあ、バカなの？片腕で戦えるとか、あのアルトリアとは１８０度違うなぁ。気持ち悪っ)」
「(本音出てんぞー、〝キャスター〟)」
今にも唾を吐き捨てそうな勢いで嫌悪感を露にするオベロンと、ケラケラとしながらも窘める虚映。
そして、セイバーとランサーが互いににらみ合い、再びぶつかり合わんとした、その時だった。

『Ａ―ｒｒｒｒｒｒｒアィッ!!!』

「「(いぃや、うるさっ!?)」」
地に轟く落雷と共に、天を揺るがすような大声が響く。あまりの大声に二人共耳を塞ぐ。
キンキンと耳鳴りがしながらも視線を戻せば、〝ライダー〟――――イスカンダルが名乗り上げているところであった。彼のマスターたるウェイバーが文句を上げているが、デコピンで黙らされてしまう。
「「(うわカワイソー)」」

「うぬら――――一つ我が軍門に下り、聖杯を余に譲る気はないか!!」
そんな大声量が、虚映達が潜むコンテナ裏まで聴こえてくる。聖杯戦争の仕組みやどういう代物なのか、前世の知識で知っている虚映はもちろん、オベロンもまた、そんな阿呆の極みのようなイスカンダルの台詞に――――苦しそうに口元を抑えていた。
「(わらうのはいいけど、バラすなよ。ここでバレるとかナイからな)」
「(わ、かってる、けどっ――――バカみたいで、っ)」
その間に、イスカンダルとセイバー・ランサーの会話、というよりも、戦闘を中断されたことへの怒りが叩きつけられている。
そして、それをさらりと流したイスカンダルは、高らかに腕を広げては声を荒げて叫ぶ。

「――――そうとも、他にもおるだろうが!!闇に紛れて覗き見してる連中は!!己が胸に誇りを抱く英霊ならば!今、ここに!その姿を現すが良い!!なおも顔見せを怖じる様な臆病者は!

――征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ!!」

「(出る?僕は嫌だよ?)」

「(こっちも願い下げじゃい。べーってしてやりてぇ)」

顔をしかめて不動のまま見続ける。すると、T字路となっているコンテナ通りの街灯に、金色の光を放ちながら、一体のサーヴァントが現れる。

――それは人ならざる神の如き輝き。紅い双眸を、不機嫌そうに見開いて、その口を開く。

「――我(オレ)を差し置いて王を称する不埒者が、一夜に二匹も湧くとはな」

サーヴァント――ギルガメッシュ。古代メソポタミヤ王朝における人類最古の英雄王。その眼には、万象見通す『千里眼』を持つという。

しかし、その『眼』には、虚映達の姿は映っていなかった。故に、ギルガメッシュはこの戦場に立つ前、己の眼に見通せぬものがあることに苛立ちを抱いていた。

その原因は何を隠そう、虚映の術式によるものである。今晩持ってきた、というよりも、この術式を完成させたその時から使い続けている術式――『対・千里眼不可視化術式』である。

これにより、虚映、並びにオベロンは『千里眼』による認識がされることがない。

――つまるところ、『アヴァロン・ル・フェ』において、マーリンがオベロンを認識できなかった原理と同じであり、それこそが、オベロンの持つ『対人理』スキル、その魔術式化としての完成形である――。

「――我が拝謁の栄に佳くして尚、この面貌を見知らぬと申すのなら、

そんな蒙昧は生かしておく価値すら――――ないッ!!」
「(よく見ておけキャスター。あれが英雄王ギルガメッシュの主要宝具――――『王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)』だ)」

ギルガメッシュの背後より、金色な波紋が浮かび上がる。そこから、神話級に匹敵するであろう、”神秘”を宿した武器が、その先端を覗かせる。
間もなく撃たれる――――その瞬間、彼らの視線の端に、黒く蠢くものが現れる。目視では、辛うじて人型であるとわかるが、それ以外――ステータスなどといったものが全く見えない。
「(――――で、あれがランスロット、ね。随分と酷い姿になっちゃってまぁ……。僕はあっちの方が好きだけどね)」
『Ｕｕｕａａａａ……』
「――――誰の赦しを得て我を見ている。狂犬めが。せめて散り様で我を興じさせてみせよ、雑種」
”神秘”を秘めた武具が、波紋より発射される。そして――――ランスロットに向けて、炸裂する。
だが、当のランスロットは全くもって無事であり、それどころか、ギルガメッシュの放った武具を手に取り佇んでいた。
イスカンダルの称賛を余所に、怒りに顔を歪ませるギルガメッシュ。その怒りと共に、黄金の波紋を幾重にも展開する。波紋から放たれる無尽蔵の”宝具”達。その全てをランスロットは弾き、打ち返し、叩き落とす。
――――それこそがまさに、”無窮の武錬”。
「――――痴れ者が。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるなど――――万死に値する!!」
加速する戦況を見つつ、オベロンと虚映は戦力分析を積み重ねていく。
特に虚映の脳内では、膨大なほどのトライ&エラー、そして、分析結果によるサーヴァントの性質・性格を踏まえた作戦が立てられていた。

「(あのギルガメッシュは最も傲慢だった頃。だからこそ、倒すのならば戦争が終わる前にケリを着ける。しかしこの後にギルガメッシュは必須……アルトリアは聖剣が封じられている為、戦力が激減。それらを踏まえた作戦は……しかし、ランスロットのマスターがカリヤだとして、その目的・利用価値は――――)」
「(……)」

それから戦況は進み、ギルガメッシュがマスター――遠坂時臣の令呪によっては撤退し、その場はお開きのような雰囲気となる。
それを感じ取った虚映達もまた、撤退の用意をする。
「(――さて、戻るぞキャスター。こちらも仕掛けを動かさにゃならん)」
「(はいはい。”アレ”だろう?どこで仕掛けるのか見物にさせてもらうよ。――――まぁ、”■■■■■(アレ)”を模造するって、相当物好きなんだろうけどさ)」

「――――……むぅ?」

”呪塊妖精”

夜半の刻、誰もいない道路、何も起きないはずはなく……。
というわけで、やってきました。ジル・ド・レェ登場シーンのアソコ。まぁ正確には遠視の魔術で見てるわけなんですが。
ここでセイバーさんにはちょっとした実験に付き合ってもらおうと思っていまーす。まぁ、実験っていうとどこぞの”殺しが愛情表現な奴”みたくなるから嫌なんだけども。
「さてと、んじゃまキャスター。ＧＯ」
「メンド――んんっ、結構気が引けるんだけどね、これ」
遠視で見ている景色に、影が蠢く。さてさて、一体どんな風にやってくれるんでしょうかねぇ？あの”騎士王”サマは、さ。

――――夜。無人の道路を疾走する一台の車両。街中で走れば即通報もののスピードで、粗っぽいながら割と正確な運転をする。
「ね、ね！結構スピード出るものでしょう！」
「お、思いの他、達者な運転ですね……」
峠の道を走り屋のように駆け抜ける。歓声を上げながら乗ってい

る女性――アイリスフィールと、苦笑いしながらも護衛とさて付き添うセイバー＝アルトリア。
巧みな運転と強烈なスピードで走るそれは、常人から見ても相当なソレと伺える。
「専門の運転手を雇っても良かったのでは……」
「ダメよ、つまんな――あいや、危険ですもの。ここで敵に襲われたらどうするの？」
などと言いつつ、割かし運転を楽しんでいるアイリスフィール。そのはっちゃけた姿に、なんとも言えない状態になるアルトリア。
ふと、顔を前に向ける。アルトリアは遠目ながら、何かが”居る”のを視認した。
「――――止まって！」
ブレーキを踏み、急停止する。スリップ音を鳴らして軽く滑りながらも、蠢くものから少し離れた位置に止まる。
「アイリスフィール。車から出ないで下さい」
そういってアルトリアは車の外に出る。
ゆらゆらと揺らめく”影”。まさしく尋常ではない様子だった。アルトリアはもしもに備えて、『風王結界（インビジブル・エア）』を纏った聖剣を喚び出す。
「貴様――――何者だ」
「――――……しし死ぬっててなｎだぁあぁ？ここｋろしｓｔらわｋるかなぁあ？あはｈｈはは」
ベトリ、ベトリ。糸の切れかけた操り人形が歩むかのように、ゆっくりと向かってくる”ソレ”。不気味な声をあげ、人なのか本当に怪しさを覚える。
そして、次第に姿がライトに照らされると――――――

――”ソレ”はまるで、泥でできたかのような、醜い人型の、青年のような”ナニカ”だった。
『ひっ!?』
「そこから離れないで下さい！」

「Ｃｏｏｌ！Ｃｏｏｏｏｏｏｏｏ■■■■■■■――――!!』
やがて、ギリギリ保っていた人としての姿も崩れ落ち、不定形（スライム）な影のような姿となる。不協和音のような鳴き声を上げながら、にじり寄ってくる”ソレ”。
「止まれ！それ以上近寄れば斬る!!」
アルトリアがそう声を上げた、その時だった。
『■■■■――――――!!』
「くっ、侮るなっ!!」
突然”ソレ”は自らの体から触手のようなものを伸ばし、アルトリアを捕らえようとする。”直感”で、”ソレ”に触ること自体良くないものと感じ取ったアルトリアは、聖剣で触手を切り裂いていく。
『■■■■――――――!?』
恐らくは苦悶の声と思われる絶叫を上げながら、くねり悶える”ソレ”。
最早、人ではないと判断したアルトリアは、聖剣を振り上げ、一刀に斬り裂く。今度は悲鳴も断末魔も上げることなく、ただ塵となって消えていった。
「セイバー、大丈夫なの？」
「ええ、ですがアレは……」
アルトリアは自らの記憶を遡る。斬り裂いた一瞬、アルトリアはあの”影”から、自らがよく知る気配を感じた。それは、時として自らを助け、時として自らの”仇敵”として現れた存在――
「（――あれは間違いなく”妖精”の気配……だが、私の知るものよりも禍々しく、そしておぞましい。一体、何が……）」

――――と、まぁめでたく騎士王サマは勝利を刻みましたよ、と。うーん、やっぱり〝モドキ〟程度じゃ話にならないか。にしてもあぁまでバッサリいくとは……人の心ないのかね？（外道）

皆さんお気付きの方はお気付きだろう、オレが何を生み出したのか。やれやれ、勘のいいガキは嫌いだよ。

そう、何を隠そうオレが生み出したのは、お馴染み『2部6章：アヴァロン・ル・フェ』に登場した〝堕ちた妖精〟こと『モース』なのさ！（デデドン）

とは言え、本来のモースは妖精達によって殺された『神様（ケルヌンノス）』からの〝呪い（罰）〟によって生まれたものであり、オレがやったのはそのモドキでしかない。だから本来のモースよりも呪いの力が弱いし、動きもトロいったらありゃしない。

「やれやれ、マスターも酷いものだ。まさか人間にモース毒を打ち込むなんてね」

「オレの発想じゃねぇーよ。〝前例〟がいたからやってみただけだ。今後はやらんよ、多分な」

心底嫌そうな顔をするオベロンに、オレはそう返す。なんで嫌そうかっていうと、オベロンは、『オベロン』になる前は『モースの王』として活動していた。なら、モース毒だって作れるのでは？とダメ元で聞いたわけ。

そしたらなんかできちゃったから、丁度都合のいい器もあったし、それに注入してハイ完成。名付けて『ゲル・モース』。うん、そのまんまだな。嫌なのは存在じゃなくてオレのネーミングセンスな、ガハハハ。泣きそう。

「とりあえず、仮称ゲル・モースより、単純にモース毒を固めた量産体の方が効率いいな」

「確かにね。モースを作れるって解ったお陰で、力もある程度戻ってるみたいだし」

椅子の背凭れによりかかりながら、結果を資料にまとめていく。お陰様ですこちらファイル五つ目でございますよ畜生。

ひっぱり出せば意外と色んな手札あるからな、オベロンって。中々面白い”ゲーム”ができるってもんよ。
「そういえば、マスターは傭兵なんてやってるんだっけ？お金なんて腐るほどあるのに、なんでそんなのやってるのさ」
「趣味。つまらん平穏より刺激的なもんが欲しい、以上」
次の策を考えながら答える。だってそうじゃない？前世でも、特にやれることもやりたかったこともなかったわけだし。無駄に平和だと惰性に生きるしかないからねぇ、つまらんつまらん。
っとと、まぁ下らん話は置いといて。つか、いきなりなんでそんなつまらん質問するかね？お陰で”戦略（ルート）”組み直さにゃならんくなったわい。忘れん坊は困るネ。
「急にどないした、そんな質問。お前さんにゃ珍しい」
「いや？ただの興味本意だとも。ところで、あの子はどうするんだい？」
ほほん？なるほど、こういう会話からマスターについて知ろうとするわけか。まぁ、いいけどさ。
とは言えだ。確かに桜ちゃんの今後については考えないといけないな。ただでさえあの子は下手すると闇落ちしかねない、ある意味将来のジョーカーだからな。
とりあえずのところ、桜ちゃんの高校から大学まで、掛かるであろう必要経費は別口座に分けてはある。それもあって残ってて使える金が割と少ないんだが……。そこのところはオベロンの力もあって安上がりで済んでるしな。問題なし、ってやつだ。
「ま、オレ達が順当に勝ち上がって、”最後の決戦”まで生き残っていればそのまんま面倒見るな。負けたら次策で遠坂家ないしは衛宮家に預ける」
「遠坂って、あの根性無しのかい？悪くないけど。衛宮家っていうのも珍しいね」
うーん、相変わらず批評が酷い。ま、是非もナイヨネ！（二度目）
正直言って、今から辿るルート上では遠坂に任せるのは無しだ。あれは今後、外道神父こと言峰綺礼のせいでどんどん没落していく。つ

まり全てギルガメッシュが悪い。異論は知らん。
だから強いて上げるなら、っていう前置きありきで衛宮家が一番いいだろう。ただ、終わったとき、切嗣の精神状況がどうなっているかにもよるな。やれやれ、考えることが多いと面倒臭いなぁ――――――――

「――――マスター」
「おう、わぁってる。流石は〝征服王〟、堂々と来やがった」
チャイムが鳴るけど、出るかどうか迷――――う暇なんてないのでさっさと出る。アインツベルン城ならまだしも、流石に街中だからな。突撃されようもんならたちまち噂になるわ。
書斎からスタコラサッサと、玄関まで小走りで向かう。へいへい、そんな連打しなくてもちゃんと聴こえてますよーだ。だからやめれっ、壊れるだルォ!?
「うっさいわ!?壊れるだろ!?」
「おぉ、出よったぞ小僧。ハハハハ！」
「出よったぞ、じゃないだろバカァ!?なんでわざわざキャスターのところに殴り込みに行くんだよ!!」
あぁ、苦労してるねウェイバー君……頑張って手綱握ってもろて、どうぞ。
その間にオベロンにぱっぱと念話を放って、書斎の中の資料全てを格納してもらう。あんなもんバレたらこの征服王、何を言うかわかったもんじゃない。絶対口滑ってオレ達が大変なことになる。
仕方ないから応接間に通して――――征服王クッソガタイいいなやっぱり。ちょっと頑丈めな椅子に座ってもらって要件聞いてさっさと帰ってもらおう。
はぁ……もうやだ寝てしまいたい……。

お願い、帰って？

征服王と名高き英雄――イスカンダルを応接間に通した。まぁそこまではいい。市販だけど、ちょっと気分転換に飲むつもりだったそこそこいいお茶を”粗茶だ”って出したのはいい。いや、というか少しは疑えよ、ウェイバー君見習えよ。

とか言いつつそこまではいいんだよ。問題は、さ――――

「ほほう、陰険なやつが多いキャスターの工房にしては、中々小洒落た家屋ではないか。確か、この国由来の建築なのだろう？こういうのも悪くないものだな」

「そんな暢気なこと言ってる場合かよ!?見ろよ！キャスターのマスター滅茶苦茶頭抱えてるじゃんバカ!!」

「……、……」

帰ってほしい、切実に……。割と小一時間ほどずっとこうして居座ってるんだよ、この人。いやさぁ、こっちも割と暇じゃなくてだね、やらにゃならん仕掛けがまだまだあるわけよ。

あー、こうしてると本当に、前世があったーとか、未来を知ってるーとか、めっちゃどうでもよくなるなぁ…。言うてそもそも、前世の記憶とかクソ朧気だし。そもそもゲームやってたレベルでしか覚えてねぇし。前世ってなんだったんだ……今が楽しいからいっか（現実逃避）。

「おいライダー！もうキャスターのマスターの目が死んでるから！イイカゲン何しに来たのかぐらい言えよバカ！」

「おぉすまんすまん、すっかり忘れておったわ。――――はて？何をしに来たのであったか？」

「しっかりしてくれ……頼むから……」

キレっちまったよ、久々になぁ……。ふぅ、落ち着け。イスカンダルは一見いい加減な脳筋に見えて、割かし知略にも長けている。下手をすると呑まれかねない。

「お主、先の戦いを見ておったであろ？何故現れなんだ？お主のサーヴァントに誇りはないのか？」

「直接聞いてくるってところは流石だね、いやホント。
――一つ目、確かに見ていた。戦力を分析するのには実地観察が一番だからな。
二つ目、あそこで出てくるのはよっぽどのバカか、よっぽどの実力者かだ。どっちでもないこっちからしたらどうだっていい。むしろ、キャスターで表に出る阿呆は居らんだろうに。
三つ目――――は、本人から聞け。――キャスター」

オレは”キャスター”を呼ぶ。すると、輝かしい粒子が形を為していく――ように見せかけた、要はただのエフェクトである。
実際は、コソコソと部屋に入り、タイミングを見て虚映の隠蔽術式を解き、エフェクト付きで現れたという、なんとも遠回りな背景だった。
「呼んだかい？マスター」
「ほう！其奴がお主のサーヴァントか！見るからに相当名のあるサーヴァントと見受けるが、どうだ？」
一臨の姿で『オベロン』という役にはまり、演じている。知ってる側から見たらほんとよくやれるもんだと思うわ。
それに対し嬉々とするイスカンダル。この見た目のオベロンに何を期待しているんだが…（笑）。
――ん、開帳許可？構わん、やれ。『オベロン』が真名の時なら別に知られたところでどうともならんしな。本当の特性がわかるわけでもあるまいし、ね？
「うーん、期待しているところ悪いけど、僕はそれほどのものでもないさ。とは言え、マスターからも許可が出たし、名乗らせてもらおうか。
――僕は『オベロン』。妖精王『オベロン』さ。王、とは言ってもこの通り、お飾りの王様だけどね」
「お、おおオベロンだって!?」
お？ウェイバー君がびっくりしちゃったぞ。オベロンってそんなに有名だったっけ？って思ったけど、そりゃ魔術世界じゃ有名か。

んー、でもそうだとは言え、オベロンの名前が初めて世に回ったのはシェイクスピアの『真夏の夜の夢』が初出だったはず。うーん、やっぱ不思議だね。
「なんだ坊主、知っておるのか」
「そりゃあまぁ……オベロンってのは伝承科とかで噂されてる、幻想種『妖精』の王様ってされてる存在なんだよ、でも、実存が不明とされてて、長らく与太話みたいな扱いだったんだけど……」
はっはっは、まぁ妖精やら幻獣やら闊歩してる世界の出ですし、おすし。そう思うと、オレよくオベロン喚べたなぁ……トリガー何だったの？というかどこで縁繋いだ？
考えてもわかんねぇ……あー、わかんないこと多過ぎて嫌になってくるぜ。うーん、本当はさっさと本当の姿で盤上メチャクチャにしたいんだが……それだとつまらんしなぁ。はぁ、どこでもしがらみが多いとだるくなるもんだなぁ。
「そう言ってもらえると嬉しいよ。まぁでも、僕はそんな大したものじゃないさ」
「ふぅむ、王というのなら、お主らを呼ぶのも一興か…。なぁ、お主にちと提案があるのだがな？」
――あー、アレか、聖杯問答か。うーん、ぶっちゃけ言うと、オレもオベロンも、王とさてのうんたらかんたらとか、民とは人とは何とかとか、そういうのどうでもいいって質（タチ）だからなぁ。
「一応聞くが、他に誰を呼ぶ？」
「うむ、あの黄金のは必ずとして、騎士王も呼ばねばなるまいてよ。それで、どうだ？」
どうだ？とか言って、ほんとはイエスと答えない限りずっと聞いてくるくせに。メンツも案の定だし、どうするかなぁ……
「（マスター、これは乗ってもいいと思うよ）」
「（ん、リョーカイ）」
「解ったよ、やる時には――――あー、ちょっと待ってろ」
さてさて、アレはどこへやったか…。地下倉庫に行ってー、ゴソゴソ探してー、えーんーとー……お、あったあった。

「そら、それ使ったらわかるから、やる時にはそれに魔力込めな」
「うわっと――――なんだよ、コレ」
ウェイバー君に投げ渡したのは、一枚の札。ただまぁ、勿論なんの変哲もないっていうわけじゃなくて、うちの家系術式である『共鳴』。これを応用した、いわゆる信号式告知装置的なやつだな。
うーん、うちの魔術系統の価値ってあんましよくわかってなかったけど、系統説明した瞬間ウェイバー君がびっくりしてるし、こりゃ相当だったかな？
……あのさぁ、後からチート的なのわかるってどうなん？それ……。言うて汎用性ないしなぁ……。あーもーわからん！やめた！これ以上はなりゆきに任せろじゃい！
「では！また会おうぞ、妖精王とそのマスターよ！」
「バカ！もう少し静かにしろ！近所迷惑だろ！」
おう帰れ帰れ。もう日の出迎えててこちとら眠いんだよ。ヒラヒラを手を降って帰して布団へＧＯ。はぁ……やっぱＦａｔｅ世界ってよくわかんねぇぜな……
「きゃすたぁ……指示はぁ、紙にぃ、かいてあるからぁ、よろしくぅ――――Ｚｚｚ……」
「えぇ……全く、人使いならぬ妖精使いの荒いマスターだよ、ほんと――――」

～爆睡中～

おはよう諸君。夕方だがね!!
さてさて？仕込みの方はどうなっておりんじょ。
「おはようマスター。人には働かせといて自分はグッスリかい？いい

ご身分だよねぇ、ほんと」
「すまんて……こちとら人間だから、睡眠取らんといかんのじゃて……」
めっちゃ拗ねとる……。いや、ほんとすまんて……。
平謝りしつつ仕込みの方を確認する。今晩は確か、ジルがセイバー陣営に襲撃かけて、『おぉ、聖処女よ！』とかいう熱烈な愛の告白する場面だったな。
ぶっちゃけ改めて自分の境遇振り返ってみると、お前ほんとに転生者か？ってレベルでこの世界に浸透してたな。実際、Ｚｅｒｏやｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ、Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒの知識・記憶はあれど、それを実際にフルに使うのは今回が初なんだよな。
オベロンの時は、確かに前世の知識イェーってなったけど、正直前世の知識あっても適切な対応できんと生き延びれねぇわこれ。だから知識には頼らん、あくまで自分で視たものしか信じない。そのスタンスで行こう。
「おー、いいじゃないいいじゃなーい。この数ならセイバーやランサー相手にも引けはとらんやろ。あとは――――こうで――――ここで――――こうしたら――――うん、よし」
「作戦は決まったのかい？」
疲れたような顔をするオベロン。ごめん、今度メロン買ったるわ、マジで。このままだと、オベロンにおんぶにだっこ状態だなぁ……。
やれやれ、今日1日でだいぶ腑抜けちまったわ。はぁまったく――――このツケは高くつくぞ、サーヴァント共。
さぁ、ここからだ。一気に仕掛けていこう。楽しい楽しいパーティーをはじめるために、下らない理想主義者共の目を覚まさせに――――いや、永遠に覚めない夢を見せにいこうか。
ま、夢は夢でも悪夢なんだけどもねっと。
「術式発動。模倣・妖精厄災『獣』、第一段階起動。完全起動まで残り四日」

――――では始めよう。ここから本番だということを、その身に思い知るがいい。我々は、”勝たない”のだから。

さて、じゃあ遊ぼっか

――――――――!!

――――――。

――、――――――。

んおっと、これはあれか、切嗣とアイリさんとセイバーのケンカのシーンか。んー、やっぱ虫越しだから言語が捉えれてねぇな。仕方ないけどさ。

んで？切さん屋上あがって？アイリさんに弱音を吐いてらっしゃる。――――いいよねぇ、好きな人いるとさぁ。そうやってイチャイチャできるんだもんねぇ？

「……チッ。オベロン、やれ」

「それ、醜い嫉妬っていうんだよ？ま、もうやったけどさ」

セイバーが一人きりになっていた部屋。そこを監視していた虫の視界が歪み始める。そして、セイバーの驚く顔を最後に、接続が切れる。

これでまず一手目――――よし、次。別の虫の視界に切り替える。そこには、胸を押さえて苦しそうに喘ぐ、間桐雁夜の姿。さて、こちらはオレ自ら交渉に出向かないとマズイ、か。

「そっちは任せた」

「はいはい、いってらっしゃい」

といえわけで桜ちゃん連れてレッツラゴー。とかなんかしつつオベロンの方を確認する。どうやら丁度森に放った”間桐製”魔力虫共をオベロンがモース化させる。

うひゃー流石オベロン、慈悲がないねぇ。と言っても、もう魔力抜かれきってたから半ば死骸みたいなもんだし、最後に一花咲かせま

しょうということで。

「――やぁ、始めまして。間桐雁夜殿？」
「だ、誰だっ――ゴホッゴホッ」
ふぅむ、無理をして刻印虫を埋め込んで、さらにソイツが余計に魔力食ったことによる魔力欠乏症、と。それだけ無理しておきながら、本筋じゃあ桜ちゃんも救えずに御陀仏しちゃうのか。カワイソラス。
ま、こちらは救いの手を差しのべさせてもらいましょうかね。打算ありきではあるけども。
「私の名は『アルレッキーノ』。今宵は一つ貴方に商談を、と」
「な、なんだと…？」
ここからは答えはミスれない。気張れよオレ。
オベロンは向こうで行動しなきゃならん。臓硯の”目”はそう長いこと誤魔化せない。長時間やり続けると、オレの魔術回路がぶっ壊れる。
――”賭ける”は命、チャンスはこの一回だけ。さぁさ、”勝負”といこうじゃないの。
「貴方のお探しの『間桐　――いやさ失礼。『遠坂　桜』さんはこちらで保護させて貰っていますよ、ええ」
「なっ、ほ、本当なのか!?」
よし食いついた。第一段階――『交渉への意欲を湧かせる』はクリア。
次の手札だ。さて、どれがいい……？考えろ、考えろ、考えろ――
――”賭けろ”。
「すぐにでも貴方に会わせたいのですが……こちらにも、退っ引きならない事情があるのです。わかりますね？」
「っ……――俺に、どうしろと」
次、”賭ける”。

「貴方には秘密裏にこちら――〈キャスター〉陣営と繋がって頂きたいのです。勿論、タダでとは申しません。貴方の『魔力欠乏症の緩和と効率化』、『桜さんとの面会』、そして――――『間桐臓硯の始末』。これらを報酬と致します」

「で、できるのか!?――――いや、やる、やってやるさ」

まだだ、気を緩めるな。これは一種の”契約”。だからこそ、慎重に、かつ相手に疑う隙を与えるな。

「良いお返事、嬉しく思います。つきましてはこちら――『自己強制証明（セルフギアス・スクロール）』にて詳細の確認、そして署名を。その後、桜さんと面会させましょう」

「わ、わかった――――これで、いいのか」

確認する。

――一つ、『間桐　雁夜』（以下：甲）は、『アルレッキーノ（朝露虚映）』（以下：乙）に対し、半永続的な協力関係を築く。

――一つ、甲は乙に対し、詐欺行為、反逆行為などといった敵対行動、ないしは乙への殺傷行為を禁ず。

――一つ、上記の代わり、乙は甲に対し、『魔力欠乏症の解決』、『魔力等戦力のバックアップ』、『遠坂　桜との面会』、『間桐　臓硯の始末』を報酬とす。

――一つ、上記に違反する行為が行われた場合、各々のサーヴァントは自害、マスターは令呪を明け渡し、自害するものとす。

――一つ、これは、当聖杯戦争の期間内において、決して破られることなく存在するものとす。

よし。まぁ、見る人からみればこちらにとって益もなく、非常に不利に見えるかもな。確かにそうだろう。だが、これでいい。一見穴だらけに見えるソレは、確かに穴もあれば不備もある。と言っても、こちらにとって必要な不備だがね。

「――確かに、契約は成りました」

「は、早く桜ちゃんに会わせてくれっ」

「そう、慌てなさるな。――――もういいよ、おいで」
そう言ってオレは桜ちゃんを呼ぶ。おやまぁ、雁夜おじさんったら泣いちゃってまぁ。うんうん、感動の再会っていいよねぇ。
さて、奴さんはと――――――――お、やってらっしゃるやってらっしゃる。結果は上々。あちらの撹乱は成功。これで”アレ”の放つ気配にはもう気付かなくなるだろう。起動したての今夜が山だったからな。
更にこちらは『狂化した湖の騎士』という新たな手札を手にいれた。対セイバー、対アーチャー用の手札としては万々歳の結果だ。
さて、臓硯の”目”の誤魔化しが効かなくなるギリギリまで残り十分程度。それまでは、彼らの好きにさせていましょうかね――――。

――――アルトリアは、驚く他なかった。急に自身を見つめる視線を感じて振り返ると、そこには一匹の、なんの変哲もない”虫”がいた。ただそれだけのことだった。
だが、その虫が急激に膨れ上がり、かと思えば毒々しく、禍々しい色合いのタール状の液体に包まれ、いつぞやの”影”へと変貌する。
「なっ――――くっ、同じ手は食わん！」
即座に聖剣を喚び、一刀の元に切り伏せる。昨晩出会ったものと同

じく、ソレは塵となって消え失せる。
冷や汗が流れるアルトリア。だが、すぐさま我に帰り、己がマスターである切嗣とアイリスフィールを探しにいく。だが、館内には既にいくつもの”影”が蠢いており、アルトリアは焦りつつも的確にソレを倒していった。

同時刻、それぞれもまた、それぞれの動きをしていた。
衛宮切嗣とアイリスフィールは、次々と溢れ出てくる異形を滅ぼしながら、セイバーとの合流を目指していく。その中で久宇舞弥と合流し、令呪の魔力を辿っていく。
言峰綺礼は、己が垣間見た『衛宮切嗣』という存在を知るために、〈ランサー〉陣営は、己の魔術工房を破壊するという、闇討ちへの怒りにて、魔境の森へと歩みを進める。
だが、彼らは未だ知り得なかった。今やその森は本物の『魔境の森』と化しており、そこかしこに異形の影たちがひしめきあっている、などと。

そんな最中、アルトリアはどんどんと外へと誘き出されていく。影達を追い追われ、迫り迫られ、一進一退を繰り返しながら。
そうしてアルトリアは、森の少し拓けた場所へと出る。先程まで目の前に立ちはだかっていた影達は、何時の間にやら円形に広場を取り囲む。
すると、ふと、蝶が一匹ひらひらと飛んでいく。夜の闇のように、なにもない暗闇のように、真っ黒な蝶が飛んでいく。
飛んでいく先には――――数多の虫が集まり、形を成してきていた。曰く形容しがたい、人型をとろうとしているのであろうソレに、アルトリアは不思議な感覚を覚えた。

その気配は遠い昔、ブリテンの島で出会った始まりの仇敵。己は『民』を想い、彼は『島』を想った。だからこそぶつかり合った。それこそ、彼一人によって、多大な犠牲がもたらされるほどに。

アルトリアは思い出す。かつて、『島』を想い、『民』を嗤ったその男を。”赤き竜”は思い出す。かつて戦った”白き竜”の内に眠っていた、”魔の存在”を。

「あ、ああ――――――き、さまは、貴様はッ!!」

「やぁ、底抜けにお人好しな騎士王サマ。久しぶり～、元気してた？誰も幸せになんてなれないのに、よくもまぁそこまで頑張るねぇ。――――――でも、その夢はここで終わり。君には、負けてもらうよ」

――それは、まだ神秘に溢れていた時代、その最後の代にてブリテン島が願った『自滅願望』にして、ブリテン島が生み出してしまった『終末機構』。数多の夢を嗤い、果てのない”終わり（悪夢）”を見せ続けるもの。

『妖精王オベロン』など、仮初のもの。それなるは『奈落の虫』。かつてブリテン島そのものが願った『終わりの使者』。それこそが彼、それこそがそこに立つ”魔竜”。

「なぜ、なぜ貴様がここにいる――――――

『卑王ヴォーティガーン』!!」

いいね、最高だ

はぁ、やれやれ。ほんと、疲れるよね。マスターはぐっすりした後に交渉に向かって、僕はあれこれと仕掛けまくって挙げ句に戦闘だよ。まったく、人使いが荒いと思わないかい？

さてと、それじゃあ皆、よろしくね。と言っても、もう物言わぬ屍なんだけども。

うーん、騒がしくなってきたね。じゃ、そろそろマスターから貰ったこの術式を使うとしますか。うんうん、どうやら順調に発動したみたいだね。

今発動したのは、いわゆる『誤認隠蔽』の魔術。元々は相手によって見える姿が変わるらしいけど、今はわざわざ手間をかけて設定させてもらったよ――”汎人類史の『白き魔竜』”にね。

それなら多少本気を出してもいいだろう、っと。魔力を集めて、霊基（身体）を再構築する。魔力量は――うん、多少荒っぽくなっても問題なさそうだ。

「にしてもまぁ、ここまでお膳立てされるとね……。くく――くっははは！いいね、最高だ」

いいね、あのマスター。最高にイカれてる。確かに、虫達からの監視でも見ていたけれど、このままだとあの騎士王は、アサシンのマスターと、更にはランサーの陣営ともぶつかる。まさに挟み撃ちだ。

けど、こちらのマスターは、その騎士王よりも更にバカだ。もちろん誉めてるよ？だって、こんな三つ巴の中心に立つだけじゃなくて、全員に攻め込むとか、本当にイカれてるとしか言い様がないね。

――触れれば移るモース毒。それは本来、妖精にしか効かないはずだった。それを、僕――いや、オレが『モースの王』だったからと言って、人間にも呪詛が移るようにしてしまった。

「さーて、オレのマスターはこの駒達をどう動かすのかな？」

オベロンは、数多の虫を引き連れて目的地へ向かう。それらは次第に形が崩れていき、呪詛の塊――――”モース”となって森中に展開していく。
ソレらの呪詛の根底にあるのは、『間桐臓硯に、実験体として使われたことへの怨み』もあるだろう。だが、ソレらのほぼ総てがねじ曲げられ、聖杯戦争への――――ひいては『聖杯』という願望器の存在への怨みとなっている。
もはやこの森はただの森に非ず。聖杯を求める者達を怨み食らい、そして呪う者達の巣窟。触れればたちまち、彼らの仲間入りを果たすことだろう――――。

――――止まれ。
言峰綺礼は、その直感的な啓示に従って、森の入り口手前で立ち止まる。
何かがおかしい。見た目は普通の森だ。魔境の森などと言われているが、所詮ただの森。――――つい最近までは。
どうしてか、今の『森』からは、安易に近寄れば”死”よりも筆舌に尽くし難い”終り”が訪れる。そんな予感がした。
「……？」
ふと、森の中から何かが出てくる。いや、正確には這い出てくる。何か、液体のようなものが這いずるような、曰く形容し難い音。
月明かりに照らされて、言峰はその正体を見る。
「……ふむ」

ソレの正体を、言峰は一目見ただけで悟った。これは呪詛の塊。触れば即死、ないしはこれらに従属するものになりさがると。
だからこそ、言峰は洗礼の施された黒鍵を取り出し――――容赦なく投げる。憶測では、これによって有効打となりうる、はずだった。
果たして、確かに洗礼を受けた黒鍵なれば、呪詛は苦悶の声を上げて呻く。しかし、すぐさま何事もなかったように修復し、触手を放って襲いかかる。
さらに追い討ちが如く、幾重にも呪いを固めた、砲弾並みの大きさの玉を射ち放ってくる。このままでは、目的を達成する前に己が力尽きる――――そう思い、言峰はやむなく撤退する。
それを見届けた呪詛達は追うこともせず、ただ静かに佇み、そして、何事もなかったかのように森の中へと消えていった――――

「――――これは…ッ」
ディルムッドは、背筋が悪寒で震える錯覚に陥る。目の前にこれでもかと湧いて出てくる異形の存在。それらの気配は、ディルムッドもよく知るものであった。
「妖精……なのか…？いや、しかしこれは…」
『ランサー！その化け物共の相手はいい、セイバーの拠点まで道を開

くのだ！』
　ディルムッドのマスター　――――ケイネスからそう指示が飛ばされる。彼もそうしたいところではあったが、そういうわけにもいかなかった。
　なぜなら、彼の目前には、その異形達が壁になるかのように押し寄せていたからである。セイバーの元へ行くにしろ、そのマスターが居る拠点までの道を切り開くにしろ、その異形達を倒さねばどうにもならない。
「すまない、名も知らぬ成り果ての妖精達よ。その怨み――――悪いが、切り開かせてもらう!!」

「なぜ貴様がここにいる!!『卑王ヴォーティガーン』!!」
「さぁ？なぜだろうね。自分で考えてみれば？」
　なぜだ!?なぜ奴がこの聖杯戦争に参加している。しかも、あの時の姿のままで。
　――不味い――ヴォーティガーンの強さは生前からよく知っている。我がキャメロットの精鋭たる騎士達を、児戯が如く消し飛ばすのみならず、円卓随一頑強なガウェイン卿を、あろうことか日中で昏倒させた。
　あの時は復活したガウェイン卿と共に、その両腕を二つの聖剣で固定し、心臓を聖槍で貫くことでようやく倒せたのだ。
　だが、今ここにはそのガウェイン卿も、ましてや『聖槍』さえ持ち

合わせていない。マスター　――切嗣のサポートは恐らく絶望的。最も、サポートできるとしてもこちらはそれを受け取りたくはないが。
「そぉら、逃げるだけかい？」
「くっ――――おのれっ！」
　奴は聖剣の間合いを知っている。だからこそ、『風王結界』で隠す必要などない。しかし、『風王結界』の解除をしようにも、マスターの許可がなくてはそれもできない。
　両断するように振り下ろした剣を、奴は嘲笑うように避けていく。初戦にて、ディルムッド・オディナと戦ったときから、己の動き一つ一つに何とも言えない違和感を覚えている。
「おいおい、いつまで”ソレ”隠してるつもりなのさ。もしかして死にたいのかい？」
「貴様、なぜここに現れた！――――――まさか」
　私がそこまで思い至った瞬間、奴は口元を裂けるように吊り上げて――――ワラう。
「ははっ、なんでわかるかなぁ。まぁ、君には分かるようにしているから当たり前だろうけどさ。

――――とは言え、オレが”どちら”かだなんて言うわけないんだけど、さ！」
「ぐうっ!?」
　一瞬で間合いを詰められた、だと!?間違いない――生前より遥かに強くなっているっ。とっさに聖剣で守ったが、衝撃が腕から身体へと伝っていく。
　一瞬だけ見えたのは、恐らく短槍ほどあるトゲ、いやツノか？いまいち判断がつかないが、槍のようなものであったのはわかった。恐らくはあれが今の奴の得物なのだろう。
「あれ？今完璧に貫いたと思ったんだけど。……まぁいいや、オレはそろそろ退かせてもらうよ。邪魔者も来たことだしね」
　待て、と言おうとしたが声が出なかった。よくよく見れば、先の一

撃で膝が笑っていたのだ。そのせいで身体に力が入らず、膝を地に着かせてしまう。
――バカな、そう言いたくなる。だがそれと同じく、案の定か、とも言える。何しろ相手は『卑王ヴォーティガーン』。彼のガウェイン卿を日中で、それも一撃で昏倒させた男。
そんな風に私が思考を巡らせていると、背後より異形達を突き抜けてサーヴァントが一人、私の前に立つ。
「そこまでだ。何者かは知らないが、これ以上の暴挙、このディルムッド・オディナが見過ごさないと知れ」
「はいはい、言われなくても去りますよ――――オレはね」
奴が指を鳴らす。その瞬間、周囲で沈黙を保っていた異形達が一斉に襲いかかってきた。それに対しディルムッドは、その双槍を凪ぎ払わせることによって一掃する。
だが、その間に奴はいなくなってしまった。私も、なんとか衝撃から回復し、ディルムッドと共に異形達を屠っていく。
『あぁそうそう、帰る前に教えてあげるよ。君達が相手してる”ソレ”は”モース”っていう、いわゆる堕ちた妖精さ。触ったり触られたりしたらお仲間になるから、せいぜい頑張って生き残ってね、騎士王サマ』
舐め腐った態度を、と声高々に叫んでやりたかったが、間髪なく異形――モース達が襲いかかってくる。幸い、この『聖剣』だと一撃で屠ることができるようだ。
しばらくして、ようやく余裕が出てきたがためにディルムッドの方を流し見ると、ディルムッドの方も、その槍の力によって難なく倒しているらしい。
そうして夜が明ける前に、どうにか現れていた全てのモースを倒しきることができた。私もディルムッドも、双方共に息が上がってしまっている。ふと、ディルムッドが焦ったような表情になる。
「すまない、セイバー。勝負をつけたいのは山々なのだが……マスターが」
「構わない、ディルムッド・オディナ。貴殿とは必ず、再び相見えると

誓おう。勝負はその時に」
――忝ない――そう言ってディルムッドは去っていく。私も剣を降ろして警戒を解く。その後、マスターから召集がかかり、私は集合場所へと向かう。
それにしても――――なぜ、あの卑王が聖杯戦争に参加しているというのか。現状ではランサー、ライダー、アーチャー、アサシンが判明している。最も、アサシンが既に敗退した、というのも怪しいのだとか。
残るはバーサーカーとキャスター。だが、バーサーカーは既に目の前で相対している。消去法で考えればキャスタークラスだが、あの強さはキャスタークラスのものとは思えなかった。
ならば――――もしや奴は、マスターとして参加しているのか？そんな私の思案は、昇る朝日に照らされたことで中断される。
とにかく、今は奴の危険性を、どうにか”マスター”にも知ってもらわねばならない。その為にも、なんとか耳を傾けてもらえる程度には……いや、必ず耳を傾けてもらう。そう思いながら、私はその場を後にした。

退場の時だよ、ご老人

――――ふう、疲れた。あーあ、全くもって吐き気がしそう。それでもって、お腹抱えて笑い転がりたいぐらいだ。

見たかい？彼女のあの間抜けな顔。挙げ句の果てには『なぜ』だってさ。いやいや、なぜも何も、聖杯戦争に参加しているからこそソコにいるだろう？っていう話なんだよねぇ。

「あ、おかえりなさい、オベロンさん」

「ただいま、桜ちゃん。ところで、マスターはどこかな？」

「カリヤおじさんといっしょ。居間にいるよ」

どうやらマスターは居間にてカリヤとかいう、これまた騎士王サマとは別ベクトルのお間抜けと一緒らしい。ま、僕からしたらあんな蒙昧な善人の塊より、ただ一つに対し愚直に進む奴の方が愛せるけどねー。

昨夕に燻っていた僕の怒りも、騎士王サマを弄んでやったことでだいぶ発散された。不完全燃焼ではあるけど、割と上機嫌な方ではあると自負するとも。

「やぁマスター、今戻った――――って、ナニソレ」

「離せ！離さぬか！えぇい、一体儂に何をしたのだ!!」

もごもごと、みっともなく足掻く〝蟲（ソレ）〟。人の形をしてるからなのか、マスターの拘束術式で縛られている。

「おうキャスター、お疲れさん。お疲れついでなんだが、コイツもやっちゃって」

「えぇ……流石の僕でもこんなの従えたくないよ」

いやいやドン引きするって。なんでこんな気色悪いの従えないといかないわけ？流石に萎える――――と、普段なら言うところだけど、今回はちょっと話を聞いてみようか。

「んで？こんなの捕まえたってことは、何か理由でもあるんだろ？」

「ご明察。端的に言うと、バーサーカーのマスターと協力関係を築くために、目の前でソイツを殺さにゃならんのだよ」

ふむ、まぁ理由としてはわかるけど、なんでまたバーサーカー？

バーサーカーって確かランスロットだよね。僕らからしたら天敵じゃない？
と思っていたのが知られたのか、マスターから詳しい説明がされた。それによると――――、
――まずその一、バーサーカーの真名『ランスロット』は、今の姿で騎士王サマのとこに向かわせれば、間違いなく精神的に追い詰められる。
その二、ランスロットの持つ宝具、『無毀なる湖光（アロンダイト）』を参考に新しい武装礼装を製造、それを僕の戦力補強に使う。
その三、ランスロットの存在はセイバー以上に厄介な対アーチャー対策として最上位に位置しており、敵として倒すより味方に引き入れる方がメリットが大きい。
――ふむ、確かに。強いてあげるデメリットが僕の”真名”がバレないようにすることと、バーサーカーとしての消費魔力の高さぐらい。それと比べれば旨味はかなりいい。マスターもなかなかいい駒を手に入れたじゃないか。
「で、協力体制のための契約に、コレを殺すことが含まれている、と」
「そういうこと。ま、”本体”はとっくのとうにこっちの手中だし、どうとでもできるわな」
うーん……”魂”がゴミ捨て場みたく汚いけど、それを抜きにみれば、『僕』が『俺』として活動する分には、補充される魔力や戦力としては充分すぎるほど、か。さらには”駒”として使うこともできるわけね。
流石は僕のマスターといったところか。ここまで盛大に動けるとはね。
――間桐家という三大勢力の一角を落とし、更には契約で傀儡化。加えて、騎士王サマ達を”俺”がモースで陽動し、マスターは間桐家を陥落、計画の進行を円滑に、と。

これだけ聞くと末恐ろしいね。一応間桐家については、聖杯からの知識としては知っているさ。長生きしては魂も腐って醜くなった愚か者――それが僕の評価だった。けれど、その老獪でもある相手を、このたった一晩で陥落させた。

「マスターは〝勝ちたい〟のかい？」

「〝勝たない〟っつってんだろ。まぁ、〝負ける〟つもりもないがな」

いやいや、これもうマスターが勝っちゃうんじゃないの？だってここまでやって、更には〝アレ〟も残ってる。事実上アレに勝てるのは、あの騎士王サマぐらいだけど、当の騎士王サマは拠り所のない弱った蝶のようだし。

「油断すんなよ？ここからは上手いこと勝ちつつ、上手いこと負けなきゃならん」

「勿論だとも。いやぁ、マスターが恐ろし過ぎて、僕はどうにかなってしまいそうだよ」

――猿芝居しやがって。そんなマスターのぼやきが聴こえたような気がしたけど、気のせい気のせい。こんなに計画がうまくいくのはブリテン以来だなぁ。

あーぁ、ブリテンの時にマスターが居てくれれば、俺の計画も上手くいったのかもなぁ……ま、ないだろうけどさ。

――信じられなかった。何がと言われると、目の前で行われて

いることが、だ。
『間桐臓硯』という存在は、この５００年近く、この世界に生き続ける正真正銘の化け物だ――――いや、だった。
それがどうしたことか、今の今まで名前も知らなかったような相手にいい様に転がされて、しかも桜ちゃんに埋め込まれていたはずの延命用の蟲は、彼の持つビンの中で弄ばれていた。
あの時は、まさしく電光石火だった。

――――あの契約の後、あろうことか、彼はそのまま間桐の屋敷まで直行したのだ。あの時は、何の対策もしていないのか、間桐臓硯を知らないのかと思い、今は止めるように言っていた。けれど、彼は笑みを浮かべて諭すように言った。
『大丈夫ですよ。あの老人は、私には勝てませんので』
そして、盛大に屋敷の玄関に飛び入り、あの臓硯を屋敷中に響くほどの大声で呼んだのだ。勿論、奴は来た。訝しげにする奴を余所目に、彼は懐からあのビンを取り出した。
『初めまして臓硯殿。それともゾォルケン殿、とでも言いましょうか？まぁ、どうでもいいですけど。――――こちら、なんだと思います？』
『――き、貴様!?どうやってソレを――!?』
驚き固まる臓硯。それを狙っていたかのように、彼の影から何かが飛び出してくる。
『――――やれ』
『ぐぉおぁぁあ!?こ、これは――”!黒妖犬（ブラックドック）”じゃと!?』
それは、真っ黒な”犬”だった。ソレらは何体もの塊となって臓硯に牙を突き立て、食い荒らし、無残に引き裂いていく。何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も――――
『うーん、死なないですねぇ。予想の範疇ですが』
『き、貴様は……何者なのだ……』
俺は呆然と立つことしかできなかった。俺達が恐れた臓硯という魔物が、”道化師（アルレッキーノ）”と名乗った目の前の彼にずたぼろにされている。

――――いや、ずたぼろなんて生易しいものじゃない。あれは、”実験体”を見る目だ。あろうことか、彼は臓硯で『実験』しているのだ。

『とりあえず縛りあげて回収しましょう、ええそうしましょう。――――”纏わり付け(バインド)”』

『ご、がっ――――』

彼がそう唱えた途端、噛みついていた犬達が臓硯に纏わりついて拘束する。逃げることさえできず、真っ黒な塊になってしまう。

『すみませんね、どうやら今すぐは難しいようです。一度持ち帰っても宜しいですかね？』

『あ、あぁ……』

俺はもう、頷くしかなかった。全てがあっという間で、俺が抱いていた願いも、恐怖も、何もかもが一気に崩れ落ちた思いだった。

人智を超えた、とはまさにああいうことなのだろう。俺は彼に連れられていく間、ずっと腕の震えが止まらなかったよ――――

――お爺様が、いえ、お爺様”だった”ものがオベロンさんに運ばれて、地下へとつれていかれました。出会ったとき、そして、”アソコ”へ入れられたとき、あんなにこわかった人なのに、”お兄さん”がなんにもできなくしちゃいました。

「ん？桜ちゃん、どしたの」
「あの…今日も『魔術』をおしえてくれますか…？」
「いいよぅ。んじゃあ今日はねぇ――――」
お兄さんは、やさしい人です。やさしくなんてないよって言うけれど、とってもやさしいです。オベロンさんも、ぼくはウソつきだからって言うけれど、二人とも、いっしょにいると、とってもあったかいです。
そこにいるだけで、お日さまにてらされているような――――こういうのを、『夢見ごこち』って言うんですよね。なんだかとっても、むねがポカポカします。
「あの、お兄さん」
「はいはいお兄さんですよー。どした？」
なんでこうして話してるだけで、むねがポカポカするでしょう。わからないことがあったらきいてね、とお兄さんは言いました。だから、きいてみますね。
「あの、わたし、お兄さんと話していると、むねがポカポカして――――お兄さん!?」
「シロウ、ゴメン……いや、ほんまに……」
と、とつぜんあたまを机にぶつけちゃいました。いたそうです、だいじょうぶかな…。だれかにあやまってるみたいだけど、だれなんだろう。
「うーんとね？桜ちゃん、それは『安心』っていうんだよ」
「『安心』…？」
安心……そっか、わたし、お兄さんたちに『安心』してたんだ。
お兄さんにあたまをなでられる。むねのポカポカがもっとあたたかくなる。あぁ、お兄さんといっしょなら、安心するなぁ……。

「――――それは、本当のことなのかね」
「はい。どうやら昨晩のことらしく」
――――バーサーカーのマスター、間桐雁夜の姿が見えなくなった。彼のサーヴァント、アサシンからの報告らしい。そこは大した問題ではない。雁夜は……敵に回った時から既に道は違えている。
だが、それよりも問題なのが、『間桐臓硯の行方不明』だ。我ら御三家の中でも、５００年程は生き続ける老獪が、この聖杯戦争の最中だというのに行方不明になったという。まず間違いなく〝何か〟があったのだ。
「アサシンから、他に報告は上がっていないかね、綺礼」
「いえ、どうやらアサシンも感知できなかったようです」
サーヴァントであり、なおかつ隠密行動に長けているアサシンですら見逃すとは……。いよいよもって何かが起こっているのだろう。
今回の聖杯戦争は何かがおかしい――――そう思わずにはいられなかったが、我々はもう、今回に賭けるしかないのだ。
「間桐臓硯の行方について、至急調査を進めるよう、指示を出しておきなさい」
「畏まりました」
何だ……一体なにがこの水面下で蠢いている？アーチャー――――ギルガメッシュ王を喚べたことは最高級の結果に近い。だが、何か、不安が拭えない。
何か大事なことが抜け落ちているかのような、そんな言いようのない不安感にかられてしまう。
――――一体、どうなっているのだ。

騙すのも楽じゃあない

オッス、オラ虚映！突然だけど、間桐邸に来ているお！ちな間桐邸の現状、報告！

その一！家主の臓硯が行方不明！というかワイらが持って帰ってお人形にしちゃったんだケドモ。

その二！ご当主一家夜逃げしちゃったよ！残念だね!!残ってたらモースにしてやったのに（ゲスゥ）

その三！というか、これが今回の本題――――だったんだけどなぁ……うん。

今晩――――開戦から三日目の夜、本来ならばライダー陣営がジル元帥の工房を燃やして、凛ちゃんが勇気を出す夜。けど、当のキャスター陣営はオレ達だし、どこぞの殺人鬼はモースにしちまったしでだいぶ改変したわな。

でだ、それで何をしにきたのかというとだ。現在無人となった間桐邸では、オレとオベロンが呼び出した”黒妖犬（ブラックドック）”達を、蠱毒の要領で喰らい合わせて擬似的な『妖精厄災』を再現しようとしてたわけ。

それが、どうして……

「ほほう？まさかお主らまでここに来たとは、いよいよ何かあると見たぞ」

「「勘弁してくれ……」」

オレとウェイバー君の声が重なる。いや多分、内包する意味は違うんだけど。マズいな、このままだと中で蠱毒の儀をやっているのがバレる……さて、どうしたものか。

「はぁ……まぁ、確かに怪しい気配の出所だとは悟ったさ。つっても、うちのキャスターに教えられてから、だけどな」

――最近、街におかしな気配が漂い始めていた。それにはわかってはいたが、出所がわからずどうしようもなかった。そんな中、キャスターに言われてようやく出所がわかり、こうして調査をしにきた――――と、こんなシナリオでいいだろう。

今キャスターには、こっそりと中に入ってもらって、”一番優秀な生き残り”を回収しにいってもらっている。現状から離脱でき次第、モース毒やらいろんなもん打ち込みまくって再現させなきゃならんしな。
「ふぅむ、何やら他にもやることがある様子だな。であれば、早急に終わらせるとしよう――――」
「――ん？おい待てライダー、お前何しようとしてんだよ」
なぜか手綱を握り直し、間桐邸の扉を真正面に構えるイスカンダル。いや、待て待て待て待て。まさかそのまま突っ込むとかないよな？いややるなよ？フリじゃないからな？やるなよ!?
「Ａ―ｒｒｒｒｒｒｙ!!」
「何やってんだバカ――!!?」
いやほんとに何してくれちゃってんの!?
ウェイバー君はまだ不法侵入とかそういうレベルで考えてるんだろうけど、中の状態知ってるこっちからしたらたまったもんじゃないよ!?
だって今中には――――
――――蠱毒の影響で獰猛化している”黒妖犬”だらけなんだから。
「ぬぅ!?これは――――」
「ひっ――」
驚き固まるイスカンダルと、反対に怯えて固まるウェイバー君。
あぁもうメンドクサイなぁ！
”代理召喚（サモン）”、『斬撃瞬蜂（バンブルビー）』!!」
――オベロンと契約を結んだことで、あくまでオベロンの”代理”として会得したこの『召喚術』。召喚術、と言うが、その実『虫』系か『妖精』系しか喚べないし、妖精に至っては、”黒妖犬”を始めとした一部のものか、索敵ぐらいにしか使えない弱小のやつ限定ときてい

る。
『斬撃瞬蜂(バンブルビー)』――名前の元々の意味は”飛び回る蜂”という意味であり、英語圏では”マルハナバチ”の名前だそうで。いつか昔に、どこぞで聞き覚えのある名前だったからつけてみたが、これが中々のものだった。
一匹では切り傷ぐらいしかつけられない小さなハチなんだが、こいつの強みはそこじゃない。コイツの強みは、『喚ばれた際には必ず”群体”で現れる』という点だ。
考えても見てほしい。一匹だけではそう大した傷もつけられないような羽虫が、突如として群れを成して襲ってきたらどうなるかを。
――つまりはこうなる。
『キャウッ――――――』
断末魔さえ挙げる暇なく、あっという間に群れられて粉微塵にされる犬共。まさしく細切れと言っていいレベルにまで切り刻まれ、最早見る影もない。
「ふぅ――――」
「ほぉ、見事なものだな」
ふん、何が見事なもんかい。こちとら『手札』一枚どころか二枚も曝すハメになっちまったよ。やれやれ、さっさと帰りたいものだわ。
現状使えるのはさっきの『斬撃瞬蜂』を始め、『黒妖犬』、そしてオベロンが使う『閃⊠鎧蟲(ヘラクレス)』、『絡咬百足(ヒュッポリュテ)』、『翔槍蜻蛉(テーセウス)』ぐらいか。他にもいるが、全部あげようとするとキリがない。
とまぁ、あとは出した手札でやるしかない、と。どんな”縛り”だよ、怠いなぁ……。やるしかないけどサ。
そうこうしているうちに、イスカンダルは犬共を蹂躙しながらどんどん奥へ進んでいく。いやまぁ、ある種飢餓状態で強化と弱体が比例してるような感じだけど、普通そこまで蹂躙できるか？
「なぁおい、キャスターのマスターよ」
「虚映でいいさ。それで、どうした？」
なんだよ、こちとらここからどうするか思案中だったんだぞ？アンタに手札知られたりメチャクチャにされたりしたせいで、ある程度の

方向性の修復がいるんだよ。
――まぁ予想の範疇内だけどさぁ。
「この如何にもな気配の出所は掴めんのか？」
「ん、ちょっと待ってな――――キャスター」
「どうしたんだい？マスター」
探査魔術を使っている――風に見せかけてキャスターを呼ぶ。勿論、魔術は使っているよ？ただし『偽装用』の、だけどね。本当ならもう少し綿密に計画を進ませたかったが――文句は言ってられんしな。
とりあえず、オベロンから『最優秀作品』は回収したと報告を聞き、地下に強い反応があると言って奴らを地下へと向かわせる。
――出来ればここで仕留めたいが、まぁ無理な話だろうな。

と、悠長に思っていた時期がありましたとさ。
「なんだよ、あれ……人間、なのか……？」
「むぅぅ、なんと面妖な……」
「――――――」
あ、ありのまま今起こってることを話すぜ！オレ達は屋敷の中でも、『最優秀作品』達がせめぎあっていた地下へ向かっていたんだ。そして、いざ地下に到着してみれば、中じゃ”黒妖犬”と”モース人間”が、みっちりとわんさか湧いているんＤＡ☆。
何を言ってるかわかんねーと思うが、オレも何言ってるかわかんねぇ……。頭がおかしくなりそうとか、もうそんな次元じゃねぇ。どうしてこうなった？
どうにかこうにか二人して真顔を取り繕ってはいるが、流石にこれはビビる。オベロンも、こればっかりは意図するところじゃないみたいだし、ほんとどうなってんの？これ。

「――おい、虚映よ」
「なんだイスカンダル――――いや、解ってる。解ってるんだがこれは……」
奴らがこちらを向く。こりゃあマズイネ(白目)。見たところ、憎悪やら飢餓やら、色んなもんがごちゃごちゃになってて従えようにも無理ゲーすぎる。
うぉぉぉぉ!?走ってきた、走ってきた!?B級映画かよこれ!?一心不乱に憎悪向けられながらも平然と佇む――――とかできるわけねぇ!?
ウェイバー君を見よう――――あ、ダメだ、腰抜けてら。いいなぁ、おれも座り込みたーい。どこぞの外宇宙の神話よりSAN値削られるんだが。一周回って冷静になってきたんだが。

「おぉぉぉぉぉ!!」

隣からクソでかい声がして現実に引き戻される。イスカンダルが雄叫びあげて突撃していきやがった。正気か?
次から次へとその戦車で轢き潰していくが、あまりにもキリがない。うーむ……仕方ない。仮にもその『真名』で活動してんだから、片鱗だけでも見せてやらんとな。
「――オベロン。宝具の開帳を許す。眠らせてやれ」
「――――、解った。さぁ、暖かな夢の話をしよう」
魔力の高まりを感じたのか、イスカンダルは周りにいる奴らを吹き飛ばしながらこちらに戻ってくる。モース人間共も、それを感じ取って殺到してくる。うーん、怖い。
「童心の君、夏の夜の後、恋は触らず、懐かしむもの――――――
『彼方にかざす夢の嘶(ライ・ライム・グッドフェロー)』!!」

オベロンがその背の羽（モドキ）を大きく広げる。それと共に鱗粉が舞い、向かいくるモース人間達を包み込む。
すると――――　一人、また一人と、次々に倒れていき、ついには静けさを取り戻す。よくよく聞けば、彼らは皆、”寝息”を立てており、眠りこけているだけとわかる。
「――――す、すごい」
「もう彼らが起きることはない。永遠に覚めない幸せな夢の中で、彼らは眠り続けるだろう」
オベロンがそう説明する。多分ウェイバー君は、これがどれ程とんでもない”大魔術”なのか、想像もつかないだろう。
『彼方にかざす夢の嘶（ライ・ライム・グッドフェロー）』――――敵を眠りへと誘う、『オベロン』としての優しさに溢れた有情の宝具。相手は永遠に眠り続け、幸せな夢を見ながら二度と目を覚ますことはない。代わりに、こちらは手出しが一切できなくなるが。
「なんとまぁ……だが、余が言うのもあれだが、良かったのか？宝具なぞ我らに見せて」
「構わん。これぐらいで不利になるぐらいなら、こっちはとっくに負けてらぁよ」
鼻を鳴らして返す。当たり前だ。『彼方にかざす夢の嘶』は確かにオベロンの宝具だが、それと共にそうではない。真名を知らない限り、それを悟られることもないが。
――――最も、本当の真名を知ったところで、こいつの能力が解るわけでもないがな。
そうこうしている内に、眠っている奴らは次第に粒子に変わって消えていく。元が妖精やら、肉体が存在しない奴らだからな。当然と言えば当然か。
「今回の件、あとはこちらで後始末を行わせてもらおうか」
「うむ、よかろう、では、これにて一見落着といったところだな。――――おぉ、そうであった。次の夜、セイバーの奴の城にて、以前言うておった”問答”をする故、お主らも来るが良い！ではな!!」
はいはい、さっさと帰った帰った。これで残りは隠蔽させてもらい

ましょうかね。実験結果の資料とかもあったし、帰ってくれてほっとしたわい。

――明日は聖杯問答、か。さてはて、もし仮にセイバーが、オベロンの本性に気づいたなら、こちらも一切の容赦が出来なくなるね。まぁ、気づいて欲しいという思いがないわけではないけどさ。

聖杯問答（前編）

――――気配がする。何かがこちらへ向かってくる。アイリスフィールが言うには、罠や結界の悉くを強行突破しながら、真っ直ぐとこちらへ直進しているという。

そして、門を破壊して現れた奴は、慌ててかけつけた我々を見るなりこういい放った。

「おうセイバー、出迎えご苦労！いやはや何ともけったいな場所に城を建てたもんよな。迷いそうだったんで、ここに来るついでに木を薙ぎ倒してやっていたら、つい勢い余って門まで壊してしまった。が、まぁ許せ！」

「――――」

呆れるしかなかった。そんな我々を余所に、彼の征服王――イスカンダルはどこから持ってきたのか、酒樽をかついではズイズイと城の奥まで乗り込んでくる。

何しにきた――――そう問うてみれば、”聖杯を求める者同士、戦うだけでなく語り合うことも必要だろうとな”と返された。だからといってここを占拠されても困る。

そうこうしている内に、私と征服王は中庭で座り合い、中の酒を掬った柄杓を差し出してくる。

今までの人柄を見るに、この征服王は、謀略といったものをしないのだろう――そう思い、また差し出されたものを無下にするのも失礼であるからこそ、それを受け取った。

彼はまた言い募る。――聖杯を求める者として、格を問わねばなるまい？――ふむ、成る程。

「それで、まずは私の格を問おうというのか、征服王」

「如何にも。どちらも王を名乗るのであれば捨て置けまい？言わばこれは聖杯戦争ならぬ聖杯問答。

とは言え2人だけでは盛り上がりに欠けるであろうから更に2人ほどに声を掛けてある。そら、我らの他にも王を名乗るのが1人。そ

して――――――

――”王”と言うのをもう一人ほど、余は知っておってな」

胸がざわつく。まさか、”奴”ともう既に接触を？いや、この口振りや態度からはそうだとは思えない。では、誰だ？残っているとすれば〈キャスター〉か〈バーサーカー〉だが……――――――

「――――やぁ、ちょっと遅れちゃったかな？」

その声に振り向く。――バカな、ついさっきまで我々以外の気配はなかったはず！どうやらそれは、アイリスフィールやライダーのマスターも同じらしく、声の方向へと顔を向けていた。

――いや、ライダーのマスターは見知った顔なのか、納得しているようだな？一体、誰が――――

「おや、そうか。確かに、そこの征服王とは違って皆初めましてになるのかな。

――僕は〈オベロン〉。〈”妖精王”オベロン〉さ。オベロンでもロビン・グッドフェローでも好きに呼んでくれていいよ。ま、”王”は”王”でも、お飾りの王様だけどね」

「妖精王……」

驚くしかなかった。我が故郷ブリテンには、確かに『妖精』という存在がいた。時に人を惑わし、時に人を助け、そして――時に人を食らうもの。

私のこの『聖剣』も、その妖精の内の一人である『湖の妖精』から貰ったもの。そうと思えばこそ、”成る程、確かにそうだ”と思わざるを得ない。

――――だが、私の”直感”が違うと告げているのはなぜだ？

「ほんのちょびっとな。まぁ構わん構わん。ほれ、駆けつけ一杯、どうだ？」

「これはありがたい。では一杯貰うとするよ」
征服王から柄杓を受け取り、上品にすする妖精王。王族として、確かに品のある所作だ。まさしく、王座に座るものとして鏡のような姿勢、そして動き。”王”というのは伊達ではないということか。
彼は自らを”お飾りの王”などと言っているが、そんなことはないと、その所作からありありとわかる。やはり、あの好奇心旺盛な妖精達を束ねるものなだけあって、空気が違う。
「――あーぁ、やっと追い付きましたよ……呼ぶなら呼ぶで送ってくれるとかしてくれませんかねぇ？征服王殿」
「おぉっと、すっかり忘れておったわ。だがまぁ、許せ。なにぶん、余も浮き足立っておったからの
セイバーよ、此奴がそこの妖精王と名乗る〈キャスター〉のマスター、あ――「アルレッキーノです、どうぞ宜しく」――だ、そうだ」
彼は……道化師、か？奇妙な仮面をつけて、大袈裟だが、見事な礼だ。時が違えば、宮廷道化師と言われても何も疑問を抱かないな。
「……思い出した。セイバー、切嗣のお仕事の中の話で、彼の名前が出てたわ。

――最近出てきた傭兵の中でも、随一のキレ者にして珍しい策士型の傭兵。奇天烈だけれど、権謀術数を極めた作戦を次々と放ってくる相手で、あの切嗣ですら相手するのを、顔をしかめてまで嫌がる存在。

――”嗤う大道芸（ラフィン・サーカス）”アルレッキーノ」
「おやまぁ、随分と買われておりますなぁ。恐縮でございますよ、”アイリスフィール・フォン・アインツベルン”殿」
成る程、傭兵か。確かに、その礼節を見れば宮廷の者かと見まごうが、にじみ出す気配はまさしく戦場を走るもののそれ。
――策略を得意とする、か。アグラヴェイン卿とは気の合いそうなものだ。あとは道化というならば、ダゴネット卿もか。最も、卿らと彼とでは恐らく方向性が違うだろうが。

「戯れはそこまでにしておけ――――雑種」

そこまで考えていると、黄金の光がそこに溢れる。それを思わず私は顔をしかめてしまう。

まさか、奴まで来ようとはな――――

どうも皆さん、虚映です。早速ですが出来れば助けて下さい。なるべく、早く。

いや、うん。聖杯問答に参加するのはいいけど、いきなりイスカンダルに本名いわれかけるわ、アイリスフィールからは過大評価もらうわで、ちょっと胃がキリキリしてきちゃったよ、ほんとに。

え、なに？オレってばそんなに傭兵界隈じゃタブーみたいな扱い受けてんの？

いやまぁ、確かに”面白そうだから”って、敵の拠点の地下まで掘らせて突撃させたりとか、川塞き止めては拠点にいる敵を水責めしたあとに爆弾投げまくるとかやったけど、そんなに？

とかなんとか思っていると、はい出てきましたギルガメッシュ。もう王様だらけだよここ。壊れるなぁ（遠い目）。相も変わらず文句ぶーぶーですねぇ、

うわぁ、睨んでくる睨んでくる。めっちゃ睨んでくるよあの金ピカ。もうやだおうちカエリタイ……。
「そこな雑種」
「何か、ご用でしょうか？」
声かけられちゃったよー、やだよー、もー、ヤメテクレメンス……。
英雄王ギルガメッシュ――Ｆａｔｅシリーズをやってるやつならまず知らないはずがない存在。対”英雄（サーヴァント）”特攻宝具を始めとした幾千幾万もの宝具を所持し、それをもったいないほどにぶちまけてくる、英雄版ド◯えもんだ。
「貴様……いや、貴様らか。何者だ？」
「……私は、ただの道化にて」
「僕はもう自己紹介はしたよー」
すげぇなオベロン。よくあの英雄王相手にそんな口たたけるなぁ。アニメで見てるときは粋がれたが、流石に本人の前でンなこたできねぇなぁ。ま、関係ないけど。
ともかく、オレは道化だと言うだけ。本名は言わないし、言うつもりもない。向こうも、オレがそれ以上なにも言わないのを悟ったのか、そのまま静かに引き下がる。
その後、イスカンダルの持ってきた酒を飲んで安酒と言い切る。ま、だろうな。現代の品は『大量生産・大量消費』がモットー。だからこそ、神代の頃のような唯一無二のものは作らないし作れない。
「――見るがいい、そして思い知れ。これが王の酒というものだ」
「おぉ、これは重畳」
ギルガメッシュの宝物庫から、神代の酒が現れる。続いて、黄金の杯が現れて各参加者に投げられる――――とと、オレにもか。
「貴様にも一つくれてやる。貴様にはもったいない程だがな」
「では、有り難く」
ここでうだうだ文句をたれても、奴さんの機嫌を損ねるだけだからな。黙って受け取っておこう。
そうこうしている内に酒が注がれていく。うーむ、この香り……嗅いだことはないが、恐らく英雄王お気に入りの『ウルクの麦酒』って

やつだろうな。
　ちびちび。あ、おいしい。
「すげぇな、おい！これは人の手による醸造じゃない、神代（かみよ）の代物じゃないのか？」
「当然であろう。酒も剣も、我が宝物庫には至高の財しか有り得ない。
　――これで王としての格付けは、決まったようなものだろう？」
「ふざけるな、アーチャー。酒蔵自慢で決まる王道なぞ、聞いて呆れる。戯れ言は王ではなく、道化の役義だ」
「――その道化と致しましては、良き酒を生む国は豊かである、と申しましょうか」
　道化と言われちゃあガマンができねぇな。視線が一気に集まったが、気にしない気にしない。ふふふ、オナカイタイ……酔いも覚めるわ、この空気。ぐぅ、辛い。
　ギルガメッシュに食ってかかったアルトリアがこちらをムッと睨んでくるけど、知らん知らん。うち道化じゃもん。なら言えることを言うだけよ。
「フッ、そこな”道化”も判っておるではないか。――まぁ、宴席に酒も興じ得ぬようなさもしい輩こそ、王には程遠いというものよ」
「こらこら、そうつまらん言い分を垂れんでも良かろう」
「そうそう、宴は楽しまないとね。というわけで、僕からはそれなりの演出を開かせてもらおうかな」
　オベロンが指を鳴らした。そして、辺りに森が――『妖精國ブリテン』にて、オベロンが仮初めだが領主として治めていた森。『ウェールズの森』、その再現された光景が現れる。しかも、ただの森ではなく、名もない小さな妖精達の舞う神秘に満ちた森として。
　あの森って、こういう感じだったのねぇ。アルトリアは見覚えがあるのかびっくりしてるし、イスカンダルは感心してるな。ギルガメッシュは――お、意外と好評そう。
「おぉ、こりゃまたすごいな。さて？場も整ったことだ、始めようでは

ないか――――――”聖杯問答”をな」

――始まるか。さてさて、どうやってかき回してやりましょうかねぇ。

聖杯問答（中編）

「――――アーチャーよ。貴様の極上の酒はまさしく至高の杯に注ぐに相応しい。が、生憎と聖杯は酒器とは違う。これは聖杯を掴む正当さを問う”聖杯問答”。

――まずは貴様がどれ程の大望を聖杯に託すのか、それを聞かせてもらわねば始まらん」

馬鹿馬鹿しい、何をわかりきったことを。あのギルガメッシュが聖杯を求める――否、聖杯を目指す理由なぞ、たった一つしかないだろうに。

つって、現状コイツの真名が解ってるのはオレとオベロンしかいないわけだが。あー、森の夜風は涼しいナリ～。あ、お酒？ありがと、じゃもらうね。

「さてアーチャー。貴様は一角の王として、ここにいる我ら三人を諸共に魅せる程の大言を吐けるのか」

「仕切るな雑種。第一――――”聖杯を奪い合う”という前提からして、理を外しているのだぞ」

そりゃそうだ。英雄王ギルガメッシュの宝物庫――バビロンの蔵には、この世のありとあらゆる財、そして、ありとあらゆる武具の原点が仕舞われている。だったら、わざわざそんな『願望器』を求める必要もないし、ましてやその聖杯の”原点”は『ウルクの大杯』。

ま、オレ達としては聖杯なんざいらんし、そもそもそんなもん使うこともないしな。使ったところで、いいとこオレ達の補助にしかならん。

「――お前の言葉は、あまりにも世迷い言に過ぎる。貴様のような錯乱したサーヴァントは、最早狂人のそれだ」

「いやいや……どうだかなぁ。

――――ふぅ……フッフッフ。なぁんとなく、この金ピカの真名に心当たりがあるぞ？余は」

おっと、どうやらイスカンダルの方も気付いたらしいな。ま、”征服王”より態度のでかいって辺りで、そりゃ勘のいい奴は気付くだろうな。

それはさておき、こちらは話を振られない限り、静かに黙っているとしましょっか。オベロンも無言貫いてるし。見た目平然としてるけど、なんとなく苛付いてるのはわかるからなぁ――――令呪のパスで。

「――――貴様……もしかしてケチか！」

「戯け！我の恩情に与るべきは、我の臣下と民だけだ。

――故にライダー。お前が我の元へ降るというのなら、杯の一つや二つ、何時でも下賜してやって良い」

「まぁ、それはできん相談だわな」

あー、お酒おいちい（現実逃避）。そりゃあどちらも”上に立ちたがり”なわけだからな。誰かの下につく、なんて謙虚なマネ、できるはずがない。

結局なとこ、ギルガメッシュが聖杯を求めるのは、”自分の所有物だから”という理由なわけだ。それはあの破天荒野郎ことイスカンダルも納得してるな。一名不満そうだが。

「――だがなぁ、余は聖杯が欲しくて欲しくて仕方ないんだよ。で欲した以上は略奪するのが余の流儀だ。なんせこの”イスカンダル”は、『征服王』であるが故に」

「是非も有るまい。お前が侵し、我が裁く。問答の余地などどこにもない」

ふむん、これでギルガメッシュとイスカンダルの王としての器は示されたな。

――片や、英雄王たるギルガメッシュは、聖杯という名の財は己のモノであるとし、それを簒奪せんとする者を裁くため、今ここに立つ。

――片や、征服王たるイスカンダルは、英雄王の所有物であろうとなかろうと、己の欲する望みのままに、彼方へと届かせんと覇を唱える。

王としての”方向性（ベクトル）”は違えど、やっぱりこの二人は相性がいい

な、主に在り方が。誰の目に問うこともなく、瞭然とし確固なる意思を持った”王”。そりゃあ憧れる奴も出てくるわけだわな。ちびちび、うみゃい。

「…征服王よ。お前は、聖杯の正しい所有権が他人にあると認めた上で、尚且つそれを力で奪うのか」

「……チッ」

「(おい、抑えろオベロン)」

あーもー、こういう場じゃあそんな小っちゃくても聴こえるんだっつーの。まぁ幸い、イスカンダルのクソデカボイスで掻き消されたけどさ。

アルトリアは相変わらず食ってかかってんなぁ。どうだっていいだろ”王道”だなんて。それぞれ千差万別に在るものなんだから。その国は、その王は、その道を歩むことで栄光を手にした。その在り方さえ認めればいいものを……夢見がちな王サマはこれだから嫌だねぇ。

「そうまでして、聖杯に何を求める」

「うむ……――――――”受肉”、だ」

ま、イスカンダルならそれぐらいだろうな。コイツは、『自分の夢は自分で掴む』タイプだ。なら、それを”万能”に請い願うよりも、その足掛けだけ願い受けて、それを使って”征服”する。そういうやつだ。

ははは、ウェイバー君もびっくりして小突かれてやんの。しかも『たかが杯』って、言うねぇホント。アンタのそういうとこ、嫌いじゃないよ。

「雑種……よもやその様な些事の為に、この我に挑むのか?」

「あのなぁ……いくら魔力で現界しているとは言え、所詮我らは”英雄の霊魂(サーヴァント)”。この世界においては奇跡に等しい、言ってみりゃあ何かの冗談みたいな、希人(まれびと)の扱いだ」

「……」

およ、珍しくオベロンが黙っていやがる。つってまぁ、オベロン自身が一番イスカンダルの言葉そのまんまだしなぁ。

――『妖精國ブリテン』において、汎人類史の情報――シェイクスピアの『真夏の夜の夢』から創りあげられた『オベロン』という存在と、ブリテン島が孕んだ破滅願望の塊こと『ヴォーティガーン』。

この二つが悪魔的にミックスして出来上がったのが、この『プリテンダー：オベロン』だ。だからこそ、まぁ何かしら思うところがあるんじゃあないかね。

「いっててて…ぁいて……お前、だから霊体化するのをあんなに嫌がってたのか…。でも、どうしてそこまで身体に拘るんだよ」

「それこそが、征服の起点だからだ！」

――イスカンダルにとって、『征服』とはつまり、只人にとって『生きること』に等しい。いや、『存在意義』それそのものだ。だからこそ、彼は奪うために戦い、そして戦うために〝身体〟を求める。当然の帰結だな。

おうおう、やっぱりギルガメッシュの琴線に触れたか。愉快そうにしやがって。そんなんだから愉悦部って言われるんやぞワレェ。

だが、イスカンダルの言い分はわかるし、その在り方も理解できる。言動には困ったものだけどなー。勝手にこちらを巻き込むのはほんとにやめてほしいでござる……。

「なぁ、ところでセイバー。そういえばまだ貴様の胸の内を聞かせてもらっていないが？」

「――私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望器を以てして、ブリテンの滅びの運命を変える！」

「……（呆れ）」

「……（無関心）」

「……ッ（笑いを堪えている）」

「……（超絶不機嫌）」

待て待て待て待て、笑うな？笑うなよ、オレ。ここで笑ったら全部おじゃんだからな？

あーあ、バカらしい。ほんと、バカ。ここまでストレートに来られるとお腹抱えて呵ヶ大笑したいぐらいだわ。こんなの、自室で聞いてたら大声で笑ってしまってたな。

「なぁ騎士王……もしかして余の聞き間違いかもしれないが……貴様は今、運命を変えると言ったか？それは過去の歴史を覆すということか？」
「そうだ。例え奇跡を以てしても叶わぬ願いであろうと、聖杯が真に万能であるならば必ずや――――」
「ええっと……セイバー。確かめておくが、その、ブリテンとかいう国が滅んだのは、貴様の時代の話であろう？貴様の治世であったのだろう？」
　あーあ、あーあ。本っ当に愚かだなぁ。今さら”終わったこと”を”無かったこと”になんて出来るわけないだろうに。第一、それができても『抑止力（アラヤ）』が出張ってくる。
　滅びた国をやり直す――その大望はいいとしよう。だが叶えるのだけは愚かだとしか言えんね。そもそも、ブリテンはもうあの時には、滅びることが決定されていたのにな。
「は――――は、ハッハハハハ、ハハハハハハハハハ!!」
「クッフフ……ッ」
「アーチャー、何が可笑しい！」
　やべっ、ギルガメッシュに釣られて笑い声が出てしもた。あー、オベロンにも睨まれるー。幸い、他の奴らには聴こえてないみたいだし、結果オーライってことで。
「――傑作だ！セイバァ～、お前は極上の道化だブハハハハハハ!!」
「フフッ……これはまた、”道化（本職）”の立つ瀬が無い程の”道化（愚者）”ですなぁ」
「ッ……」
　ごめんねぇ？ここは嗤わせてもらうわぁ。もう無理だコレ。あかん、ほんっとオモシロイ。オベロンにはめちゃめちゃ呆れられてるけど、悪い、嗤うわ。
　王だなんだと煽てられて、そんでもって玉座に就いたはいいけど、国が滅んだからやり直したい？ゲームじゃないんだからさぁ、身の程を弁えなよホントにさぁ。
「――そうとも。何故訝る、何故笑う！王として身命を捧げた故国が

滅んだのだ。それを悼むのがどうして可笑しい！」
「アハハハハハハ!!」
「はぁ……」
　ギルガメッシュ、大爆笑。これあれじゃね？『王、腹筋大崩壊』ってやつじゃね？オベロンはやっぱり呆れてます。
　やれやれ、コイツはほんと、あまりにも『王』という立場に囚われすぎてるのな。イスカンダル達の治世は暴君のソレだって？そりゃそうだ、それの何が悪いってんだ？『王』という〝個人〟が〝個人〟として生きられない国なんて、あっという間に滅ぶだろJ（常識的に考えて）K。
　暴君よりなお質の悪い暗君ね、全く的を射てるわ。そうそう、歴史ってのは、その時代、その時に生きた者達が魂を燃やし尽くして生きてきた証そのもの。
　それを？悔いる？全くもってクソッタレだね。そんな王なんて願い下げだ。ほんと、嫌になるねぇ。
　……なんかオベロンに似てきた？ワイ。
「――で？王たる貴様は〝正しさ〟の奴隷か」
「それでいい。理想に殉じてこそ王だ。人は王を通して、法と秩序の在り方を知る。王が体現するものは、王と共に滅ぶような儚いものであってはならない。より尊く、不滅なるものだ！」

「――はいはい、綺麗事の演説は結構結構。拍手喝采が欲しいのでしたら、演説台に登って踊れば宜しいかと」
「――キャスターのマスターか。貴様、我が王道を虚仮にするか」
　するもするわ、こんなゴミクズにも劣る理想論。聞いているだけで胸焼けがする。うちのサーヴァントはお酒飲んで無視決め込むらしいし、だったらこちらとしても言い募らせてもらいましょうかねぇ、えええぇ。
「虚仮と言われましても、ねぇ？だって貴女、それじゃあ『王』は〝国の飾り物〟じゃあありませんか。それで『王』が務まるとでも？」
「構わない。むしろ、それこそが王たる者の本懐だ！正しき統制、正しき治世、全ての人民が待ち望むものだろう！」

「”民”を侮るのもそこまでにして頂きたい!!
我々”民”は特段、『王』に其れ程の期待など抱いてなどおりませぬ。『王』に求めるは、何を以て彼は『王』たらんとするのか、その背のみを見るのです。救いだの願いだの、そんな上面の薄皮など、火吹きの種にすら劣ります」
ここは言わせてもらう。下らない理想で、『国民を救います』だなんて、前世でもう吐き気がするほど聞かされた。そういう奴に限って大抵ロクでもないもんだよ。
王は王でも、コイツは所詮、”騎士の『王』”。民を統べる”群の『王』”の器じゃない。専ら、戦い護ることだけしか考えられない、愚の骨頂でしかない。
「我がサーヴァント、並びに征服王陛下に代わり、敢えて語らせて頂きます。
――”無欲な王など、飾り物にも劣る”と。最早貴女のソレは、裏でコッソリとほくそ笑む貧者に、際限なくタダ金を渡す。まさしく真実の見えぬ愚者のソレ。導くことを忘れ、ただ救うだけの王に、未来などそもそもあるはずがないでしょう?」
「――ッ。だが、王が救わねば誰が民を救うと言うのだ」
「王に救われねばならぬ民など、物乞いにさえ及ばぬ国の病床です。正義を語らねば通せぬ王道なぞ、それは下手な道化の演芸よりもなお見るに耐えない代物です。そんな国など、滅びて当然と言えるでしょう」
なーんでオレがこんな説教かまさにゃならんのだよ……。アンタ、いい大人だろうに。なんでそんな”夢”みるかねぇ。気持ち悪いったらありゃしない。
「それに、どうせ貴女、民はおろか臣下でさえも、救うことばかりで、誰も導いていなかったのでしょう?己が間違っていないとばかり信じ込んで、真実を見ようとしない。
――いい加減気付いては?貴女の抱くその想いは、ただの夢見

る街娘のソレそのものなのですよ」
「私は……ただ……」
……ふん。元々この台詞はイスカンダルのものだったんだぞ？それをわざわざオレが言う羽目になって、一体どうしてくれるんだい、全く。
はぁ……愉快そうにこっちを見るのはやめてくれませんかねぇ英雄王さん。ほんと、こっちに興味もたれると困るんですよ、色々と。
――あーもー、はいはいセクハラセクハラ。やめてくれよこういうの、めちゃめちゃカオスじゃんこの空気が。どうしてくれんだよ。見ろよ、森の小妖精ちゃん達怖がってるし困ってんじゃん。ほら、よしよし。ごめんね？
「――――で、そろそろそちらも観てないで出て来ては？ジロジロと見られては芸のタネも仕込めませんし」
おーおー、〈アサシン〉――『百貌のハサン』の分身人格が、これでもかとわんさか出てくるねぇほんと。ゴ〇ブリかよ。つか、〈アサシン〉が表に出て来てどうすんだよ、バカか？
はいはい、『斬撃瞬蜂（バンブルビー）』召喚っと。一応臨戦体制は整えておくけど、まぁ多分出番はないだろ。だって――――――
「――この酒は、貴様らの血で出来ておる――――――余の言葉、聞き違えたとは言わせぬぞ。この酒は貴様らの血、と言ったはずだ。そうか、敢えて地べたにぶちまけたいというのならば――――是非もない」
善意で酒を差し向けたというのに、その酒をぶちまけられてカンカンのイスカンダルが、ようやっと本気を出すのだからな。

聖杯問答（後編）

――辺りに砂塵が舞う。それは、本来森の奥にあるこの古城には有り得るはずのない現象。だが、それは実際に巻き上がっている。

やがて、イスカンダルを中心として眩いばかりの光を放ち、辺り一体の全てを呑み込んでいく。宴会を醸し出していた森は、蜃気楼の如く消えていき、純白に飲まれていく――――――

――そして、広大なまでの砂漠の上に、彼らは立っていた。

はい、ということで。やって参りました『王（アイオニオン）の軍勢（ヘタイロイ）』。アニメでもそうだったけど、やっぱ壮観だよなぁ、これ。

然りぃ、然りぃ、然りぃ！って。うへへ、こればっかりは転生して役得ですわ。っって、端から見たらハチと遊んでるようにしか見えないケド。あれ？それってなんて危険人物？

「――さぁて、では始まるか〈アサシン〉よ。見ての通り、我らが具象化した戦場（いくさば）は平野。生憎だが、数で勝る此方に地の利はあるぞ。

――――蹂躙せよぉ!!」

決着あり、だな。〈アサシン〉とは本来、コソコソ隠れながら、隙を見て一撃を決めるピーキーなクラスのサーヴァント。だのに、英雄王を筆頭としたバケモノ揃いの場所に堂々と姿を現すのはまさしく愚の骨頂だわ。

こんなの、戦いと言えるようなもんじゃあない。征服王の言うとおり、『蹂躙』そのもの。とは言え、これ以上の手札を見せることもないからな。ま、一名とんでもなくショック受けてるみたいだけど。どうかもっと絶望してもろて（クズゥ）。

――はぁ、終わったな。場も白けちまったし、これでお開きってところかね？

「ふぅ、幕切れは興醒めだったな……いや待て？そう言えば、始まりから黙して語らぬヤツがおるではないか」

「――――おや、僕の番かな？とは言え、今さら語ることもないと思うけど」

ん、オベロンの番か。まぁアサシン共を蹴散らした後でオベロンとか、余計に興醒めしそうだけど、どうなんかね？

「そう言うな。それで、妖精王よ。貴様は何を以て王道と成し、そしてお主は何を聖杯に願うのだ？」

「そうだね……ただまぁ、前提から言わせてもらうと、僕はあくまで”妖精”の王であって”人間”の王じゃない。だから、君達とはまた方向性が別だということを覚えておいてほしい」

自嘲気味な表情を浮かべている――――と、いう演技だな。しかしまぁ、堂に入っている分、余計に質が悪いなコレ。初見じゃ絶対わか

らんて。
今のコイツは『オベロン』――――つまり、〝合ってはいないけど、間違ってもいない〟という知識がなきゃ、コイツの真意はわからん。それが知られていない以上、こっちの真意も解ることはない。
「僕は〝王〟として、今を懸命に生きる者達の側に立ちたい。今を生き、必死に未来へと歩む、そういう者達の道標でありたい、かな。まぁ、綺麗事だけどね」
それを聞いて今、オレの脳裏では、妖精國でのオベロンの行動が――いや、オベロンの、〝ウェールズの森の領主〟としての姿を思い出していた。
確かに、あの時のオベロンは、ブリテンという〝目の上のたんこぶ〟を壊すために活動していた。けれど、やっぱりウェールズの森で紡いだ彼らへの想いは、どうしても本物なのだろう。
――――羨ましいな。お前は、さ。

「うむぅ、その気持ちは理解できるが……じゃあなんだ？貴様も騎士王と意見を同じくするのか？」
「いいや？彼女と一緒にはしないで欲しいね。彼女は言わば『停滞』を望んでいるんだろう。けど、僕としては、人も妖精も、明日へ向かって進んでほしいのさ。いずれ、僕の方が置いていかれるとしてもね」
「ッ……」
ハッハァッ！（ＣＶ・大塚〇忠）盛大に煽りよる。まぁ確かに、ソイツがどれだけ偉大で、どれほどの栄光を築き上げたとしても、『国家の停滞』を選んじゃオシマイなんだよな。
国も、民も、人も。生きているなら進み続けるしかない。『停滞』という名の『平和』を完成させてしまった時点で、それはもう、国とは呼べない。――――前世も、そうだったしな。
「で、それを踏まえて聖杯についてだけど。僕としては、〝使い道もないから要らない〟とだけ言わせてもらうよ。強いて挙げるなら――――そうだね……『ある相手と話したい』かな。喚ぶのは……それは今じゃないしね」

「ふ、むぅ……成る程な。貴様は明日へ向かって進む者達の導となら
んとする、か。しかしまぁ無欲なことよなぁ――――あぁいや、これ
はそこな小娘と違って、むしろ善き様なのだがな？うむぅ……

――――キャスターのマスターは、どうだ？何かないのか？」
いやそこでオレに振る？もうちょっと何か言ってよオベロン……
あ、ブランカ――――いやブランカでかっ。思った以上にでかいな
……。

まぁ、はい、自分で答えろと。やだなぁ、注目されるのすこぶる嫌
なんだよなぁ……。
「私めも、これといって願いも在りませぬ。挙げるとしても――――
そこの某のような、『停滞を望む者』の根絶、と言ったところでしょう
か」
「なんだつまらん。御主らは悉く無欲なのか？」
「一概に無欲かと言われましても……我々は、自分にできることは全
て、己で成すのです。そこで『停滞』すれば、いずれ熟れ過ぎた果実
のように腐ってしまいますが故」
「フッ、是非もあるまい。よもや道化の方が道理を知っておるとはな」
アンタほんと人の感性逆撫でしたがるねぇ。ニタニタしやがって、
顔には出さないけどサ。というか、早く帰らせてもらえませんかねぇ
……。

ライダーが戦車を呼び出して帰っていきやがった。おいこらテ
メェ。またか、またなのか？オレを忘れんなっつうんだよ。人のこと
呼んどいて置いてくってどういう精神していやがんだ。
英雄王もお帰りなようで――――あ、せや。
「失敬、英雄王殿」
「ン――――なんだ、これは」
「〝妖精の蜂蜜〟にて。貴殿の宝物には遥かに劣りますが、お近付き
の印にと。蜂蜜酒（ミード）にするなり、甘味にするなりご自由に成されるが宜
しいかと」
「……ほう？気が利くではないか。ならば是に免じて、貴様の如何に

ついては見逃してやろう」
「寛大な処置、有り難く。次に相見える時には、我が仮面、御前にて御見せ致しましょう」
――期待しておるぞ――と言って帰ってった。うちらもとっとと帰らせてもらいまっさ。というわけで、移動用の虫を喚び、ました。はぁ、早く帰って仕込みしなきゃ……。
ちなみにあの蜂蜜、れっきとした本物の蜂蜜です。なんで持ってるかというと、さっき小妖精なでなでしてたらいくつか貰ったので、それのお裾分けということで。
「待て、キャスターのマスター」
「はい？――何か？」
なんじゃい、こちとら疲れてんだ。話すなら話すでさっさとしてくれよ？参加したくもないものに参加して、もうほんと反吐が出そうだわ。
フヘヘヘヘ、ヘイトが溜まる溜まる。……そういやまだ平成なのかこっちは。この唐突な望郷ほんと勘弁してほしいナリ。
「単刀直入に聞く。――『ヴォーティガーン』、という名前に聞き覚えはあるか」
「はぁ、『ヴォーティガーン』、ですか？ふむぅ……――いえ、聞き及んではおりませんが……それが、何か？」
「……いや、知らないのなら構わない。引き留めてすまなかった」
「いえいえ、では私めらはこれにて」
あっぶねー、やっぱり感付かれてたか。ほんとセイバークラスの直感嫌いだわぁ。〝オベロン＝ヴォーティガーン〟の式に至らなかっただけありがたいけど、ここでポカやってたら確実にバレてたな。
ふむぅ、もうちと慎重にやるべきだったかね？いや、今はこれでいい。どうせいつか相対するんだ。現状維持で進めるしかない。
せや、置き土産おいてったろ（唐突な矛盾）。
「騎士王殿、道化から忠告を。理想に殉じるのは宜しいですが、理想は理想なのです。真実を見ずして理想は叶わないのですよ。貴女がやりたいこと、それをはっきりせずして物事は成りませんよ」

「……忠告、感謝する。だが、宴は終わった。疾く去れ」
はいはい、こりゃ聞いてないネ。人の話ぐらいちゃんと聞いたらいいのに。アンタのマスターもだけど、揃いも揃って人の話聞かないから自滅するってのにな。
軽くお辞儀してからとっとこ退散退散っと。ほんじゃま、”拠点(家)”に帰りましょっか。

――――さっきまでのクソみたいな酒盛りが終わって、ようやく家に帰ってきた。やれやれ、僕だって暇じゃないし、面白半分で参加してみたけれど、イマイチだったなぁ。
とは言え、〈ライダー〉の宝具や彼らの信念、ないしは性格を知れただけでも良しとしないとな。〈アサシン〉も始末できたしね。
「それで？ここからどうするんだい？マスター」
「おう――――『獣』を起こすぞ」
やっとか。まさか、本当に”再現”するなんてね。心なしか、どことなく”彼女”に似ている気もしなくはないけど……まぁ、いいか。
本来なら、これで〈キャスター〉が脱落する。けど、マスターは”コレ”をその身代わりに捧げることで、聖杯の穴埋めをしようとしてる。
――――やれやれ、こんなことを簡単に思い付くマスターが、全くもって末恐ろしいね。あの『蠱毒』のお陰で、存在がもはやサーヴァ

ントのソレになっている。だからこそ、そんな『反則技』ができるんだろうけど。
「それじゃあ、夢の終わりを語りにいくとしようか」
「あぁ。おい、往くぞ蔵硯。そして――――
――――『黒犬公（バーゲスト）』」
「「……」」
――――『終末』が動く。片や、５００年に渡って聖杯を求め続けた、今は傀儡の蟲老。片や、ことは異なる未来にて、数多の”妖精（命）”を喰らい尽くし、歩く破滅として暴れし『厄災』の再現体。
絶望までのカウントダウンは、もうすぐそこまで迫っていた――――。

厄災の進撃

――それは、夕暮れ時に現れた。

上空には、先ほどまでの晴れ間はなく、いつの間にやら暗雲が立ち込めていた。

さらに上流側から、影のように黒い犬達が何体も現れてくる。それらは、未遠川の周りを歩いていた人々の側を次々に通過していく。その度に人々は酷い眠気に襲われ、一人、また一人と眠り転けていく。

次第に、夜のように暗くなった上流から、見上げるほどの巨体を持つ存在が、その爛々とした目を輝かせる。

「――全ては……我らが王の為に……」

虚ろな目をした老人が一人、川縁に立っていた――。

異常事態を感じたサーヴァント達が次々に集まってくる。真っ先に現れたのは、セイバー――アルトリア・ペンドラゴンと、その陣営であった。

「あれは――っ、『間桐　臓硯』!?行方不明になったって聞いてた

のに、どうして……」
「っ、そこの老人。貴様、一体なにをするつもりだ。――――いや、何を呼んだ!!」
セイバーが鋭く睨み付ける。妖しげな雰囲気を纏ったその老人――――間桐　臓硯は、静かに笑い声を上げる。
そして、セイバー並びにアイリスフィールを見据えながら、その手に持つ杖を打ち鳴らす。
「クックック……いやなに、何も使えん奴らばかりに任せるまでもなく、儂自ら聖杯を取りに往けば良かったものと気づいただけよ。だからこそ、儂は此奴を呼び覚ました。使い魔（サーヴァント）未満だが、充分よ」
臓硯の背後より、見上げる程の巨体を持つ存在が現れる。
――――それは、まるで影のように黒く、禍々しい赫色の眼光を放っていた。更には、その巨体の周りには、アルトリアですら見覚えのある存在がたむろしている。
「犬……？いや、まさか――――『黒妖犬（ブラックドック）』か！」
「然りよ。付属品ではあるが、存外有用であったわ」
老人が嗤う。巨体が歩み寄り、天にまで轟く遠吠えをあげる。それにつられるように、周囲の黒妖犬達も遠吠えをあげていく。
そして、それらの視線はセイバー達へと向けられ、獰猛に牙を剥き始める。そんな中、重厚な走行音を鳴らしながら、一台の大きな戦車がセイバーの隣へと降りる。
「おぉ騎士王！」
「征服王……！」
軽快に声をかけてきた征服王イスカンダルに対し、睨みを利かせるセイバー。その様子に慌てたようにして訂正を入れる。
「よせよせ、今夜ばかりは休戦だ。あんなデカブツを放っぽったままでは、おちおち殺し合いの一つもできはせんわ。さっきから、そう呼び掛けておる」
当人も参ったように語る。その様子に偽りはないように見える。というよりも、最初に現れた時のように、彼自身隠し事はしない主義であることが伺える。だからこそ、多少険を和らげる。

「ランサーは承諾した。じきに追い付いてくるはずだ。――――実を言うとキャスターの奴らにも声をかけておってな。ただまぁ、彼奴らも取り込み中らしく、遅れるとのことだそうだ」
「――――。了解した。こちらも共闘に異存はない。征服王、しばしの盟だが、ともに忠を誓おう」
　アイリスフィールに確認を取り、征服王の申し出を受けるセイバー。その後、戦車の中からウェイバーが顔を出し、アイリスフィールに作戦の可否を問う。
「ともかく、速攻で倒すしかないわ。あの怪物は、見たところ周りの人達から魔力だけを吸い取っているみたいだけれど、いつその牙を剥いて暴れるか判らないわ。そうなる前に、どうにかしてここで食い止めないと」
「――ふむぅ、成る程な。奴が飢えに飢えて見境無しの食事をおっ始める前にケリをつけねばならんわけだ」
　そうして彼らは臓硯を見やる。これらを喚び出した彼の老人は、未だ薄らとした笑みを浮かべ、その巨獣の背に佇んでいた。
　――――不意に、セイバーの直感が疼く。あの老人を見る度、そして、あの巨大なナニカを見る度に、どうしたことかセイバーにも判らず、只ヶ己の直感のみが疼く。
「見たところ、あの老人が主犯であろうな。だが、当の奴はあの厄介そうで尋常でないデカブツの上に乗っておるときた。さぁ、どうする」
『引き摺り下ろす。それしかあるまい』
　態度は変わらず、しかし、油断のない鋭い注意を巨獣から離さないイスカンダル。現に彼の言うとおり、老人こと、間桐臓硯は巨獣の上で薄気味悪い笑みを浮かべるばかり。
　そんなとき、声が響きランサーが実体化する。槍を構え、悠々とばかりな態度を見せる。
「ランサー、その槍の投擲で、岸から巨獣の上を狙えるか」
「モノさえ見えていればどうということはない――――と、言いたいが、あれでは届く前に墜とされるだろう」
「なら、撹乱ぐらいでいいならやってみせるとしようか」

ふと、頭上からの答え。見上げると、手のひらほどな純白の蛾が飛んでおり、そこから何かが飛び降りる。と、同時に、コミカルな演出と共にオベロンが姿を見せる。

舞う様な着地を見せて、彼はこうのたまう。

「妖精王オベロン、有事につき颯爽と登場――ってね。戦う力はそれほどないけれど、気を逸らすことぐらいならできるとも」

「ならば先鋒は、私とライダーが務めよう。いいな、征服王」

イスカンダルは了承するも、セイバーに対して訝しげな問いかけをする。それに対しセイバーは、己に与えられた『湖の乙女の加護』について話す。

それに感心するイスカンダル。そして、一番槍は貰ったとばかりに戦車を駆け巡らせる。続くようにしてセイバーが川へと駆け出し、水面の、ほんの紙一重分の空間をおいて、まるで地上で走っているかのように巨獣へと向かっていく。

それを見届けたオベロンは、虫や小妖精（ピクシー）達を喚び出す。それらに労るように、こう語りかける。

「やぁ皆。悪いんだけど、彼らの注意を惹いてほしいんだ。あぁでも、無理はしないでね？目の前で踊るだけでいいんだからさ」

小妖精達は元気よく返事しているかのような動きを見せ、次々に黒妖犬達の前へと飛んでいく。セイバー達を抑えんとしていたはずの黒妖犬達は、目の前でひらひらと舞う目障りな存在に、追い払うようにして注意を逸らせてしまう。

その不意を狙い、セイバー、並びにライダーは、周囲に蔓延る黒妖犬達を討ち払っていく。そして、ついに巨獣に対しても攻撃を加えていく。が――――

「くっ――（攻撃が効かない……いや、効いてはいるが、ここまで微々たるものなのか…）」

今までの雑兵モドキであった〝呪塊妖精（モース）〟や〝黒妖犬〟らとは違い、この巨獣に対して有効打が与えられずにいた。攻めるに攻めきれず、どうにかもがく二人。

そんな時、上空から幾つもの武器が巨獣に向かって飛んでくる。そ

の武器群は巨獣の身体を貫き、突然のダメージに驚きの声を上げる。だが、少しして段々と元に戻っていき、ついには完全に修復されきってしまう。

――戦場から少し離れたビルの上――

おーおーおー、やってらやってら。揉めてる揉めてる。貴族意識というか、魔術師的意識の高い時臣と、森羅万象を統べる王としての意識の高いギルガメッシュとじゃあ反が合わねぇよってハナシ。

どーもー、アルレッキーノこと朝露どすー。いやぁにしても、無理矢理繋ぎ合わせてみたけど、案外上手くいくモンね。

この未遠川の上流から、『黒犬公（バーゲスト）』としての能力である『魔力喰い』、それを周囲の黒妖犬共と共有させながら進撃させるという、自分でも中々無理のあるやり方だったんだがね。

ま、もうあのご老人も必要ないし、このまま首謀者として退場してもらいましょうかね。オベロンも、いい具合でアリバイ作ってるみた

いだしな。
『（マスター、この後は？）』
『（戦闘機が二機来る。内一機は落とせ。片方はバサスロ出勤でギル集中。補正は微量で良し）』
『（りょーかい）』
そんなこんやしてるうちに、キマシタワー。んと…”Ｆ―１５”だっけ？あれ。そこまで現代兵器に詳しいわけじゃねぇからなんとも言えんが。
どれどれ……？ダメージを受けたバーゲストはー、上空を睨んでギルガメッシュを捕捉ぅ。そして足元から鎖をこれでもかと向かわせるも？運悪く一般通過しちまった哀れな戦闘機に当たって墜落。そしてンンン、ゴチソウサマーッ、っと。
『（うわ、何あの変態軌道。キモッ）』
「『ウハハハハ』（いいじゃん最っ高。ああいうのロマンだわぁほんと）』
出た出た、バサスロの通常の戦闘機にはできないクソ変態軌道。しかもミサイルが鋭角軌道からの無限追尾とかエグすぎるわぁ。あれは空対空戦闘（ドッグファイト）したくねぇなぁ。
つって、それ以上に変態的な軌道するギルガメッシュのヴィマーナよ。ハハッ、やっぱ直に空気に触れた観賞はたまんねぇなぁオイ。
――――ん？おいおいおい……余計なことしないでくれよな……――――。

「遠坂……時臣……ッ！」
「……間桐、か」
――伝えねば、伝えねば。このままではマズイ、このままでは危ない。葵さんも、凛ちゃんも。そして――”アイツ”と一緒にいる、桜ちゃんも。
ダメだ、戦ってはダメなんだ。お前が死んでしまってはダメなんだ。桜ちゃんを、臓硯に養子に出したことは許せない。けど、それ以上に、お前が死ぬのは、俺がここで死ぬ以上にダメなんだよ。
「――逃げろ、ッ。葵さんを連れて、冬木市から、逃げろ！」
「――何を、言っている？」
頼む、届いてくれ。俺はもう、永くないんだ。俺にはもう、伝えられることが少なすぎる。
なぜなら――――アイツらの作戦を、俺はつい、聞いてしまった。そして、見つかってしまった。逃げてきたが、多分もう見つかっている。だからもう、俺は助からない。
「お前が、桜ちゃんを臓硯に養子に出したのは許せない。けど、頼む。逃げてくれ――――葵さんを、凛ちゃんを、助けられるのは、お前だけなんだ」
「――――雁夜、何が――」
「ガッ、アアアアアアアアアアアッ!!!」
苦しい！痛い、イタイ！なんだ、これは。なんだ、この痛みは。背中から――蜂？蜂、だと……まさか。いや、そんな早くに？嘘だ。まだ、まだなにも伝えられていないというのに。
不味い、不味いマズいマズいマズイマズイイタイイタイ――――ッ！

「時臣ッ！キャスターは偽物だ!!あれは、サーヴァントじゃない！」
「なんだと……？どういうことだ、説明を――」
したい、けど、もうそんな時間がない。身体が勝手に動かされる。関節一つ持ち上げる度に、自分の筋肉から細胞の一つ一つが悲鳴を上げる。
血が胃の中を逆流して、吐血する。けど、勝手な動きは止まらない。
「逃げろ時臣！俺はもう、俺の意思で動けない！桜ちゃんを助けて逃げ――ガアアアアアアッ!!」
『（おいおい、白ける真似すんなよ。せっかく助かった命を無駄にするとか、本当にアンタは使えないなぁ）』
身体の何もかもが上書きされていくような、そんな不快感と共に、アイツの声が脳に直接送られてくる。
頼む……逃げろ、逃げるんだ時臣……このままだと、葵さんも、凛ちゃんも。皆、みんな……――――――
「みンナを……まもレ……とキおみ……」
「雁夜ッ！」
あぁ……ひさびさに、お前に名前をいわれた気がするよ……。わるい、時臣……もう、いしき、が……――――――。

『聖剣』解放

――――一体、何がどうなっていると言うのだ。
元旧友にして、今は魔術師の世界と袂を別ったはずの雁夜が、マスターとして現れ、あまつさえ私に警告だと？
それに――”キャスターが偽物”とは、一体どういうことなのだ？
確かに、彼の『妖精王オベロン』がキャスターとして召喚されたことには驚いた。だが、それが偽物とは？
「ガァァァァ……ト、キ…オ、ミィィ……ギィァァァァッ!!」
「ッ――――」
狂ったような声を上げる。半ば、強制的に魔術を使わされているのだろう。身体の至るところの皮膚が裂け、血を流す。あれはもはや、当人の意識はないのだろう。
幸い、向かってくるものが防ぎやすい初歩的なものや、私自身の火炎魔術で一掃できる羽虫操作ばかりだ。だがそれでも、疑問は尽きない。
雁夜、お前は……一体何を知ってしまったというのだ――――――。

地に蔓延る犬共と、空を飛び交う二色の影を見ながら、思う。――――うーん、ビックリするほど混沌（カオス）。

皆に”足止め”という名の偽装工作をさせてもらっているけれど、正直言ってそのままでも勝てそうなんだよねぇ。だって、『英雄王』は『狂った騎士』とランデブーしてるし？『征服王』はさっきから突撃しかしてないし、『騎士王』に至っては頼みの”聖剣”が振れないときた。

「――妖精王殿」

「うん？何かな」

おっと、いけないいけない。今はまだ戦闘中、油断は禁物だったね。”彼”に話しかけられたことで、素を出しかけてたことに気づいたよ。

「貴殿の御力で、どうにか私も戦場に――」

「いやぁ、無理かな。残念だけれど。って言っても、今行ったら間違いなくお荷物だよ？」

そうそう。ここで”彼”――――ディルムッドに行かれると困るんだよね。彼の持つ宝具は、端的に言ってしまえば、あのバーゲストを倒しうるものだ。ましてや、彼がここで動くことは論外でもある。

ま、そろそろ動きがあるんじゃないかな？

「フ、フフフ、フハハハハハ！好い。英霊なぞに頼らずとも、儂が蹂躙し尽くし、聖杯をこの手に――――」

バクリっと。僕が『ヤレ』と指示をしたお陰で、あの気味の悪いお爺さんはあわれゴックン。まぁ、流石に皆驚くよね。主導権を握っていると思っていたら、食べられちゃったもんだしね。

さてさて、更にあのお爺さんに仕込んでおいた”呪詛”によって、『黒犬公』の身体が膨張していく。そして肥大化したバケモノは、倒れ伏す人々や野次馬目掛けて動き出す。

「おぅい、セイバー！このままじゃあ埒が明かん。一旦退けぃ！」

「バカな！ここで食い止めなければ――――」

「そうは言っても手詰まりであろうが。いいから退けぃ！」

おや、セイバー達が戻ってくるね。作戦会議かな？

――ふーん。イスカンダルの宝具で足留め、ね。いいんじゃないかな？持つわけないけど。程々に付き合わせて、頃合い見て食い破らせ

るか。
っと、あの二人が降りてきたか。丁度イスカンダルが宝具を発動したタイミングだったみたいだし、残念ながらぶつかることはなかったようだ。

さて、アーチャーのマスターに焼かれ落ちたカリヤ君は、一悶着あったみたいだけど、なんとか回収できたみたいだね。なら良かった。あれはまだ必要だからね。
おや、あれは確か『携帯電話』っていうシロモノだったかな？そして、あの機械の中から聴こえる声の主がセイバーのマスター、と。
――――へぇ？位置ずらしが利くなんて、随分便利なものだね。それに、左手の解放、ね。
さて？それじゃあ騎士サマ達がどんな選択をするのか、”僕”としてはそれなりに楽しみだな。破滅か、それとも我欲か。どうするんだろうね？って言っても、基本的には”俺”はどうでもいいんだけど。

「――ここで勝利するべきは、我らが奉じた騎士の道。そうだろう、英霊アルトリアよ」
ふーん、解き放つんだ、”ソレ”を。はぁ……また見ることになるなんて、ね。あの忌々しくも綺麗な『聖剣』を。
さて、まぁほんの少しの邪魔はさせてもらおうか。ということで、こっそりとバーサーカーの視線がこちらに向きやすくしてと。
英雄王は墜ちた。けど、セイバーも随分とよくよけるもんだな。あの弾幕の中を、水面の上を駆けて避けていけるのは大したものだよ。いやホント。
ん――――やっと、イスカンダルの固有結界が軋みはじめたか。兵士クンも来たけど、どうやら限界っぽいね。ここで王手をかけたいところだけど――――そうもいかない、か。
――――そこまでにしてもらうぞ、狂戦士!!――――
これでバーサーカーが撤退、か。しかもあのアーチャー生き残ってるし。ほんと、これだから英霊ってのは。

固有結界が解けて、肥大した『黒犬公』が照明弾の下に現れる。ソレに対して、セイバーがその黄金の剣を掲げる。
――あぁ、本当に。心の底から、反吐が出そうな程に嫌いだ。この”光”は――――
”彼女”と重ねて、思い出してしまいそうになる。別人だと判っているのに、正反対な存在だと判っているのに。あの融通の効かない、けれど一途に駆け抜けた彼女と。
星の内海から溢れる力と、数多の戦士達の魂が光となり、辺りに満ちる。セイバーが、一歩踏み出すと共に、『聖剣』の光は極大へと至る。

――――刮目せよ、”卑王”。
――あぁ、視ているとも。”騎士王”。

星の内海にて打ち鍛えられた、人々の願いを携えし星の聖剣。幾多もの光を束ねて放たれる、其は――――
「『約束された勝利の剣』!!」

放たれるは光の奔流。水面を裂き、『黒犬公』の身体を崩壊させていき、遂にはその核に届く。
そして――――全てを呑み込み、巨大なまでの光の柱となって、立ちはだかった”厄災”を消し去った。
これをもって、三遠川における大規模かつ類を見ない、英霊達の一大共同戦線は終結したのだった――――。

――やれやれ、全くもって見事なものだったよ。だからこそ、ありがとうと言わせてもらうよ、セイバー。これで僕達は後顧の憂いはなくなった。

あの『黒犬公』は、ゾーケンとかいうゴミを食らったお陰で、英霊のソレに準ずる〝格〟を得ていた。更には、この聖杯戦争自体がもうマトモじゃないのもあって、本来〈キャスター〉が入るはずだったスペースに、目論見通りピッタリ填まっている。

「――それで、そっちの首尾はどうだい？マスター」

「おう、バッチリ出来上がってらぁよ」

投げやりに放り渡された〝ソレ〟を受けとる。

――〝彼〟が持っていたものと比べて、見た目はそう大して変わらないが、禍々しさが格段に上がり、峰となる溝の部分には、大口を開けた芋虫のような意匠が彫られている。

「奴の宝具、『無毀なる湖光』をモデルにしたお前さん専用の武装礼装だ。敢えて銘を付けるなら、そうさな――――

『堕穢せし湖光』」

「へぇ……」

俺は改めて、その手に持つ『堕穢せし湖光』を眺める。

虚映曰く――――本来の『無毀なる湖光』が持つ、パラメーターの1ランク上昇、竜殺し、不壊属性、状態異常を含めた様々な攻撃に対する耐性能力値の上昇といった効果はもちろんのこと、〝俺〟が持つことによって、接触時に敵からの魔力吸収、及び魔術などによるエネルギー的な間接攻撃の吸収など、中々に便利なシロモノとなっている。

「一応、取り込んだ魔力は小出しにも出来るよう調整してある。――元が元だからな、オレでも流石にキツイもんがあるってもんだわ」

「ま、こんなもんならまだマシじゃない？まだ負けてもいないんだしさ」

――虚構魔術による〝宝具複製・改造〟――。できるとは思ってな

かったけど、本当にやりきってしまうとはね。ただその分、かなり持っていかれたらしいけれど。
マスターが言うには、”大規模魔術を五回行使してもお釣りがくる量”が持っていかれたらしい。事実、工房の床には、すっかり空になった魔力蓄積用の結晶がこれでもかと積まれている――ちなみに、これは今まで溜め込んだ約7割の量だとか――。
「それで？ここからはどうするつもりかな？」
「明日の夜、ランサーが消える。そこはまぁいいとする。オレ達が動くのは、アーチャーとライダーがぶつかった後だ。
――そこから先で、全ての決着が着く。それまでは英気を養うこったな」
くたびれた様子で、マスターが寝室へと引っ込む。俺は剣を掲げて、その背をなぞりながら思い起こす。コレを制作するにあたって、しばらくはあまり大きく動けそうにないらしい。
部屋の明かりに当たり、妖しく輝くそれを眺める『奈落の虫』。各々の思惑が交差する中、その”悪意”は静かに期を見計らい、その”失意”は静かに牙を研ぐ。
――さぁ、黄昏の時は近い――――。

オベロン②：記憶

――夢だ。誰かの、夢だ。誰かは解っているが、だれかは判らない。
灰色の世界だった。色のない、死後の世界があるのならば、まさにこの通りの世界なのだろう。命の流れが感じられない、色褪せた世界。

――彼は独りぼっちでした。ずっーとずぅーっと、独りぼっちでした。助けを求めても、救いが欲しくても、誰も助けてくれず、誰も救ってはくれませんでした。
どれほど努力しても、どれほど功績を重ねても、誰も彼を見ずに、その血と汗を流した日々を知らず、褒められることも、祝福されることもありませんでした。
彼は、神様にすら見棄てられてしまったのです。

『オマエ、ほんっとつかえねー』
『おもしろくなーい』
幼少期、彼は年を経るごとに、一人になっていきました。だんだん、だんだん、周りには誰もいなくなっていきました。

そうして年月は経ち、少年となりました。
『アイツだよ……』
『うわぁ、ないわぁ…』
彼は、一人は嫌でした。なので、仲良くしようと、明るく接していきました。けれど、彼に返ってきたのは、侮蔑と差別と、そして嘲笑でした。
彼は、人を信じることをやめました。彼は、人と共に歩むことをや

めました。彼は……ヒトを憎みました。

『でさー……そうそう……』
『えー？……それさー……』
『……』

彼は一人でした。彼は独りでいました。彼は、独りが心地好くなっていました。

助けを求めた”親（ダレカ）”は、独りになっていくことを、気のせいだと言った。それは、お前の独りよがりだと言った。

誰にも救われず、誰にも見向きもされなかった彼は、次第にねじ曲がっていき――――遂にはその歯車すらも、狂ってしまいました。

『ゲホッ……いやぁ、はは……ここまでかね…』

少年は青年となり、夜の街で独り、赤い染みを洒落た服につけて、灰色の壁にもたれかかりながら空を仰いでいた。

その歩んだ道のりは、常道のものではなく、取り付く島を喪った、憐れな漂流者の成れの果て。殺しに殺し、その果てに砕け散った決意の先。殺戮にのみ、己の生ける道を見出した、愚者の末路。

『ははっ……ロクでもねぇ、な……』

こうして、灰色の世界を生きた男は跡絶えた――――

「――――はッ、はぁ……なんだよ、コレ…」

気持ち悪い、吐き気がする。なんだ、アレは。あんなもの、妖精國の奴らの方がまだマシじゃないか。いや、どっちもどっちだけどさ。

侮蔑と差別と嘲笑と、血と殺戮と狂笑と。あの狂ったニンゲン共の世界で、まるで自滅を望むかのように、笑ってアイツは死んだ。

「――それが、オレの前世さ。オベロン」

「……前世、ね。俺のマスターだからロクでもないと思ってたけど、予想以上だったよ」
「言うねぇ。まぁ……実際そうだったけどな」
へし折れて倒れた十字架の上に、自嘲染みた笑みを浮かべる”虚映（マスター）”の姿。彼の言う通りなら、ここは彼の夢の中。もっと言えば、彼の『記憶』の中にいるってことか。
正直、不愉快だった。でも、どこか腑に落ちた。彼の異常性は、ここから来ていたってわけ、ね。
「それで？いつまで続くのさ、コレは」
「さぁ？わかんね。てか、解ってたら苦労しねーよ」
うーん、こうやって相手するとつくづく感に障るなぁ。まぁ別にいいけどさ。俺としては、マスターがどういう奴であろうと、契約の上では従うよ？そりゃあね。
「そら、また続きが来るぞ。見たくもないけどな」
「それは同感」

――くるくるくるくる、まわる”選択（ドア）”。
いきつく先は、”奈落の底（ナベのなか）へ”――――

――むかーし、むかし。あるところに、声をあやつる一族がいました。彼らは声をつかって、いろんなことができました。
けれども、ある時からそれができなくなりました。こまった彼らは、しかたがないので、自分たちのからだをいじりはじめました。
それでもダメだったので、こんどはダレカのからだをいじっていきました。声をあやつる力がほしくてほしくて……

――――そのうち、彼らはしたかったことを見失ってしまいました。

そんな彼らに、とあるこどもがうまれました。彼らはおおいによろこびました。『これでようやくとどく』、『これでとどいてみせる』と。
けれども、その願いはかないませんでした。
こどもは、彼らからの愛情が、つくりものであるとわかっていました。わかってしまいました。

だから、こどもは彼らを殺しました。
こどもは知っていました。彼らの目の中になにがあるのかを。
こどもは知っていました。彼らが、本当は愛情なんてないことを。
こどもは知っていました。彼らから与えられるのは、全て自分のためではないことを。

子供じゃないコドモは、知ってしまいました。
――ここでも、自分が求めたものはないのだと。

だから、コドモは殺しました。助けを求めるコエに対して、『お前達

もやってきたじゃないか』と。
だから、殺しました。『誰も助けようとしていなかったろうに』と。
だから、殺しました。『充分殺し尽くしたんだから、今度はアンタらの番だよ』と。

屍の山を築いた、虚ろを映す少年は、やがて死を笑う道化師になりました。
そうして彼は、無差別な粛清(救済)も、無情な殺戮(研究)も、理想を体現した英雄(ヒトゴロシ)も。笑い嗤って、最後には自分を嗤うのです。

死に意味は無く、追い求めることは徒労であり、努力にもまた価値はなく。自らに愛する資格はなく、また愛される資格もなく。愛を嗤い、情を嗤い、嗤いわらって遂には何もなく。
空っぽの伽藍堂は、何かを想うこともなく、童話のような暖かさは飾り物で、英雄譚のような明るさは仮面で。
どうしようもないほどにまで狂い堕ちた彼が願うのは、『ただ、独りでいること』だったのです。それこそが、彼の求まる救いだと信じて――――。

「――前世でお前のことを知ったのは、手慰みにゲームをしていた頃さ。しびれたよ、憧れたよ。けれど、それはアンタに対しての侮辱に他ならない。
だから、お前が”ニンゲンを嫌悪する”のなら、オレは”ニンゲンを嘲笑う”。お前が”ニンゲンは気持ち悪い”と言うのなら、オレは”ニンゲンは面白い”と言おう。
それがオレ。『朝露　虚映』にして『アルレッキーノ』というニンゲンさ」

あぁ、そうか。オレが人間や妖精達に対して”気持ち悪い”と思ったのに対して、コイツは人間達に対して”無関心”なのか。手を出されたからやり返す、ソイツがやったから仕返す、ただそれだけ。

俺が『ブリテン島の自滅願望』からうまれたなら、コイツは『人類が造り上げた自滅装置』。いずれコイツは、人間共の積み重ねた罪の数だけ殺し尽くすであろう、粛清者になる。

酷い話だ。否定して、否定して、己の思うがままにしようとして、結局は自滅のための粛清機構を造り上げてしまうなんてね。まるで妖精國の妖精たちみたいだ。

「どうだい？オベロン。オレも随分と”くだらない”だろう？」

「……はぁ」

……全く、どうしてこのマスターはこうなのかな？ま、境遇を考えたら仕方ない、か。

くだらない、本当にくだらない。身勝手なエゴを押し付ける、気持ち悪いあの人間共と俺を一緒にしないでほしいよ。

「マスター。敢えてそう呼ばせてもらうよ。俺は基本的に、全てどうでもいいんだよ。君の過去も、経験も、俺からすればどうでもいい。けど一つだけ、本心で聞かせてもらう。

――アンタ、今楽しいんだろう？」

「――――――」

マスターの目が見開かれる。なに？解ってなかったとでも言いたいのかな？

確かに、今までのマスターの人生はドン底もいいところ。暗い穴の底、まさに奈落の穴を落ちていっているに相応しいほどだ。

けれど、俺と共にいるときのアンタは、憎たらしいほどにまで楽しんでいただろう。初めはメンドクサそうにしてたけど、それでも俺と一緒のアンタは生き生きとしていた。

「隠すなよ、だったらそれでいいじゃないか。俺とアンタで、最高のシナリオを書いてやって、”抑止力（アラヤ）”に言ってやれよ。

――――『ザマァみろ』ってさ」

「――ぷっ、あっはははは!!いいね、それ最ッ高。中指立てて嗤ってやらぁ」
そうそう、こうじゃないとね。確かに、俺は汎人類史だって、何であれ気持ち悪いとしか思えないさ。
けれど、マスターだけは。アンタだけは、気の知れた悪友とでも言うのかな。そういうものを、感じている。まぁ、死んでも口には出さないけど。
「さぁ、そろそろ夢の終わりだ、マスター。いけるかい？」
「当たり前だろ、誰にものいってやがる。とことん引っ掻き回してやらぁよ」

間もなく、夜が明ける――――――。

決戦前夜

――――オベロンが、虚映の夢を見る前のこと――

――それは突如として、私の前に現れた。傍らには、どこか遠くを見ているかのようなバーサーカーのマスターを抱えて、そこに立っていた。

その男は、まるで夜の闇のように黒く、底のない穴のように胡乱な男だった。

『――コイツ、好きに使ってよ。もう用済みだからさ』

そう言って、バーサーカーのマスターを放り投げてきた。生きてはいる、意識もある程度はしっかりとあるようだ。先日、彼を回収しようとしたところ、仮面の男に邪魔をされたが、その関係者なのだろうか。

一体なにが望みなのか、そう聞くと、男は一瞬だけ面倒臭そうな顔をしたが、次見たときには薄ら笑みを浮かべて宣った。

『別に？好きに使いなよ。あぁでも、もしソイツが望んだら、せめて仇敵――確か、トキオミ？とか言う奴と会わせてやってよ。きっと、面白いから』

――貴様は、何者だ。

英霊にしては禍々しく、サーヴァントにしては空虚だ。まるで、そこにいるのにいないかのような。そんな印象が感じとられる。

少し悩む素振りをしたあと、先ほどと変わらぬ……いや、先ほどよりも笑みを深めた顔で名乗った。

『俺？そうだね……名乗るとするなら――――

”卑劣(ヴォー)で姑息(ティ)で孤独(ガー)な王(ン)”さ』

――目が覚める。柔らかな寝台ベッドの上から起き上がり、煩わしいほど輝く朝日を見る。小鳥が歌い鳴き、暖かな陽だまりが届いてくる。

……とまぁ、アンニュイな詩を唄ってみましたが、やめました。ええ、やめました(ドマーン)。さっさと着替えてうちのサーヴァントを喚ぶ。

「オベロン」

「昨晩にはもう終わってるさ。仕込みは上々ってやつだね」

おっと、もう終わってたのか。流石だね、ほれぼれするよ。

オベロン――いや、ヴォーティガーンに頼んでいたのは、『間桐　雁夜にオベロンのスキル――”夢の終わり”をかけて、言峰　綺礼へと渡すこと』。その後のことは、まぁ多分、ギルギルから”愉悦”を教え

られた言峰がやってくれることだろうよと。

スキル『夢の終わり』

――――対象一体に、究極的なまでなパワフルドーピングをかける、オベロンとしての……いや、妖精國の滅亡と人類史の崩壊を望んだ、”オベロン・ヴォーティガーン”としての切り札。

このスキルをかけられた対象は、その能力値が莫大に増加するという。ヘタなサーヴァントであれば、恐らく宝具の連続使用さえできる破格のスキル。

だがその代わりに、このスキルをかけられた時点で対象は強烈な幻覚作用に襲われ、次第に自我が消失。最後には二度と覚めぬ夢の中で、静かに息を引き取ることとなる。

「でもやっぱ……えげつないよなぁ、これ」

「なにせ僕は”戯曲の中の妖精王”だからね。全て夏の夜の夢、その一時の狂騒にすぎないということさ」

手元にある、昔にどこかで買った”遠見の水晶”をいじりながら、オベロンのスキルにあてられたカリヤを眺める。

一応カリヤクンは原作通り、言峰に愉悦のために殺された時臣クンの死体を見つけ、さらにはそこに奥さんも現れ、あわや勢い余って殺しちまいましたとさ。ちゃんちゃん。

愚かだねぇ、時臣クンもさ。せっかくカリヤクンが警告してくれたのに、それを聞き入れず母子をこの冬木市戦場から離れさせなかったんだからさ。

だから、こうなった。これはもう、時臣クンうっかりどころじゃなくて、戦犯だよ?うん。呆れて言葉も出てこないよ。

「バーサーカーの様子はどぉ?」

「今のところは静かにしてるよ。ま、夢の中でアイツに何かやってたみたいだけど」

「抵抗――だとしたら無駄なんだよなぁ」

ま、大方カリヤクンの夢を通して、怨嗟の声でもぶつけてたんだろ

うけど。とはいえ、オベロンのスキルが発動してしまったからには、どの道彼はもう救われない。救えない。
物語も終盤、これより決戦の時。今夜と明日で全てのケリがつく。……あぁ、楽しみだ、愉しいとも。たのしくてしょうがない。よもや、オベロンを召喚した時はどうなるかと思ったが、ここまでくれば出し惜しみはナシだ。

――かつて夢見た自由の理想郷（アルカディア）は、その追憶から消え、かねて存在すら知ること能わず。何者にも振り返られることのなかった道化師。
ついには人を棄て、嘆きを棄て、救済を棄てた彼の側には、あまねく全てを喰らい呑む『奈落の虫』。
希望は無く、絶望はすでに彼方へと。己は人を嗤うモノ、傍らには人を蔑むモノ。ならば、最早やるべきことはただ一つ。
語り明かそう、空虚な物語を。笑い明かそう、愚か者たちの末路を。それは、決して誰にも知られることなく、誰にも想われることのなかった者達が歩む世界。

――ニンゲン共よ、己の愚かさを知るがいい（自業自得だとも、解っているだろう？）――

その夜、物語は終わりに向けて動きだす――――。

狂った泉の騎士は、雷鳴轟く大王に化け、はや貴き騎士の王が守りし聖杯の乙女を簒奪する。なれども、その眼は輝ける剣の王へと、一時も外れることなし。その眼に映るは救済か、復讐か。

数多の蟲をはらみしやつれた男は、叶わぬ夢を想いながら、長らくの仇敵の屍を背負い、かつての愛しき者の亡骸を抱いて、彼らの形見を憂う。己が見ている世界が全て、夢の中の一幕であるとも知らずに。

かつて正義を願った者達は、片や、友も師も、そして妻や仲間も、何もかも全てを失い、その喪に服す暇も無く戦場へ臨む。叶えられることのない、叶うはずもない願いを抱きながら。

片や、星の内海より託された剣に誓いし想い、それは最早届かぬものと知りながら、愚かしくも踊る騎士の乙女。簒奪されし器を取り戻すべく、そして故国復活のため、今一度、盲目に落ちたその剣を掲げる。

雷霆を纏う大王は、騎士の王が持ちたる盲執を憂い、光の奔流と相対する。戦車を失い、己もまた並々ならぬ身でありながらも、金色の王と相見えるべく、未だ若き己が主を乗せて愛馬を駆けらせる。

未だ未熟たる軍師は、己が手に刻まれし紅き印を用いて、自らが王の勝利を願う。未熟であるが故に離別を望むも、王は彼を伴にし、彼もまた友として、戦場へと駆けていく。

万有を謳う金色の王は、覇道を進む王を鉄橋にて待ち構える。その眼に映るは、慈悲なく、そして己こそが唯一の王であるという自負のみ。その笑みが浮かぶは、己が認めたる相手が、自らの前に立ちし時。

笑う黄金と共に歩む、悦びに溺れし聖職者は、蟲に喰われ夢に墜ちた愚者を連れて、簒奪した乙女をエサに、正義を謳う殺戮者を招き寄せる

そして――――――

過去であり未来であるその國にて、醜悪にして堕落せし妖精達を嗤い、そして唾棄すべきと嫌悪せし”奈落の虫”は、世界に再び黄昏の時を迎えんと、その食指を伸ばす。その身に宿せし”童話の中の王子様”は、その仮面を破り”卑王”となる。

かつて、救いを求めても、誰からも見向きもされず、砕けた自由を弄ぶ道化師は、異なる世界にて蘇ったその命を以てして、この世界に生ける全てを嗤う。死したる心に浮かぶ笑みは、最早嘲るのみと知り得るからこそ、彼は己の愚と共に、人々を嗤い続ける。

――決戦の時は近い。最後に笑(嗤)う者は、誰ぞなるや――――――

――くるくるくるくる、まわる”世界(ドア)”
いきつく先は、”空虚(なべのなか)な破滅”。
”死(アナタ)を望む者”は”生(ワタ)を望んだ己(シ)”、”希望(ワタ)を求めた者(シ)”は”
絶望(ア)を知(ナ)った己(タ)”。

さあ、一緒に”笑い(踊りましょう)ましょう”?――

妄執の騎士、喝采の卑王

夜が来た、夜が来た。さぁさ、やって参りました決戦の夜。終わりの夜、最後の夜、そして、最高の夜。

既にバーサーカー組は言峰と一緒に、冬木の公民館だかなんとかに送らせてある。加えて、そこにはあの”汚れた聖杯”もあるため、生き残った各陣営が集まる

『マスター、ライダーがアーチャーと遭遇したよ』

「〈了解、お前さんはそっちでヨロシク頼むぞ――――――〈プリテンダー〉〉」

こっちもこっちで、やらにゃならんことがある。その為にも、あれこれと設備や対策を、えっちらほっちら用意しているところだ。

一応、状況は見ているし、理解もしてある。間もなくセイバーが到着し、バーサーカーとの戦闘を始める頃合いだ。

さぁ、楽しい楽しい”戦争（ゲーム）”をしようじゃないか。

――イスカンダルが、ギルガメッシュと戦い始める少し前――

キリツグから貰った機械の馬（バイク）を走らせ、照明弾（印）があげられた場所へと到着する。辺りを見ても、敵の姿は見当たらず、中にいるものだと推定する。

私は、警戒しながら地下へと入っていく。中はとても静かであり、どこに敵が潜んでいるかわからない――――

「――いやぁほんと、よく生きてたね」

「ッ!!何者か！」

暗闇の奥から拍手をしながら、何者かが現れる。敵か――――

「――ッ！貴様は！」

「やぁセイバー。あの時ぶりー、元気だった？」

忘れもしない――〝卑王〟『ヴォーティガーン』。我がブリテンの宿敵にして、強大な敵の一人に数えられる男。

バイクを降りて剣を構える。この飄々とした態度に騙されてはならない。この男は、一度でも油断すればたちまち追い込まれてしまう。

「おっと、残念ながらキミの相手は俺じゃないんだ。

――――というわけで、後は任せたよ」

「な、――――ッ！ふっ！」

危険を感じてその場から飛び退く。脇から何かが飛来し、バイクを貫く。爆発を利用してヴォーティガーンからも距離を――――いない？どこへ行った？

『後はお二人で仲良くね。まぁ、仲良くできるかどうかは、君達次第だろうけど――――』

わけのわからないことを語って、奴の姿も気配さえもかき消えてしまう。一体どういう仕掛けか検討もつかないが、間違いなく見失ったのは確かだ。

だが、今は奴よりも、薄闇の中から現れた存在に注意を向けるのが先決。振り返れば、やはりこちらを睨むかのようにして立つ、正体のわからない騎士の姿。

「バーサーカー……」

「……――――――Ｕｕｕｕ」
静かに唸ると、バーサーカーが、キリツグも持っていた”長銃（ライフル）”と酷似したものをこちらに向けてくる。危険を感じて回避行動を取ると、先程まで立っていたところが撃たれ、爆発する。
間合いをはかりながら、バーサーカーの動きを観察する。柱を弾除けにしながらかけていき、爆煙に隠れるかたちで、上から近付く。
「――たぁぁぁっ!!」
その勢いで以てして、奴の長銃を切り裂く。そのまま一気に斬り伏せようとした――――奴の片手が動く。
追撃の手を止め、その場から跳んで距離を取る。機関銃の弾をばらまきながら、バーサーカーは私を狙い追う。
――――このままでは、埒が明かない――
そう思い、近くの車の背後へと身を伏せる。そこへバーサーカーの持つ機関銃の弾が、これでもかと撃ち込まれる。撃たれ続ける車は、あちらこちらに穴を空けられながら大いに揺れる。
一か八か、揺れる車の下に剣を突き刺し、跳ね上げると同時『風王結界』を解き放つ。それによって車が下部から浮き、壁のように横倒しとなる。
「ぐぅぅ――――ッ！」
「Ａａａａａａ!!」
横倒しとなった車を押して、バーサーカーへと近付いていく。その間も車には、ひっきりなしに銃弾が浴びせられ続ける。だが、ある程度近付いたところで、バーサーカーが銃を放り捨てる。
「（――今だ！）」
その瞬間を見計らって、車を上へ跳ね上げ、思いっきり剣を突き刺す。はたして、剣は空を裂きながら突き進み、バーサーカーの頭部へと当たる。
だが、その切っ先は、乾いた音を響かせて弾かれてしまう。
「（浅い――っ！）」
落ちてきた車を、バーサーカーが投げ飛ばす。その隙を狙って、上段から勢い良く剣を振り下ろす――――。

「なっ!?」
私は、思わず声に出てしまった。なぜなら、バーサーカーが私の剣を、白羽取りで受け止めていたからだ。
信じられなかった。『風王結界』で隠された我が聖剣に、そんな芸当ができるのは、私の剣の間合いを知る者だけ。そして、そこから考え得るのは、生前に私と縁があった者のみ。
呆然とする間に、剣に侵食が走る。慌てて剣を振り、バーサーカーを蹴り飛ばす。そうしてもう一度距離を取り直す。
スプリンクラーが発動し、あたりに水飛沫と炎が舞う中、私はバーサーカーに対して剣先を向けて、問う。
「――その武練、さぞや名のある騎士と見込んだ上で問わせてもらう。この私を、ブリテン王『アルトリア・ペンドラゴン』と弁えた上で挑むのなら――――」

――――騎士たる者の誇りを以て、その来歴を明かすがいい」
剣をバーサーカーに向けてつき出す。バーサーカーは、ただ静かに俯いている。
「素性を伏せたまま挑みかかるは、騙し討ちにも等しいぞ!」
語気を強めて言葉を募る。加えて、さらに剣先を差し向ける。バーサーカーは、なお俯いたまま我が言葉を聞く。
一瞬の沈黙。そして、バーサーカーの様子が変化する。これは――――”笑っている”のか?騎士としての誇りはないのか、そう思い、剣を構え直す。

――だが、その姿を見た時、私は構えを解いた。否、どうしようもなく解かしてしまった。
黒く染まってしまっているが、それは見覚えのある”紫色の鎧”。その姿形は、誰よりも信頼していた”最優の騎士”のもの。
「――そ、そんな……ア、『無毀なる湖光(アロンダイト)』……まさか貴方は……」
「ＡａａａａａＴｈｒｒｒｒｒ……」
「……”サー・ランスロット”……」

――なぜだ、なぜ円卓随一ともいわれた、騎士の鏡であるランスロット卿が、狂戦士（バーサーカー）になってまで剣を向けるのか。これが、私の選んだ結果だと言うのか、これが私が導くことをしなかった末路というのか。

そんな絶望に打ちひしがれる中、どこからともなく声が響く。それはあの、”卑王”の声であった。

『これは驚いた、まだ解らないのかい？君が思い描いた幸せな世界。その犠牲者の一人が彼なのに、それに気付きもしないなんて、彼が可哀想でならないよ』

「ッ――――」

聞くな、聞く耳を持ってはいけない。わかっているはずなのに、奴の言葉が明瞭に耳に入ってくる。私の名を叫びながら向かってくるランスロット卿を見ると、さらにそう感じずにはいられない。

私は……私は、貴方を……。思わず、力が抜ける。抜けていく。構えることすらできないほどに、力が入れられない。

『君はさ、救うだけで導かなかった。そりゃあミンナ幸せだったろう。けどさ、導かれなかった奴らがどうなったかなんて、想像に難くないだろう？』

「私が……導くことをしなかったから、なのか……」

『さぁ？そんなの俺が知るわけないだろう？目の前の彼に聞いてみたら？まぁ、答えてくれるかなんて、わかるわけもないけどね』

仇敵にさえ教えられてしまう現実に、眩暈がする。その隙を見たランスロット卿が、『無毀なる湖光』を振りかぶって私に襲いかかる。

私はただ、平和で苦しみのない世界を、ブリテン島の幸福を願っていた。そして、彼もまた賛同してくれていた。そのはずだった。

なのに、最も信頼していた騎士は狂い、私に刃を向け、最も警戒する仇敵からは、結末という名の現実と、嘲笑を向けられる。

私の、私が願ったものは、間違っていたのだろうか……私が行ってきたことは、すべて無駄だったのか……？

「ＡａａａａａＴｈｒｒｒｒｒｒ!!」

「ランス、ロット……」

今はもう、彼の名前を喉から絞り出すことしか、出来なくなってしまった……。

ご愁傷サマ

――――――はぁ、呆れた。汎人類史のアルトリア……いや、”騎士の王”としてのアルトリアは、こんなにも脆いのか。これじゃ、あのカルデアの藤丸立香の方がまだマシだったな。

アイツの犯した行いを、その結末を象徴するヤツと一緒に見せつけてやっただけなのに。それでもうあんなに狼狽えている。あの愚かな女王よりもなおバカじゃないのか？

ほら、力が全く入っていない。腰も引けている。それじゃあ全然ダメだ。だからそうやって追い込まれていく。これで”失意の庭”に放り込んだら、絶対戻ってこられないでしょ、彼女。

「はぁ……いつまで御上り気分なのさ、キミは。あぁ、そうか。騎士の誉れとかいうのがあるからじゃないかな？いっそ、彼みたく全部かなぐり捨てたら楽になるんじゃない？」

「……」

反応ナシ、ね。これはもうダメだな。精神が折れてる、立ち直りそうな見込みもない。アンタは、その程度なんだな。

バーサーカーもさっきからずっと唸って叫んでばっかりだし、もういいだろ。さっさとマスターと合流して、この後に備えないと。はぁ……全く、時間の無駄だったな。

『――――――』

「ん？」

なんだ？これ。なんの――――――まさか。クソッ、それは想定外だ。そこまで脆いとは、考慮していなかった！

「（マスター、カリヤが墜ちた）」

『は？いや早くね!?まだ橋やっと戦い始めるとこだぞ!?』

あーもーッ、やられた！バーサーカーのマスターが先に参るとは。令呪ありきでの制御だと言うのに、よりにもよってこのタイミングで『夢幻』に墜ちるのかよ。なにも貧弱すぎるだろう!?

そうだ、バーサーカーはどうなった――――――あぁ、殺ったのか。腹

部の鎧を深々と突き抜けて、刀身の前半分が背中から生えているように見える。――――やっぱり、魔力切れのバーサーカーじゃあ無理があったか。

とは言え、それならそれで目的は達成したと言えるし、後は細かい調整だな。流石に喚ばれたのが性急な状況なのもあって、あんまり準備できてなかったし。

――それで、彼女はこれでもまだ、聖杯を求めるんだね。憐れだなぁ……もうあの聖杯は、キミの望んだ聖杯ではないと言うのに。

「(予定が狂った……どうする？マスター)」

『とりま、セイバーの足止めだな。無茶有りきだが、コッチが終わるまでなんとか耐えろ。んで、頃合いみて”やられたフリ”だ。出来るな？』

やれやれ、誰にものを言っているんだか。と言いたいところだけど、流石に厳しいものがあるかなぁ。別に彼女の相手をするのがキツいわけじゃないけど、後者の”やられたフリ”っていうのがどうにも……。

バーサーカー　――――騎士ランスロットと対峙するのが前の彼女なら、まだどうにかなったけど、今の彼女だと負ける方が難しい。けど、ここいらで退場しておかないと、また、厄介なことになる。さて、どうしたものか……。

「――感動のフィナーレなとこ悪いけど、まだ俺がいるのを忘れないで欲しいかな」

「……そこをどけ、ヴォーティガーン。私には、成さねばならないことがある」

霊体化を解いて彼女の前、というか、上階へ行くための道に立ちはだかる。ホントはこういうの、柄でも趣味でもないんだけど。

幸い、まだ偽装魔術は効果を示している。まだ彼女には、『汎人類史の”卑王ヴォーティガーン”』として映っているはずだ。そこだけが今のところ救いかな。

「俺にも”役割”があってね……解ってくれよ？俺だって、やりたくてやってるわけじゃないんだからさ」

「減らず口を……貴様だけは、ここで倒す！」
んー、こりゃあ聞く耳すら持ってくれないか。ま、仕方ないか。一番信頼していた騎士が、自分のせいで狂ってしまって、更には仇敵と一緒にいるなんて。
俺だって真底嫌になるね。って言っても、信頼できるやつなんて、そもそもいないけど。――あぁ、彼（マスター）は別として、ね？
それを知ってか知らずか、彼女は未だ”偽装”させている聖剣を振りかぶり、俺に向かってくる。だから俺は、ここで新しい”武器”を見せつけてやった。
「なっ!?貴様、それは――――ッ」
「いいだろう？『堕穢せし湖光（ケイオス・アロンダイト）』、まさしく君と彼の”証”というわけさ」
目に見えて彼女の顔が歪む。当然も当然か。何せ、さっきまで対峙していた親友の剣が、今再び自らの壁となって現れているんだから。
自分の行いのせいで狂気に陥った、最も信頼した騎士。それを自らの手で討って、なおその友の剣が敵も共に現れる……いやぁ、なかなか悪趣味なお話だ。これを考えたヤツは正気を疑うね。
「甘くみたかい？残念、俺だってコソコソしてばっかりじゃないんだから――さッ!!」
「ぐぁっ!!」
何度も何度も、軽く振るわれる剣を打ち合わせ。そして、その剣撃のうちに競り合ったところを、剣を払いながら弾き飛ばす。まるで羽虫のように吹き飛ぶね、本当に大丈夫なのかい？
それでも彼女は、その身に許される限り態勢を整えて、また俺に向かってくる。よくもまぁ飽きないものだねぇ。
「いやほんと、似合ってる似合ってるー。そうやって泥まみれになっている方が、割とお似合いなんじゃない？」
「黙れっ！貴様に……貴様に、私の何が解る!!」
さぁ？そんなの知らないって。はぁ、ウンザリするなぁ……。マスターの方はどうなっているんだ？っと――――へぇ、あの固有結界、破壊しちゃったんだ。ってことは、あのグルグルしてるのは、

俺と同じ『対界宝具』ってワケね。
そりゃアレを見ちゃったら、いの一番に警戒してしまうわけだ――

――

「――Ｖｏｒｒｒｒｒｔｉｇｅｒｒｒｒｒｎッ!!」
「は？――――ッ!?なんだよ、まだ生きてたのかよアンタ……ッ！」
おいおいおい、流石にこれはびっくりだ。アンタ胴体貫かれてたじゃないか。それでもまだ動けた――いや違う、これは……！そうか、俺の『夢の終わり』か！
カリヤにかけたスキルの効果で、カリヤ自身がもう二度と目覚めることが無くなった。だが、底上げされた魔力だけは残って、なおも〈バーサーカー〉に注がれていたとすれば！
「――は、はははは！いいね、最高だ」
「Ａａａａａａ――ワが、王ヨ……」
「ランス、ロット……」
ははっ、マジか。これはたまげたな。この土壇場で自我を取り戻す？そんな奇跡ありかよ。ホント、ふざけてるだろ、コレ。
けど、コイツももうギリギリ。俺と本格的にやり合える程の力は残っちゃいない。ならどうするか、そんなの分かりきってる。

――分かりきっているから、利用させてもらうよ。

「Ａａａ……ワが王よ、ここハ私ガ…。ハやく、サキへ……ッ！」
「行かせるかよ――〝羽虫〟共!!」
一応、逃がさないという体でモース共を呼び出して、彼女へとけしかける。あぁ、もちろん、俺は〈バーサーカー〉とやりあってるから無理ね。うん、ムリ。
さて、マスターから合図がかかるまで時間稼ぎといきたいけれど――稼げるか？コレ。うーん、時間を稼ぐだけだとちょっと難しいな。他も並行してなのもあって、割と難易度高いね。
『――〈プリテンダー〉、アーチャーが撤退した。足残すなよ』
「（了解）」

どうやら、タイミング良くあっちも終わったようだ。それに、こっちも仕留める態勢に入ってるしね。彼女の方は……うわ、モース全部仕留めていったとか、正気？流石聖剣に選ばれた兵器サマ。やることが違うねぇ。

っと、余所見してる場合じゃなかったな。こっちも集中しないと。ていうかあの構え、〈バーサーカー〉で持ってる宝具じゃないよね？あれは流石にマズイから、こっちも〝偽造宝具〟の展開をさせてもらうとしようか。

「――――〟最果テニ至れ、限界を超えよ。彼方ノ王よ、コの光ヲ御覧あレ！〟」

「――――〟夢見た理想は潰え、抱きし願いは終に失せた。幾多もの血に濡れし我が晃望、虚空にて瞠目するがいい！〟」

『縛鎖全断・過重湖光!!』

『混沌開闢・無底湖光!!』

『彼方と落ちる夢の瞳』

……アーチャーは、行ったか。ふぅ、最初はどうなるかと思ったが、なんとか”つじつま通り”に行って良かった。ウェイバー君もこれで成長して、エルメロイ二世になることだろう。

うーん、いやさぁ、マジでさぁ……今回の聖杯戦争、”この世全ての悪（アンリ・マユ）”に汚染されてるせいか分かんねーけど、だいぶ悪意あるよなぁ。色んな意味で。

『おーい、マスター。なんとか時間稼いでやったぞ。全く……ちょっと俺を酷使しすぎじゃない？』

「悪かったって。でもま、これで残す障害はあと一つってわけだし、どうせなら幕切れまで休んでな」

〈プリテンダー（オベロン）〉の方も済んだらしい。いやぁもう、カリヤクンが落ちたときはどうしようかと思ったけど、なんとかどうにかなったな。

さて、今頃アーチャーとセイバーがわちゃわちゃしてる頃だろうな。さてと……ヨシ、感度良好っと。オベロンが館内に放っていた虫達の目を借りて、観察観察っと。

うっへ、やっぱ何度見ても悪趣味だなぁ、あの聖杯は。生憎とその場にいないから、キリツグ君の、あのえげつないやつが見れないのは残念だケド。

――――正義の味方なんて、そんなのはただの妄想であって、実現してしまえば反吐が出るほどの殺戮者でしかない。だからオレは、昔から勇者だとか、そういう”正義の味方”が大っ嫌いで仕方がなかった。

……空っぽな正義を振りかざすだけの愚か者なんて、何も考えない無能より、なおタチの悪い存在だよ。

――――私の聖杯を奪うのか!!

ん。あぁ、最終局面に突入したのね。あーあ、呆気ない。最後の最

後まで、アンタ達は噛み合わない歯車だったな。
輝くキリツグの令呪、そして『聖剣（エクスカリバー）』の発動。流石だよ、その判断力は流石と言うべき他ない。

――ただ、誤差範囲で遅かったなってハナシ。
「――おいおいマスター。気味悪いの感じて来てみたけど、なんなのさコレ」
「これが聖杯の〝泥〟、生きとし生ける全てを穢す汚泥――――〝この世全ての悪（アンリ・マユ）〟さ」
さてさてさーてと、それでは最終局面に相応しい幕切れをしに行くとしますかね。というわけで、オレは令呪をかかげてオベロンに命ずる。これこそ、この世界の最後を奉るに相応しいだろうよ。
「我、朝露　虚映が、令呪三画全てを以て、我がサーヴァントに命ずる。
――〈プリテンダー〉オベロン。受肉し、その力の全てを取り戻せ」
「――あぁ、承ったさ。〝悪友（マスター）〟」

「――理解しなければ」
「どこまでも飽きさせぬ奴。それでいい。神すらも食い殺す貴様の愚道。このギルガメッシュが見届けてやる！」

「――随分と、楽しそうじゃないかい？お二人サン」
愉快そうに笑う二人の元に、俺とマスターが歩み寄る。やれやれ、俺ってば、今回はかなりの貧乏クジ引いたんじゃないかな？ホント、面倒だなぁ。
マスターが仮面を取るのと同時に、俺自身もこの偽装を解く。構わないのかって？もちろん、構わないとも。なにせ――――この二人は、ここで葬るんだからさ。
「お約束通り、仮面を取らせて頂きました。故に――――御命、頂戴いたします……ネ？」
「ほう？言うではないか、道化。よかろう、今の我は気分が良いのでな、幕引きには丁度良い相手よ」
素っ裸のクセしてよく言うね。割と乗り気でなによりだよ。とは言え、もう手遅れなんだけど、敢えて気付かせないようにお相手しろとね。
――げ、アイツ受肉しても宝具使えるのかよ。なんだソレ、ズルくないか？ま、オレも似たようなものだけどさ。
「――ふむ？虫風情が、随分とよく動くことだな」
「あぁ、何せ虫だからねぇ。でも、知ってるかい？英雄王サマ。そうやって傲っていると――――
――――取るに足らない小さな虫の一噛みで、あっという間に崩れていくものだぜ？」
マスターはどうだろう？どうやら、あの神父の相手に手間取ってる

みたいだね。あぁでも、アイコンタクトをとるぐらいなら大丈夫みたいだ。
にしても、今回は時間が無かったにしては、割といい具合に進められてたんじゃないかな？彼女も、〈キャスター〉の存在なんて頭から抜けきってたみたいだし。『存在(そ)の隠蔽(い)』っていうところ(意味)では、マスターはかなり相性が良かったようだ。
「さて、それじゃあそろそろ――――――

――――「不要な役者にはご退場願おうか」
「何？」「む――――ッ、ギルガメッシュ！」
もう遅い、遅すぎる。あの神父が周りの違和感に気付いたようだけど、どんな対策をしようとも、もう間に合わない。例え、”彼(アーチャー)”の宝具が発動しようと、逃れることなんて出来ない。なにせそこは――――

――たった一条の光すら届くことが無いのだから。
――――俺に、虫が集る。あぁ、吐き気がする。気持ちが悪い。こうなる度に集まってくるの、ほんとどうにかならないかなぁ。けれど、もうオシマイにしよう。さようならの時間だ、英雄王。
「――――夜のとばり、朝のひばり。腐るような……夢の終わり――――

――――黄昏を喰らえ！『彼方と落ちる夢の瞳(ライ・ライク・ヴォーティガーン)!!』」

ソレを視たとき、さしもの英雄王ですら”恐怖”を抱き、言峰は”理解する”ことさえも忘れた。まるで巨大な、生命体のようでありながら、ソレは只々巨大なまでの穴であった。

思えば、おかしなところなぞいくらでもあった。なぜ、〈キャスター〉がオベロンなどという存在になったのか。なぜ、まるで全て知っていたかのように動いていたのか。なぜ――――自らのところにやってきた男が、そこに立っているのか。

だが、それら全てのピースが埋まりきる前に、ソレは現れた。あまねく全てを落とす『奈落の虫』。”彼ら”以外には倒しようがない、永劫の穴。それこそが、彼――――〈プリテンダー〉こと、『オベロン・ヴォーティガーン』の真なる姿である。

「おのれ――――――ッ」

ギルガメッシュは、最後の悪あがきで己の奥の手（乖離剣）を取り出さんとしていた。だが、もはや間に合わない。それをかかげる前に、ソレは聖杯の穴ごとギルガメッシュを呑み込む。

言峰は、先程まで味わっていた愉悦など、最早気に留めることすらできない。聖杯の”泥”を見たときでさえ感じなかった、身体の奥底から溢れる原始的な恐怖――――それを抑えるだけで、精一杯だった。

やがてソレは、聖杯の”泥”も”穴”も、そして受肉していたサーヴァントすらも呑み込んだ。残るは、なにもかもをえぐりとられたかの様に更地と化したガレキの山のみ。

自らの敵だけを的確に呑み込む――――本来のオベロン・ヴォーティガーンに、そんな芸当はできない。だが、ここに『マスター：朝露虚映』というイレギュラーがいたことによって、呑み込む対象をロックオンし、不必要なものは除外するという恐ろしい芸当ができるのだ。

『奈落の虫』の中、永遠に落ち続ける底無しの穴では、たとえギルガメッシュが『乖離剣』を使おうとも、そして聖杯の”泥”が這い上がろうとしても、決して出口に届くことはない。なぜなら、そもそもの出口すら無いのだから。

ここに、第四次聖杯戦争の完全なる勝者が決定する。勝ったのは、正義の味方を目指した男でも、己の愉悦を知った男でも、ましてや黄金の輝きを放ちながら、汚染された泥を纏った英雄でもない。

かねて心を無くした虚空のような男と、大嘘つきな妖精を騙る王サマ――〈キャスター〉陣営であった。

「さぁ、オレの思い通りに動いてもらうさね。コトミネ――――」

言峰は、仮面の剥がれた青年を見る。その口元は三日月を思わせるようにつり上がり、その双貌は獲物を見定めた狩人の目であった。

ただ、己の愉悦が永劫に達成し得ぬことを感じ取り、失意の中両手を上げて降参の意を示す。

――未来はまだ、暗雲の中である。

幕間：英国／事件簿編

幕間①：第四次感想戦

――〈オベロン（イレギュラー）〉の参戦、相次ぐ裏切り、交錯する悪意、汚染された聖杯、〈キャスター〉陣営の勝利――

あれから数年経った。色々なことがあったけど、なんだかんだ勝ち越したのはありがたい話よな。とは言え、だ。暴れ足りないと思う反面、ザルなとこも数多くあったからな。この反省点と失点をどうするかが今後の問題だなっと。

というわけで、振り返りのためにも、この五年間何があったか、何をしてたか振り返ることと行きマッスル。……なんか、どっかの盾持った英霊が奮起したような気がしたけど、スルーだスルー。

――まず、聖杯戦争が終わってすぐ、俺たちは言峰綺礼を拘束し、お互い不可侵である取り決めを決めた。これは『セルフ・ギアス・スクロール』の書面上でも確約させた。

あぁそうそう。もう忘れてるかもだけど、実はカリヤクンの時は、実はうちらに対しての拘束がほとんど無かったのよ。確かに、『〝アルレッキーノ（オ）〟は手を出さない』とは書いたけど、『〝朝霧（オ）　虚映（レ）〟は手を出さない』とは一つ足りとも書いてなかったからな。

オベロンも同じく。カリヤクン、相当慌ててたというか、余裕がなかったというか。ホント、そういうとこ残念だよなぁ。皆も、契約するときは中身ちゃんと細かく見ようネ！

それはさておき、言峰に関しては、第五次が始まるまで必要なピースの一つでもあるから、あの時宝具で呑むわけにはいかなかった。外道な愉悦神父だが、第五次を語るにはアイツの存在なしにはまず無理だ。

じゃあギルガメッシュはというと、普通に邪魔だったし、計画にも

支障なく進められるから、あそこでご退場願ったというわけだな。そも原作でも終盤まで姿見せなかったし、割とデカい障害にもなるしでな。

「あの、虚映兄さん」

「ん？おぉ、桜ちゃん。どったの？」

そうそう、変わったことと言えば桜ちゃんよ。原作とそう変わらない引き込まれそうな憂いの雰囲気を持ちつつ、血色良さげにしてるのを見てると嬉しくなるね。

あっち（原作側）だと、間桐の秘術によるストレスで変色していた髪だけど、今は元の黒髪にアクセントで薄めの紫がかっているのがまたいいもんだ。

「この制服、どうですか？」

「おー、いいじゃない。可愛らしくて似合ってるよ」

そう言って頭を撫でる。いやぁもうほんと、可愛いのなんのって。もうすぐ高校に上がる桜ちゃん見てると、ほんと癒されるわぁ。

あれから元気になってった桜ちゃんは、無事に中学に入り、ついには卒業も控えている。そして、最近買い合わせた穂群原高校の制服をひらひらと見せてくれる。んー、淡い花の香りがまたなんとも――――いかんいかん、これは変態の思考やて。

「ん……嬉しいです」

「そりゃ良かった。ところで、うちの”黒王子”はどこいったか知らない？」

「――いいセンスしてるね。後で紙に書いて破いておくとするよ」

おっと、ウワサをすればなんとやら。いつの間にか窓に座っていたオベロン。ニッコリ笑顔だけど、これは不機嫌気味かな？ンンンンン、拙僧、何のことやらサッパリですぞ。

オベロンも、ここ五年間でだいぶ変わったな。第四次が終わってしばらくは『妖精王』のままだったけど、『虚数魔術』に目覚めた桜ちゃんが、何の気なしに正体を暴いてからは『奈落の虫（三臨の時）』の姿にしてる。

なんでも――――バレてしまったものを隠し続けるより、いっその

こと普段からこっちの方が楽――とのことだ。まぁそれでも、外に出てるときは前のままなんだが。
「で？オレがどうかしたの？あ、虫も食わないような、しょうもない話は止めてくれよ？思わず手が滑ってしまいそうでね」
「ちげーよ。お前さんが注文してた『作品』が両方とも出来上がったから持っとけってハナシ」
オベロンに向かって、２つの六角結晶（クリスタル）をシュート！超！エキサイティン！
っと、ふざけるのもここまでしないとボコられそうだなヤメテオコウ。
あの聖杯戦争が終わって少しした後、オベロンから『作品』――――オレお手製の”仮想宝具”を２つ作ってくれないか、もとい造れとお達しが来てたのさ。直に戦ったアイツだからこそ判る力の差を埋めるためってヤツだな。
やれやれ、桜ちゃんが手伝ってくれなかったらホントギリギリだったわ。じゃないと、ケイネス先生よろしく、車椅子生活か寝たきりになってたからなぁ。
――――オレが仮想宝具を造るにあたって、もちろんのこと必要な条件が存在する。
一つ。宝具にするモノについて、それに類する『伝承』や『伝説』を知った上で理解していること。
一つ。宝具にするモノに対し、効果や性能についてはハッキリと明確に意識し、想起して製作すること。
一つ。宝具にするモノは、正しく有形のモノに封じ込めておくこと。また、正しく許容できるモノとすること。
一つ。等々……
ぶっちゃけ、一例だけでもこれだけある条件をクリアしながらやろうとすると、五年で済んだのが本当に奇跡すぎる。
どれだけハイレベルかと言うとだ、ウェイバー君の技量で第三魔法を作ろうとするようなもんだ。言い過ぎかもだが、事実そのぐらいの気持ちじゃないとこっちが死にかけるからな。

「ふーん……悪くないね、貰っておこう」
「へいへい。で？本題（そっち）は？」
そう、今回アレらを渡したのは、たまたま出来上がってたから渡しただけに過ぎない。本題――――〈衛宮家〉の状態について、オベロンには探って貰っていた。
「あぁ、そうだったね。『衛宮　切嗣』は残念なことに、聖杯の泥の呪いを受けてたみたいだ。早かれ遅かれ死ぬ運命だったんだろう。――心配しなくても、『衛宮　士郎』はちゃんと居たよ」
「そうかい、ならええわ」
そうそう、士郎がいないと物語は始まらない。次は、彼が主人公なんだから。主人公がいない物語とか、ぐだぐだすぎて読む気にもなれねぇって話だわ。
そして空気を読んで退室してた桜ちゃんマジ偉いわー。あんない子を、あんなゲテモノジジィに渡したトキオミは許されない、許さない。まぁもう故人だからどうしようもないけどネ。
「んで？やることも済んだみたいだけど、ここからどうするのさ」
「んー、そうね。――――んじゃあちょっと、旅行にでも行きますか」
オベロンがあきれた顔をする。おいおい、そんな顔するなよ。これにだって意味はあるんだぜ？
オベロンには渡した２つの”仮想宝具”。厳密には、これらはまだ完成していない。この２つはちょっと特殊なもので、完成させるには現地の霊脈からのリソースが必要になる。
「――なので、こちら。『日本発イギリス行便：大人三名』でござ」
「……は？おい、おいおい待て待てちょっと待て。それはまさか、オレにブリテンに行けって言うのか？」
イエース、そゆこと。最後のパズルのピースを揃えるためには、なにがなんでもあそこにいく必要がある。幸い、といっていいのかわからないけど、第四次から第五次。そして『事件簿』は前世で履修済みよん。
中・高と孤立してたから、読みあさっては見あさることなんてちょちょちょのちょいよ、ハッハァッ！……なんか泣きたくなってきた。

「ま、なんかしらあるとは思うけど、どうにかなるでしょと。桜ちゃーん――――」
「はぁ……なんでコイツをマスターにしたんだろ、オレ…」
そこ、とやかく言わない！もう全部手遅れなんだがら、後からごねらないの！オレだって最初お前さん喚んだときは終わりを確信したぐらいなんだから。アキラメロ。
桜ちゃんに旅行券見せたら、「旅行？ほんとに？ありがとうございます！」だってさ。嬉しいね、娘がいたらこんな感じなんだろうね。娘いないけど。

――――さてもさても始まる英国旅行記。きっと、新しくロードに就任した苦労人なダレカがいることだろうけど、ソイツもどいつもどうなろうと知ったこっちゃない。
盤面狂わせ万々歳。ひっかき回していきましょうや。なにせこちとら、『道化師』なものでね――――

「ところでこれ何時のヤツ――――明日だとぅ!?」
「てへっ☆許してヒヤシンス」
「……『絡咬百足（ヒュッポリュテ）』」
……その後、邸内では汚い高音な悲鳴と、何かを締め上げるような軋む音と、白い目で見つめる二組の視線があったとかなかったとか。

幕間②：英国旅行

片道約15時間ほどのフライトを楽しみながら、やっと到着しましたブリテンことイギリスはロンドン。天を臨む時計塔の鐘の音が、ここが海外だと思わずにはいられない。

幸い、昼の便だったから準備も間に合ったし、なにより時差で早朝に着いたのはありがたかった。予約してあったホテルに入り、荷物をほどいていく。

「ふぅん、ここが汎人類史のブリテン――いや、今はイギリスだっけか。いいんじゃない？僕はこういうの、結構面白いと思うよ」

「ぼやいてねーで手伝いやがれ、オベロン」

そんなこんなで荷ほどきが終わり、桜ちゃんも連れていざ、ロンドン散策へレッツラゴー。等と、その間もオベロン配下の虫達に、霊脈の集積地探しをしてもらう。

ぶっちゃけ言うと、傭兵時代にもロンドンは何度か来たことがある。傭兵だからな、暗殺だの強奪だの色々依頼されてたもんだよ。だからまぁ、地理についてはある程度目処がついてる。

「あれが、『時計塔』……」

「見る分にはすごいよなぁ。ま、近寄らないのに越したことはないよ」

自作の翻訳魔術をかけて、あれこれと買い物をした休憩ついでに、橋の上からそびえて見える『時計塔』を見る。間もなく夕暮れとなる陽を背に立つソレは、周りの風景に馴染みながらも、判る者にはわかる異様な雰囲気を漂わせている。

かくいうオレも、あまりここには近寄りたくない。なにせ、オレも桜ちゃんも、”魔術の枠組みを越えた魔術”――『封印指定』モノだからな。それで厄介なことになるのは御免被る。

「さて、ちょっと早いけど夕御飯にしようか」

「はい。虚映兄さん」

フラフラと辺りを歩いていると、賑わいの多いところから少し離れた通りに、小さくもお洒落なカフェテリアを見つける。見たところ、

サンドイッチを中心にしているみたいだし、空いた小腹を満たすには丁度良いな。
一緒に店内に入って、空いている席に向かい合って座る。大きくなった桜ちゃんを見ていると、ほっこりするってもんだわなぁ。
――また一人、誰かが店内に入ってくる。
「――ん？なっ、お、お前はっ!?」
「うん？」
誰かね、ワタシの和やかなティータイムを邪魔する者は。振り反ると、眉間にシワを寄せた男性が、オレの方を見て眼を見開かせていた――。

――バカな、なぜアイツがここにいる!?よりにもよってまだ忙しいこの時期に、この顔を見ることになろうとは。というよりも、この英国（イギリス）にまで何をしにきたというのだ。
私がかつて参加し、”彼”と出会った極東の魔術儀式――第四次聖杯戦争の、表向きの勝利者。〈キャスター〉のサーヴァントとして、『妖精王オベロン』を召喚せしめた若き凄腕の傭兵後日、調べていく内に知った。
――”嗤う大道芸”『アルレッキーノ』こと、『朝露　虚映』。

「……なぜ貴様がここにいる」
「強いて言えば旅行だけど？」
普段お気に入りにしているカフェで、私と彼は再び相見えた。驚き固まる私を、「連れだ」と言って向かい合う形にする。流石に騒ぎ立てるのも店に迷惑だからこそ、私は誘われる通りに座る。
周りに声が聞こえないように、なるべく声を抑えながら問いかける。だが……言うことにことを欠いて旅行だと？ふざけている。一体何が目的だと言うのだ。
「……信じてねぇなぁ、まぁいいけど」
「……そちらのレディは」
私が視線を向けると、彼の隣にいた少女は居住まいを直して、私に軽く座礼をしてくる。見たところ礼儀もしっかりしているようだ。そして――――魔術も、天才といって良いほどのようだ。
並大抵の者には感付かれない程度の偽装はしているようだが、そもそもこれほどの偽装ができる時点で相当な腕前だ。恐らくは、彼か『妖精王』から教わったのだろう。
「おっと、こりゃ失礼。紹介しよう、こちらうちの従兄妹にして内弟子の『朝露　桜』だ」
「えっと、『朝露　桜』と言います。えっと――」
「――『ウェイバー・ベルベット』。今は『ロード・エルメロイ二世』と名乗らせてもらっている」
「は、はい。宜しくお願いします。ロード・エルメロイ二世さん」
従兄妹、か。直接の血の繋がりがないにしても、彼と同じ魔術の気配を感じる。もしこの子を『魔術協会』に入れたとすれば、どれほどの鬼才になるか――――いや、止めておこう。
ただでさえあの問題児共にすら手を焼いているというのに、これ以上の面倒――いや、厄介事は扱いきれん。”第四次聖杯戦争の勝者の身内”という、厄介事はな。
「ははぁ……あのチンチクリンが、こうも渋柿になるたぁね」
「お前にチンチクリンと言われる筋合いはない！……んんっ。ところで、貴様のサーヴァントはどうした」

そうだ。あの童話の中から出てきたかのような、伝承科でも伝説扱いされていた存在――〈キャスター〉、『妖精王オベロン』がいないのだ。

いや、聖杯戦争が終わったのだから、いないのは当然と言える。だが、彼の『妖精王』がそう易々と居なくなるわけがない。そう、予感がしていた。

「――居るよ。今は別行動中だけどな。霊体化できないのがキツいって言ってたな」

「そうか……ん？まさか受肉したのか!?」

驚く私に対して、呆けた顔をして頷く。正気なのか……〈英霊（サーヴァント）〉を受肉させるには、それ相応の魔力が必要となる。仮に令呪を使用したとしても、それだけで足りるはずがない。

クソ、聞き出したいことがあまりにも多すぎる。だが、問い質そうにも場所が悪い。今はまだ人が多く、加えて魔術になんら関係のない者もいる。”魔術師の禁忌（魔術の秘匿）”に触れてしまう。

「色々聞きたいって顔だな。いいぜ？教えても。特に桜ちゃんは聞いておくべきだからな。――あぁ、周りは気にしなさんな。普通の会話にしか聞こえないさ」

「色々聞きたいことが増えたが……聞かせてもらおう。――あの聖杯戦争で、どうなったかを」

――それから私は様々なことを聞かされた。彼の地に喚ばれしサーヴァント達の真名と、各マスター達。そして、その最後も。

聞けば聞くほど驚くばかりだった。たが、納得も多かった。聞けば、彼のセイバーのマスターは、彼と同等以上に有名な『魔術師殺し』――『衛宮　切嗣』とのこと。ならば、あの情け容赦のないやり方も納得する。

ましてや、あの遠坂家と教会が通じ合っていたという話は驚くしか

なかった。やはり、あの時〈アサシン〉が〈アーチャー〉に倒されたのは、通じ合っていたからこその欺瞞だったというわけだ。

「――――んで、これが一番大事なこと。

――――聖杯は汚染されている」

「なんだとっ」

聖杯が汚染されているだと!?一体、どういうことだというのか。説明を端的にまとめると――――”アインツベルンがやらかした”、ということの様だ。

頭の痛い話だ。御三家の内、ホムンクルス技術で名高いアインツベルン家が苦し紛れに行ったことが、巡り巡って自らの首を締めることになろうとは。

「だからこそ、オレからアンタに、最初で最後の忠告だ。……アンタはもう、聖杯戦争には参加するな」

「……だとしても、私にはやるべきことがある」

そうだ、例え聖杯が汚染されていたとしても、私にはやるべきことが、やらなくてはならないことがある。それをどうにかしなくては、私はどうすることもできない。

聖杯が欲しいわけではない。かといって、欲しくないわけでもない。しかし、そんなことよりも、私は――――。

「……そうかい。ならオレは何にも言わねーさ。――――さて、気を取り直して、食後のティータイムとしようや。頼んだ紅茶が冷めちまう」

「あぁ、そうだな」「は、はい…」

そうして、聖杯戦争の話は打ち切られることとなった。最後に彼が、私の言葉を聞いて悲しそうな顔を浮かべたのが気になった。だが、そこまで聞くのは野暮というものだろう。

それに、聞きたいことも充分に聞けた。話し込んだとは言え、陽が落ちきる前に済んだのは、彼がそれだけ話上手だということか。

一心地着き、彼の従兄妹だという彼女からの質問に答えていく。出てくるものは魔術についてから学業についてなど、勤勉な態度であった。

しばらくして、人もまばらになった頃。店に誰かが入ってくる。現代風の衣装を着た、彼の『妖精王』本人には驚いたものだ。またいずれ会談の場を設けるという言葉をもらい、彼らと解散する。流石にトラブルにならずに済んだのは僥倖だったな。

「――師匠、迎えに……あれ？誰かと居たんですか？」
「いや、もう済んだ。出迎え感謝する、グレイ」
……そう。例え、汚染された聖杯であっても、もう一度お前に会えるのならば、僕は――

幕間③：会談

成長したウェイバー君こと、ロード・エルメロイ二世との遭遇とかいうハプニングはあったものの、そのあとは何にもなくホテルに着く。そっからしばらくは散策と籠城の繰り返しよ

宿泊している部屋は、いざという時に備えて結界を展開済み。しかもオベロン配下の虫の目もあるから、有事の際はすぐかけつけられる。そも、桜ちゃんだってもう一端の魔術師だからね。守る必要はないんだけども。

「と、言うわけだから、留守番頼めるかな？桜ちゃん」

「はい、私は大丈夫です。でも、なるべく早く帰ってきて下さいね？」

んー、桜ちゃんの優しさが身に沁みるよ……沁みすぎて逆に痛くなってくるケド。今の今まで残虐無道なことばっかりしてきておいて、いざ平和な日常が来るとダメだね。

ま、どうでもいいけど。とりあえず桜ちゃんには、『ロード・エルメロイ二世達と会談するから、終わるまで留守番してて？』っていうのを伝えた。寂しい思いをさせるかもだけど、快諾してくれて助かるよ。

「さて、行こうか」

「あぁ、任せてくれ。マスター」

そういうわけで、オレ達は魔術師達の総本山――『時計塔・学部棟』へと向かうのであったー、まる。

ノックの音が響く。どうぞ、と言えば扉が開かれ、仮面舞踏会（マスカレイド）でつけるような、悪趣味な仮面を着けた男が入ってくる。
その後ろからは白い軽装の、絵物語の中から出てきた王子のような人物――――件の、元〈キャスター〉こと『妖精王オベロン』が顔を覗かせる。
「わざわざ来て貰い、感謝する」
「なんのなんの。『時計塔』には、オレとしても興味があったからね」
人の良さそうな、しかし胡散臭い笑顔を浮かべながら椅子に座り込む”彼”。そして、その斜め後ろに侍るようにして立つオベロン。
”彼”こそは、数年前に行われた第四次聖杯戦争において、万夫不当の英雄達が集う中、唯一最後まで残った一組にしてオベロンのマスター――――朝露家現当主『朝露虚映』こと、魔術使いの傭兵『アルレッキーノ』である。
「んで……ご用件は？」
そうだ、油断してはならない。彼は、あの『英雄王（ギルガメッシュ）』すら出し抜いたマスター。この誘うような笑みは、さながら餌を誘う食虫植物のようだ。
こちらには、内弟子（グレイ）と愚妹（ライネス）、そして私の三人。相手のペースに呑まれないようにするのはもちろん、愚妹が何かしでかさないかが不安でもある。
「それでは、あの聖杯戦争に参加した者としてお聞かせ願いたい。――あの聖杯戦争の顛末について。そして、聖杯がどうなったかについて」
「いいだろう。そんじゃま、あらましを語るとしましょうかね――――」
そこから聞かされた話は、中々信じがたいものであった。
――――〈ライダー（イスカンダル）〉を倒したあと、〈アーチャー（ギルガメッシュ）〉は現・冬木中央公園――旧・冬木市民会館にて、〈セイバー（アーサー王）〉と決闘。始めは〈アーチャー〉が有利だったが、〈セイバー〉のマスターからの令呪により、宝具を放たれたことで相討ちになったという。

それによって、英雄王に狙われないように身を潜めていた〈キャスター〉陣営が生き残るカタチとなった。だが、〈セイバー〉の宝具に巻き込まれる形で破壊された聖杯から”泥”が溢れ、周囲に大火災を巻き起こしたらしい――――――。

「――成る程。情報提供、感謝する」
「うんにゃ構わんよー。”報酬”はもう貰ってるしねー」
粗方語ったあと、渋い顔をしてるロード・エルメロイ二世。まぁ、そりゃあそうだ。だってあの聖杯戦争自体とんでもないことだったからね。呆気なかったって言われて、ハイそうですかで終われるような話じゃないわけよ。
んで、この話をするに当たって提示された報酬が、『桜ちゃんの情報隠蔽』と『魔術協会からのマスター候補者リスト』を提示されたわけ。ま、嘘とはいえお互い”ｗｉｎ×ｗｉｎ”だからいいんじゃない？
「失礼、一つ宜しいかな？……あぁ、始めまして。私は『ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ』、こちらの愚兄の妹さ」
「これはこれは。どうも、コチラご存知かと思われますが、『アルレッキーノ』と申します。しがない傭兵ですヨ」
おっと……小悪魔シショーのお出ましたぁね。流石に油断できないな。ｐｉ○○ｖとかじゃよくデレデレしてるの見たことあるけど、実際可憐ではあるな。……中身は別として。
さてはて、こっちの義兄様（ロード・エルメロイ二世）と同等以上に鋭くて、なおかつタチの悪い義妹様は何を知りたいのやら。
「では。彼の英雄王ギルガメッシュには、万象を見通す『千里眼』という眼を持っていたとか。そんな相手に、一体どうやって隠れ潜んだというのかね？」
「ふぅむ、そうさなぁ……」
これにはちょいと顎をなぞってしまうな。確かに、ギルガメッシュ

には『千里眼』がある。それは未来を見るものであるとは言え、そこをどう誤魔化したか、それが今回の聖杯戦争のキモになる。
けど、それについて語るには様々な問題がある。まず一つ目が、オレの固有魔術『虚構魔術』について。これはもうバレたら封印指定ものだからな。そもそも話せない。
二つ目が、『オベロン』というサーヴァントについて。サーヴァントとしてのオベロンには二面性がある。〝皆に人気な妖精王〟という表の顔と、〝全てを嫌悪する島の破滅願望〟という裏の顔。このあたりがまぁメンドクサイ。
最後の三つ目。『奈落の虫』が起こしたことについて。コイツがやったのは、大きく別けて〝英雄王の失墜・消滅〟と、〝冬木大火災の半強制的な鎮火〟の二つ。ここいらの辻褄を合わせないと、疑いを持たれてしまう。
さて、どう説明したものか……。ふむ、シナリオは……順序としては……矛盾点は……――――
「それを説明するにあたって、まずは謝らせてほしい。残念なことに、一つだけ嘘をついてしまった」
「ほう？それは？」
よし、釣れたな。猫みたく目を細めてきたが、彼女にとってこれは、興味を持ったということ。一番避けるべきは、話を流されることだからな。
さて、それじゃあシナリオを組み立てていくとしようか。
「まず始めに、セイバー（騎士王）とアーチャー（英雄王）と相討ちになった、と申し上げました。が、実は騎士王が聖杯を破壊し、魔力切れになったことで退場。英雄王は勝ち残っていたのですよ」
「ふむふむ、続けて？」
「長くなりますが、要点だけ纏めましょう。聖杯を破壊したは善いものの、原因たる泥は既に顕現済み。その直下に英雄王はいました。泥を浴びながらも、その強靭な精神で受肉を果たしていました」
〝ここまで〟は事実だとも。さて、ここからが問題だ。気を付けないとすぐバレちまうね。

「その時我々とその場へと駆けつけ、これはマズイと思い避難活動を優先させたわけですよ。しかし、我々としても予想外で、そこに泥を元にして新たなる存在（サーヴァント）が現れたのです。ソレが、溢れ出た泥ごと英雄王を屠ったのです」
「なるほど……で、その存在とは？」
「貴方達も、名前ぐらいは聞いたことがあるでしょう？かつて、このブリテン島に存在した『厄災』。全てを滅ぼしかけた”白き竜の化身”
――――――

――――――”卑王”
『ヴォーティガーン』」
「なっ!?」「なんだと!?」
うーん、いい反応。ま、そりゃ驚くよな。なにせ、アーサー王伝説の登場人物が三人も――――――あ、いや、向こうは知らないから、二人か。それでも、関係者が集まってたからな。
大筋はこうだ。
――――――溢れ出た聖杯の泥を因り代として、エクストラクラス〈復讐者（アヴェンジャー）〉として出現。それに驚く英雄王の隙を突き、英雄王ごと泥を飲み干して抹殺した――と、いうシナリオだ。
ちなみに、英雄王にバレなかった理由として、オベロンの『道具作成』スキルによって”隠れ蓑の粉”を使って転々としていた。というカタチでいかせてもらう。
「ま、そんなとこですわ」
「待て。となれば何だ――――――”奴”はまだ、顕現しているとでも」
さもそうだと言わんばかりに、オレは静かに頷く。なんか、オベロン喚んでからこういう腹芸上手くなったなぁ、オレ。
あ、エルメロ（名前が長い）が頭抱えてぐったりしてる。グレイ以外は難しい顔してんなぁ。ま、仕方ないけど。”卑王”が復活だなん

て、このブリテン――もとい、イギリスからしたら厄ネタものだもんな。
「まぁ、オレ達が英国（ここ）にきたのも、旅行というのもあるが、”卑王”の追跡と言った方が正しいな」
「……奴はこのブリテン島にいる、と」
「そういうこと。な？オベロン」
「そうだね……彼の行動は、流石に僕の目にも余る。とは言え、追いかけようにも霊脈を通って逃げられてしまってね。ようやく追い付いたという形さ」
　ナイスアシスト。こういうときのアドリブの巧さは流石のオベロンだな。辻褄も合うし、何よりオレ達に正統性とアリバイが出来上がったわけだ。
　そこからは、有事の際エルメロイ家と連絡を取り合うことで交渉の席は終わった。ま、架空の”卑王”を追いかけるという無駄な労力を回すハメになったのはご愁傷様だな。
「――あの、最後に質問、宜しいでしょうか」
「ん？なんだい？」
　およ、珍しい。ずっと後ろで目をパチパチさせたりして、リアクションだけで黙りしてたグレイちゃんが口を開くとは。
「聖杯戦争とは、願いを叶える聖杯を求めて、魔術師同士が戦う魔術儀式だと聞きました。それで……――――お二人の願いは、何だったのですか？」
「――――」
　あぁ、願い。……願い、ね。なんだったかな。うーん、思い返して、どれだったかなってなるなぁ。
　オベロンは、どうだろうか。役割だった”妖精國（ブリテン島）”の破壊は終わってるし、”妖精王（ティターニア）の愛妻”だって存在していない。
　そんなナイナイ尽くしのオレ達の願い、か――――。
「そうだな、オレの願いは――――」
「そうだね……僕の願いは――――」

幕間④：妖精と謂ふ者

ロード・エルメロイ二世との会談の後、桜ちゃんには先に戻ってもらい、聖杯戦争の準備を進めておいてもらうことにした。戦争時の対策のため、トラウマを刺激するようで悪いが、彼女には間桐邸を使ってもらう。

オレ達も聖杯戦争のために、人気のない平原のような場所でお互いの手札を確認し合う。ま、今のじぶに何ができて、何ができないのか把握さる必要もあるしネ。

ただまぁ、闇落ち『無毀なる湖光（アロンダイト）』をブンブン振ってたのもあって、魔力を使いに使ったせいで二人してぐったり。そんでもって野原に倒れるようにして寝る。んー、曇り空。

これ、どうしたもんかね。かなり精神力削られるけど、やっぱり合成するしかないかなぁ。この先のことも考えなきゃだし、だるいなぁ……。

「――――おーい、マスター？」

「んー？どしたオベロ……は？」

オベロンに呼ばれて空を見る。すると、先ほどまでは疎らだった雲が、いつもの間にか雷雲へと変わり、今にもスコールとなりそうだった。

慌てて辺りを探して、建物か洞穴を探す。すると、少し遠いが向こうに屋敷があるようだ。というわけで、そこへ向けてとっとこハ〇太郎っとな。

「ちょ!?無人かよ!?」

「ツイてないね本当に！――――ッ！あっちに洞穴だ！」

ちくせう、鍵が開いてなかったでござる。ので、オベロンが見つけた裏手の洞窟に駆け込む。外は雷鳴が鳴り響く豪雨が降っている。

息を切らしながら、洞窟の壁に手をつける。いや真っ暗すぎない？というわけで、懐から折り畳み式の携帯ランプを取り出して点ける。

「おっとぅ……そういうとこなのね」

ランプに照らされた内部には、白骨化してかなり時が経ったであろう骸が、あちらこちらに散らばっている。こいうの、何て言うんだっけ。ホトケサマになった、だったかな？

流石に死骸と言えど、踏み潰して歩くのは気が引ける。なので、なるべく足元に気を付けながら、ゆっくり奥へ向かっていく。

「今日はここで一晩過ごすしかないなぁ……」

「本気……みたいだね。全く、正気を疑うよ。まぁ、招いた僕が言うのもアレだけどね」

おう、すっごいうんざりした顔するじゃねぇか。ここ選んだのお前さんだよな。お？お？やるか？やんのか？

どうせオベロンのことだ。この”内面”だってその『妖精眼』で丸見えなんじゃろ？知っとるぞワレェ。

「……そう思いながらテキパキとテント立ててる辺り、どうかと思うよ」

「やかまし。割と罠（トラップ）多くて大変なんだぞ」

そう、何を隠そう、この地下墓地（カタコンベ）らしき場所はトラップだらけなのである。いやだらけってレベルじゃなくてもうびっしりと。

兎にも角にもさっさと寝て、明日に備えるとしよか。墓で寝るとか、死霊術師（ネクロマンサー）じゃあるめぇし……ってのは笑えねー。

――――ソイツらを見たときはびっくりしたぜ。なにせ、こんなト

ラップだらけの地下墓地で、テント張ってグースピ寝てる奴らがいると思うか？
　しかも、何が『この辺りを歩き旅してたら豪雨になって、ここに避難してきた』だ。今この辺りを歩き回るような奴なんて、あの件の関係者か、それか余程の冒険者かだぞ
「しっかしまぁ、そんなとこに出入口があるとはな」
「そうねー……ま、ここも厄介事の臭いしかしないケド」
　そんなうんざりした顔しなさんなよ、と言いたいが、その意見には全く以て俺も同意する。今は静かだが、何かあったときにはただじゃ済まない。
　――――と、懸念していた通り、この地下墓地のどこかで何かがあったようだ。死霊達が騒ぎ出しやがった。
「さて、一仕事いくかね。アンタ達はどうする？」
「乗り掛かった舟よ。嫌だけど、やるしかないさね」
　基本的に交渉はコイツがするみたいだな？もう一人の優男は、さっきから目を瞑ったままのようだし。……なんか、揉め始めてるが、大丈夫か？
　と、ソイツがカバンを漁って取り出した、独特な双振りの短剣（ダガー）と仮面を見たとき、俺は驚くしかなかった。というか、割とドン引きだったよ。
「お前――――あの『殺人道化師（アルレッキーノ）』か!!」
「そういうアンタ、『獅子劫　界離』だろ。知ってるぞ」
「二人とも、呑気に喋ってる暇はないだろう!?」
　ったく、お前さんらが仕切るなよ。とは言え、呑気にお喋りしてる暇はないわな。
　そうして俺達は、死霊達が一番ざわめいているところに駆けつけてきたってわけだ。そうしたら、そこにお嬢ちゃん方がいるもんだから、先に目星をつけてた出口まで送っていったということになるな――――。

「初めまして、ですね。魔術使いの傭兵『アルレッキーノ』。お噂はかねがね、先の聖杯戦争でもご活躍なされたとか」
「――うわ〟法政科の蛇〟かよ、ナイワー」
ないわー。ここで『化野　菱理』とかないわぁ。そりゃあまぁ、名前ぐらいは知っていますとも。えぇ、はい。
なんでか知らんけど、丁度そこにいたエルメロイ二世から事情を聞く。すると、オレ達が夜明かしで寝ている間に、こんな話が巻き起こっていたらしい。
曰く――――――
ロード・エルメロイ二世が、降霊科からこの『マーベリー工房』に関して調査を依頼。なんでも、工房が半暴走状態で、前当主含め死人が多数出たと。
そして、エルメロイ二世はそれを受理。その際、案内役兼当事者でもある『ウィルズ・ペラム・コドリントン』を引率することに。
そこからなんやかんやあって、今に至る。と――――
「キミさぁ……〟巻き込まれ体質（トラブルメーカー）〟ってよく言われない？」
「ぐっ……否定は、しない」
はぁ……（クソでかため息）、もー全く、やってらんねぇなぁ。なんでこの世界ってこんな面倒事が多く入ってくるのかねぇ。
とは言え、だ。オレのやることは変わらんよ。化野をかわしつつ、魔術協会からの干渉がないように工作するだけ。それが、例えどんな

結末になろうともね。
「ところで……そちらの方は、どなたですか？」
化野の目線の先は――――あぁ、いいよ？好きにしたら？どうせ、そこらへんはもうバレてるんだからさ。
「初めまして。僕は『”妖精王”オベロン』。オベロンでもロビン・グッドフェローでも、好きに呼んでくれてかまわない。――――よろしく、ね？」
「”妖精王”！？」
おぉう、異様に食いつくなアンタら。そんなにオベロンに驚く要素ある？……いや、よくよく考えたらそりゃあるわな。付き合い長すぎてすっかり忘れてた。
んぇ、何やエルメロイ二世。んと？ウィルズ君が”妖精眼”を持っているから、妖精絡みの案件で協力してくれと？まぁいいけど……報酬はしっかり貰うからな？
「おーい、オベローン」
「どうしたんだい？マスター」
まぁ、ここは愉快な妖精王様にお任せするとしましょうかね。妖精案件に関しては、オレよりもオベロンに任せた方がええしな。
そうこうしてる内に、ウィルズ君に頼んで部屋を一室分けてもらいました。ゴツゴツした地面じゃなくて、フカフカのベッドで寝れるよ！ヤッタネ！
「さて、それじゃあマスター。――――これからの話をしようか」
「奇遇だな、丁度構想が終わったところだ――――」

外では雷雨が響き、内では人の寝息のみの明朝頃。それが起こったことには誰も気付かなかった。――――ただ、二人を除いて。

最初に目覚めたのはオベロン、次に虚映。オベロンは異変のあった場所へと、ブランカの背に乗って飛んでいく。虚映は、未だ眠りこける有識者達を起こしていく。

そして、オベロンを追いかけていった者達が目にしたものとは――

――――無惨な姿となった、”ワレッタ・コドリントン”という、ウィルズの幼馴染みの姿であった。

幕間⑤：妖精と謂ふ者　続

「――ダメです。ワレッタの霊は、呼び掛けに答えません」
はい。どうも、朝露虚映です。なんか知らんうちに巻き込まれて、なんか知らんうちに殺人事件の関係者になりました。クソが。
突然だが、オレはオリチャーがクソほど嫌いである。なぜなら、正しい攻略法があるというのに、なんでわざわざ無茶苦茶にしていくのかがわからん。そんでポカやらかすんだから目も当てられない。
「――では、犯罪捜査の原則に乗っ取れば、この死によって最大の利益を得る人物、ということになりますが。――ウィルズ・ペラム・コドリントン？」
「――ッ」
あぁそう、オレ達は蚊帳の外ってわけ。別にいいけど。その方が色々と都合がいいしね。コイツらと関わるとロクなことにならないし。
そうしてオレを抜いて、どんどんと話が進んでいく。ロード・エルメロイ二世が推理を立てて、化野と睨み合う。その結果、捜査権を任されることとなり、オレと獅子劫がエルメロイ二世に呼ばれる。
「で、この後はどうすんだ？」
「協力してもらうぞ、獅子劫界離、”朝露虚映”。この件には、死霊術師（ネクロマンサー）。そしてお前の存在が必要になる」
「ふーん……いいけどさ、報酬（代金）を頂戴よ」
「むっ、持ち合わせはそんなにないぞ」
お金じゃないんだけどなぁ。と、獅子劫の方も同じ意見だったらしく、あっちは葉巻一つ貰って受諾した。てかあれ、魔術礼装では？
こっちは……まぁ、後払いでいいか。今のうちに、こっちでのアイツらの名前でも書き出しておくか。
その後、エルメロイ二世から頼まれて、書庫で資料を探す。にしても、出るわ出るわ、貴重な資料がたんまりと。うんうん、興味深い。こんな時じゃなかったら、ゆっくりと読みふけっていたかったなぁ。
「――どうかしましたか？」

「あぁ、ちょいと懐かしくてな」
ん……あぁ、妖精の物語かな？死んだ子供が妖精になる、ね。あんな残酷で酷い生き物になるなんて、その子供達が浮かばれないってものだよ。
かつて、前世で見た妖精國の妖精達。陽気で優しく、残酷で狂気に満ちたロクでもないクソッタレ。あれと関わると、ほとほと破滅しかない。
「――ッ！獅子劫!!」
待て待て待て！なんだそりゃ!?窓を割って入ってきたのは――まさかまさかの『黒妖犬（ブラックドッグ）』だと!?
オレは喚んだ覚えはないし、オベロンも何の予告もなしにするわけがない。ということは……これは土地に現れた〝野良〟か！
「逃げな、お嬢ちゃんには荷がおも――――っておい！」
「アッド！――第一段階、限定解除！」
ヒュゥ、やるねぃ。流石はアーサー王の……いや、やめておこう。流石に野暮に過ぎる。しかしまぁ、アレを礼装に押し込めれた時点で、相当なものだな。
談話室に戻り、さっきの件について報告する。もちろん、オベロンも一緒にな。その流れで、グレイちゃんに関しての話を聞く。
「――あれはアーサー王の槍、『最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）』だ」
「槍!?」「アーサー王の、槍……」
良かったなオベロン、これでどう扱うべきかわかっただろう？ただ、アイツならわかるだろうが、妖精眼で見ても恐らく純粋な子だからな。どちらかというと、初期のアルトリア――キャスターの方に近しいかな。
……おう。まぁ、お前さんがどう思うかは勝手だけどさ。オレはアンタらのこと、嫌いじゃないよ。純粋に、ただひたすらに駆け抜けたアンタらのことはさ。
――さて、エルメロイ二世が天恵を受けたそうだからね。こちらも色々と支度をしようか――――。

やってきました、隠し地下室。エルメロイ二世、獅子劫、ウィルズの三人で陣をつくる。その中央に、オベロンとライネスが並ぶ。
これから、儀式呪文が始められるのだろうな。
「兄上？この体調では儀式は手伝えないぞ」
「そこに立っているだけでいい」
「なら、僕が支えていよう」
そして、呪文の詠唱がなされていく。つっても、オレは部外者だし、何よりやることがほとんどない。こんな急な展開じゃなければ、色々と段取り踏んでいけたんだがなぁ……。
っと、どうやら成功したみたいだ。ライネス嬢の魔眼が反応し、その正面から何者かが浮き上がってくる。あれは……妖精か。
『まさか、この様な魔術を使うとは……』
『みたところ、風の氏族に似た風貌だね……』
オベロンが、オレが魔術で組み上げた念話で呟いてくる。そうさな、ソールズベリーにいた風の氏族とそっくりだ。話し方からして、コーラルちゃんに近しいものを感じるね。
エルメロイ二世の推理を端的にまとめると――、この工房は、ウィルズの妖精眼を用いて発動する、妖精生産装置――――ってところ

か。うん、反吐が出るね。
「だが、なぜトレバー卿は死んだ？制御出来なくて死んだ、等という話でもないだろう」
『私が殺した』
　ま、だろうな。オベロンがいた妖精國とは違い、堅物……というか、しっかりとしてる彼女からすれば、相当許せないことだろうよ。そういう意味では、自業自得だったわけだ。
「素敵なラブロマンスですが、結局、ウィルズの妖精眼がワレッタを殺した。と、言えるのでは？」
「彼は被害者さ。君は、小さな歯車を犯人にして、法廷にでも立たせたいのかい？」
　ま、そういうところだな。化野の推理は、魔術師という存在の前提があればこそだ。だが、人の心はそう簡単なものじゃない。いくつもの意図が、がんじがらめになっているものだ。
　まぁ……そんな悠長なことは、思ってもいられないが。
「ただ……少し、手遅れだったかもね」
「ッ！走れ!!」
　エルメロイ二世の叫びで地下から脱出し、屋敷の玄関ホールへと出る。外では、ブラックドッグ達が溢れ出していた。……ヤバくね？
　どうやら、化野の封印が強すぎたあまり、エルメロイ二世達の儀式によって工房が活性化した、と。なんてことしてくれたんだお前らァ!?正面からなんてごめんだぞ!?
　あぁもう、やらなきゃダメなのね！わかったよコンチクショウッ!!
　ええい、数が多いよ！短剣を振り回してなんとかなってるけど、いかんせん捌ききれねぇ。
「手作りで失礼（でっせー）！マスターッ、流石に対応しきれない！」
「わかってらぁ！だがどうにもならん!!」
　うざったらしいなぁもうっ。このままじゃジリ貧だぞ、これ。なにか、なにか対軍宝具並みの大火力が必要だぞ。
　マズイ、あのデカいのが動き始めやがった。あれが来たら、とうとう抑えきれないぞ。一体どうするつもりだ、エルメロイの。

「”Ｇｒａｙ…Ｒａｖｅ…Ｃｒａｖｅ…Ｄｅｐｒａｖｅ……Ｇｒａｖｅ…ｍｅ……。…Ｇｒａｖｅ……，ｆｏｒ　ｙｏｕ……”」

使うのか、それを。そうだ、それが正解（better）だとも。だが、宝具発動ともなれば、魔力を感知できる奴らからすれば捨て置けるはずがない。

オレ達に向かって来てきた数体が、グレイちゃんの方へと方向転換する。そりゃまぁオレでもそうするけどよ！

「ぐぅっ!?」「くっ――！」

「気にするな！お前さんのやりたいようにやれ！」

「そうだとも！得意ではないが、塵払いぐらいやってみせるさ！」

間に合わなかった分を、獅子劫とオベロンが身を呈してかばい、片翼に迫る分を排除していく。そして、極光が天を突き、一番デカイのが動き出す。

だが、それよりも1コンマ早く、アレは発動するだろうよ。

「――古き神秘よ、死に絶えよ。甘き謎よ、尽く無に帰れ」

『擬似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。封印礼装、第二段階限定解除を開始』

「聖槍、抜錨――――――!!

『最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）』!!」

――――これが、本当の『聖槍』。モルガンの魔術によるものではなく、正真正銘、本当の”世界を繋ぎ止める楔”か――――――。

彼女が放った”聖槍”の光で、人工妖精達はいなくなった。けれど、”門”は未だ消えていない。
ロード・エルメロイ二世先生が言うには、術式は完全であり、簡単には消すことができないと。皆が対策を考えてくれている。けれど、たった一つだけ、ここからでも術式を解体する手がある。
「――行くんだね」
「ええ、行きます。妖精王殿」
そして僕は、ロード・エルメロイ二世先生からの静止を背に、彼女の元へと歩み寄っていく。
そして、昨晩のことを思い出す――――――。

『――やぁ、ウィルズ君』
『貴方は…！妖精王殿!?』
『あぁ、そうだとも。君が惚れた妖精達の王さまさ。まぁ、お飾りだけどね。……君の考えていることは分かるよ』
『……そうですか、やはり…』
『いつか、それは甘い夢だと知るかもしれない。そうしなければ良かったと思うかもしれない。それでも、君は行くのかい?』
『……ええ、それがきっと。一番いい選択で、何より僕が望んでいることですから――――』

――ありがとう、彼方より来たる妖精の王よ。僕の言葉を聞いてくれて、僕の想いを聴いてくれて。これが、例え魅入られていたとしても、僕は何一つ、悔いはない。

そうして僕は、彼女と共に門の奥へと進んでいく。これで、僕の謎は解体された。

――――ありがとう、ロード・エルメロイ二世。僕の謎を解体してくれて――――。

一件落着し、皆思い思いに帰っていった。虚映達は、ロード・エルメロイ二世達とは別の列車に乗って、ロンドンへと帰る。その最中の車内にて――――、

「今回は珍しく黙りが多かったな、オベロン」

「まぁ、ね。今回は、思うところは多かったから」

――妖精絡みの事件、その妖精に惚れた人間、騎士王の写し身、現代に甦った”最果ての槍”――それこそ、挙げればキリがないだろう。

だが、それらは最早”終わった”こと。だからこそ、彼らは荷物の中から、一通の『黒塗りの手紙』を取り出す。

「それはそれとして、さ――――これ、どうするつもり？」

「まぁ……いくしかないだろうよ。はぁ、計画建てしないとな。クク……最後の最後に面白くなりそうだ」

悪魔は笑みを深める。その瞳孔の奥に秘めたるものをぶつけんと。

嗤う道化師と有り得ざる妖精王は、その手に持つ”心臓無き者”からの挑戦状に、ただ薄く笑うのみであった。

幕間⑥：魔眼収集列車　＃1

「――」
「――？」
おーおー、あそこに色んなの集まってるわ。ロード・エルメロイ二世に、異なる世界ではマスターの一人だったカウレス君。さらには化野まで集まってるらぁ。
「――どこかのロードまで来てると思ったら、噂の現代魔術科とはね」
「……」
あぁ、生きているんだ、君は。
『オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア』――『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄｏｒｄｅｒ』では、特異点Ｆで燃え盛るカルデアスに取り込まれ、続く2部では、ラスボスたる”ビーストＶＩＩ”の寄り代になっていた娘。
やれやれ、こりゃあまた、暇しなさそうな面子ですこと。かと思えば、エルメロイ二世と視線がかち合う。ので、軽く手を振り返してあげる。うーん、あの渋い顔。
「さ、行こうぜ――『ケント』」
「はいはい。個人的に、その名前もどうかと思うけどね　――『リア』」
かくして、オレ達が乗り込み、ついに列車は動きだす。結末のわからない、線路の先へ――――。

客車のリラックスルームのような場所で、僕とマスターは一息つく。遠目には、あのロード・エルメロイ二世とかいう人間が座っている。

と、ふと扉が開き、誰かが入ってくる。黒衣を身にまとい、首もとには十字架を下げた老齢の男性だ。

「……『カラボー・フランプトン』。”聖堂教会”の者だ」

「……へぇ？」

うたた寝していたマスターが、興味深そうに薄く目を開く。どうやら、彼もこの列車でのオークションの参加者のようだ。

その後に入ってきた、奇抜な格好の女の子――『イヴェット』と言うらしい――とエルメロイ二世の会話に、マスターが軽くツボに入ったらしい。いやぁ、あそこまで生き生きしてると、逆に面白いよねぇ。

それからしばらくして、列車が動き出した。案内に従い、それぞれに充てられた個室へと入っていく。

マスターが個室に防音の魔術を張り、声が漏れないようにする。これで、俺たちの会話が外に漏れる心配はなくなったわけだ。

「それで？ここからどうするわけなのさ？」

「しばらくは大人しくしておくさ。問題は、明日の夜だな」

懐から、様々なメモが書かれたノートを取り出す。そこには、今まで出会ってきた人物が起こしたこと、元のシナリオでしてあったこと、その影響といったものが連々と書かれている。

そこに、色々と新たに書き加えられていく。

『魔眼収集列車での出来事

①エルメロイ二世がくる

②後部貨物車で戦闘→クラス〈フェイカー〉のサーヴァント

③オークション会場でネタばらし』

「おおまかにはこんなところだ。で、オレ達が動くのは、この二番のと

きだ」
「へぇ？理由は？」
そこから更に、綿密な計画を立てていく。俺達が疑われない程度に、かつ向こうを程よくおちょくれるぐらいの計画を。
はぁ……ほんと、こういうとこだけ息が合うのどうかと思うよ。ま、嫌いじゃないけどね。さてはて、どうなることやら……――――

翌、昼休憩時。オレとオベロンはどたばた騒ぎを聞いて、眠りかかっていた瞼を無理矢理開かされることとなった。
オルガマリーの従者――『トリシャ・フェローズ』が首を盗られて殺害された、とのことだった。
ほんっと魔術師の世界って物騒極まりないなぁ。と、ここまで折り込み済み。どうあっても彼女は死ぬ定めだし、死ななくてはいけない存在だ。それはもうどうしようもない。
問題はこの後、エルメロイ二世達が最後部までいくときだ。さて、どちらがいくか、だ。適役は……まぁ、そうだな。それでいこう。んじゃまぁ、スタンバイしましょうかねぇ。

「……そろそろ犯人が指定してきた刻限だ」
列車の最後部、展望台に立つ私達。そこで、彼の聖遺物を盗ったであろう、犯人からの接触か何かがあるはずだ。
この招待状――――”魔眼収集列車（レール・ツェッペリン）”という”異界”につながる鍵。内部へ侵入するのも、外部へと脱出することすら出来ない密室。一見、回りくどい様にもみえる方法をとって、何がしたいというのだろうか……。
「雲が……――――ッ。こっちに、何か近付いてきます！」
突然に空が曇りはじめ、まるで雷が走るように列車を追いかけてくる。そして、列車の屋根に落ちてくる。
グレイとともにはしごを登り、走行時の風が吹き荒ぶ屋根へと立つ。そこに、またしても雷が落ち、何者かの姿が現れる
「あぁ、本当に来たのか。……罠かも知れないのに飛び込んできたのを、愚行と蔑むべきか。蹴散らすだけの実力を伴った剛毅というべきか」
「貴方が、師匠から聖遺物を盗んだ犯人ですか！」
「ふっ……その盗賊の労党の一味ではある」
「――――じゃあ返して!!」
気を逆立てるグレイを抑え、私はその人物をしっかりと見つめる。――その姿は、まさしく”奴”と瓜二つで、だが明らかに違う。
恐らく、臣下の一人――――だが、私は目の前に立つ存在を、あの場所で見たことがない。
「ふーん……？気に入らない顔だな。ケチ、せせこましい、暗くて偏屈、寝起きが悪い、さも苦労人でございという顔をしている癖に、終わってみれば一番事態を掻き回している。――――どうだ？全部あ

たっているだろう？」
ぐ、随分な言い様だ。……アイツにも、似たようなことを言われたな。やはり、目の前の奴は、アイツと何らかの関係があるのだろう。
アイツを従えていた、か。――――いや、違うな。従えていたわけじゃない。私はもう、アイツの臣下だ。同じ夢を見てあの背中を追い、そして生きろと命じられた。
「……下らないな。お前を呼び寄せたのは、単に私の興味を優先してもらったからだ。が、その甲斐はまるでなかったな」
……違う。コイツは、目の前のコイツは、”征服王イスカンダル”と共に駆け抜けたであろう者でありながら、その覇道と共に進んできた者達と何かが決定的に違う。
「あぁもうたくさんだ、うんざりだ！こんなのは食傷にも程がある。――――だから、死ね!!」
襲いかかろうとした相手を、グレイが抑え込む。だが、圧倒的に膂力が足りていない。間違いない、コイツは――――”英霊（サーヴァント）”だ。
グレイが相手の攻撃を退き、距離を取る。だが……”強制の魔眼（ノーブルカラー）”か。幸い、私は魔眼殺しの礼装でなんとかなった。が、グレイが術中にかかったか。デュオニソス神を主と置く……まだだ、情報が足りない。
「お前達が、自分らで決着できる程度には、マシであると望んでいたのだがな」
グレイが抑えようとすると、一瞬遅く、相手が何かを展開する。あれは――『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』か！
そんな、バカな。あれは、アイツの宝具であったはず。ならば、目の前のアイツは一体誰なんだ!?
「我が名は『ヘファイスティオン』！史上最も偉大なる征服王、イスカンダル第一の腹心なり!!
――――貴様に、イスカンダルの臣下たる資格なぞあるものか!!」
不味い。奴が何者であれサーヴァントであるならば、宝具を発動されるのは極めて不味い。
”聖槍”を解き放ち、宝具を相殺させようとしているグレイ。だ

が、この不安定な、そしてなによりも発動した際の問題があまりにも多過ぎて危険だ。だから――――――私は奥の手を使うため、前へと出る。

「――邪魔するなよ、部外者(よそもの)が」

――――その後、師匠は倒れてしまいました。いくら髪に蓄積した魔力で流したとしても、そのダメージは流しきれなかったようです。

師匠を部屋へと運び込んで、カウレスさんが『原始電池』を使って治してくれていますが、とても心配です……。

それを見かねたオルガマリーさんから、『ドルイド(パ)の秘薬(ナケア)』を頂き、薬を塗って容態がようやく安定してきました。

……一つだけ、気になることが。あの時、師匠があのサーヴァントの宝具の前に立った時。誰か別の人が、後ろから出てきたように感じたんです。

有り得ないはずなのに、その姿は鮮明に見えているんです。――――深く、青い格好をした、ひどく怖くて寂しそうで、けれども優しそうな背中の人を――――。

幕間⑦：魔眼収集列車　＃2

「――――サーヴァントに襲われた!?生前の人格を持った英霊を、そのまま召喚する現象なんて、『冬木市の聖杯戦争』以外に有り得ないわよ」

「……あれは間違いなく、実体化した英霊だったと思います。あんな力、魔術師のものとは……」

そうです。あれは、”降霊憑依（invocation）”だとは到底思えません。あの膂力、敵意、殺意、そして――――あの戦車。

「なら、ますます無関係ではないわね。――――サーヴァントなら、召喚した〈召喚者（マスター）〉がいるはずよ」

はぁい。皆様どーもどーも、虚映ダヨー。ほならね、現状報告といきましょうか。〈フェイカー〉改め、『ヘファイスティオン』の顕現は確認できた。ロード・エルメロイ二世もボロボロで一回休みってわけだ。

対して、こちらは”この後”に向けた準備は着々と進んでいる。ただ、あの”法政科の蛇”に見つからないように、気付かれないように

するのが難点だが。
「というわけでここか――――――らぁっ!?」
「うぉぅ!?何事だ!?」
うぉぉぉぉぉっ、すっごい急ブレーキ！いや遠心力がきついって！無茶苦茶するなぁ!?
魔眼収集列車が急ブレーキをかける異常事態――――ってことは、物語が第二フェーズへ突入したってことだな。ちょっと色々考えたいのに、この勢いは酔うってばよ。うっぷ……。
『お客様にご連絡申し上げます。当列車は遺憾無く、”腑海林（アインナッシュ）の森”に突入致しました』
「マスター、”腑海林（アインナッシュ）の森”って知ってるかい？」
「あー……確か、催眠術を使う魔術師『アインナッシュ』の血を吸って吸血鬼化した森だったか？今回は、その”落とし子”ってとこだろうな」
そんな嫌そうな顔するなよ。オレだって、用もなく来たくなかったよこんなとこ。でも、物語の進行上、どうしてもここに来なくちゃいけないんだわ。
ふと外を見ると、三人ほどの魔術師が列車の前方に立ちふさがる森に、火炎魔術を発動させていた。普通の森ならそれで済むだろうけど……ここは、別名『死徒の森』だぜ？
「愚かだねぇ……」
「うわぁ……僕は絶対外に出ないからな、マスター」
外の惨状を見て、さらにドン引きになるオベロン。そらまそうだ。こんなもん見たら、死んでも外になんて出たくなくなるわ。言うて、この列車も”死徒の落とし子”みたいなもんだが。
そんな風に思いながら外を眺めていると、不意にノックがされる。オベロンと目配せして、扉を開けさせる。するとそこには、参加者のカラボー神父を初めとした、数名が集まっていた――――――。

「「この列車を動かすため手を貸して欲しい、ですか……？（だって？）」」
うーむ、確かにそれはこちらとしても最もな話だが……。アレを突破する方法って、中々浮かばないんだが？と、きちんとプランがあるわけね。
ふむふむ……成る程？手っ取り早い話、森の中にある霊脈を活性化させて自壊させるってわけか。いいじゃん、面白そうだ。それなりにリスクはあるが、それ以外に方法はなさそうだな。
「戦力は多いほどいい。……協力してくれないか」
「やります」
わお、ノータイム。流石はグレイちゃん、師匠のために身を粉にするとは、弟子の鏡だねぇ。まぁ、こちらからしたらいい喜劇だけどな。
「それでそちらの――――」
「『リア』、と申します。こちらは友人で『ケント』です」
「失礼した。それで、リア殿らはどうだろうか」
「申し訳ないが、僕は遠慮させてもらうよ。流石にあの中に入って、生きて帰れる気がしないからね」
手をひらひらと振って答えるオベロン――いや、ケント。名前は変えたとは言え、オレ達のスタンスまで変えるつもりはない。要は偽名だな、保険ではあるが。
というかメルヴィン某君、キミそんな有名人だったの？まぁ確かに、調律師っていう存在自体希少なものではあるけどな。にしても、綺麗な音色なもんだわ。
「君達の魔術回路を二割ほど向上させた。少しは、役に立つんじゃないかな？」
おー、そりゃあもう役に立つに決まっているわ。こころなしか、さっきまでよりか身体が動きやすくなってるかね。

まぁ、彼は知らないだろうけど、いいのかね？これ。だってよ――
――敵に塩送ってるんだぜ？あーでも、メルヴィンならむしろ楽しんでやりそうだなぁ……。

――今、拙達は列車から降り、森の中の霊脈を目指しています。カラボーさんを始めとして、イヴェットさん、メルヴィンさん、そして――リアさんと一緒に。
比較的近場にあった霊脈を、カラボーさんが活性化させました。ただ、この影響で森への刺激や、師匠達への影響を考えて、急ぐことにしました。
『おいグレイ！』
「どうしたの？アッド」
『ヤベェヤベェヤベェヤベェぞ！ヤッベェのがこっちを見てる！逃げ

るんだ今すぐにイ!!』
その相手に、拙には心当たりがありました。なので、カラボーさん達を先に行かせます。カラボーさん達を巻き込むわけにはいかないので。
皆さんな姿が遠くに行ったのを見届けて、後ろを振り向きます。そこには――――やはりあの『ヘファイスティオン』さんがいたのです。
「ほう？私に気付いたか」
すぐさまアッドに呼び掛けて戦闘体勢をとります。
師匠を探しているようでしたが、これ以上師匠に傷付けさせるわけにはいきません。この人をここで倒し、師匠から盗んだ聖遺物をしっかりと返してもらいます。そして、この人が何を望んでいるのかを。
「武力ではなく、対話のために戦場に立つか……。ならばその刃は何のためだ？」
「拙は……――――拙は、貴女に屈服するわけにはいきません！対等に話して、聖遺物を返してもらいます!!」
「そうか、それがお前の覚悟か――――！」

・
・
・

それから、幾度かこの人と斬り結びました。この人は、やはり危険です。この人には、負けられない。
……――――？なんでしょうか、この音。まるで、重い金属を引きずるような……
「――――邪ァ魔ぁ!!」
「――――ッ!?」「――――ッ!!」
重い!!横凪ぎに振るわれた一撃に、拙達は押し飛ばされます。お互いにぶつかっていたのもあって、相当に踏ん張っていたはずなのに。それを、軽々と……。
警戒するため、現れた相手を見つめました。そこにいたのは――――

―深い夜の闇のような髪に、禍々しい大剣を持った、一人の男性でした。
「おのれ……！貴様、戦士の戦いに水を差すか！」
「はぁ……？戦士だかなんだか知らないけどさ、そこに居られると邪魔なんだよね。さっさと退いてくれる？」
うんざりしたような顔をする男性――――いえ、いいえ。拙は、拙に刻まれた(流れ込んだ)記憶は。彼を、彼の気配を知っています。知っているんです。
彼は、あれは――――
『ヴォーティガーン』!!」
「ん？……へぇ。面白い縁もあったものだ――うぉっと!?」
「敵を目の前に随分と悠長だな！」
三つ巴になった戦場で、私達は何度も切り結びます。振るわれる大剣を避けて、突き出される剣を受け止める。そんな中、”卑王”の目線が明後日の方向を見ました。
「――チッ、時間切れか。あーぁ、惜しかったなぁ」
「なっ――――」
そう告げると、気怠げになりながら攻撃を止める。次の瞬間、彼の姿はまるで泥のような塊となって崩れ落ちて消えました。
私とヘファイスティオンが彼の姿を警戒しながら探しますが、全く見つかりません。そして、声だけが響いてきました。
『これ以上はやってられないからね。またね、”騎士王の映し身(忌々しい小娘の)”』
「待って!!」
拙の呼び止めの意味もなく、彼の気配は消えていきました。その次の瞬間、向こうから雪崩が迫ってきました。
それでも拙は、ヘファイスティオンを逃がさないために、師匠の元へと行かせないためにも残りました。

……その後、拙はヘファイスティオンに助けられ、ほんの少しだけお話しました。ヘファイスティオンさんの願い、思い、そして――

―生き方を。
そして、”匣(アッド)”をボード代わりにして、拙はなんとか列車へと戻ることができました。けれど……たった一つ、拙は気になっているのです。

『――――最後に一つ、気をつけておけ。貴様が『ヴォーティガーン』と言ったあの男。……あれは、油断ならない男だ。私と似て非なる、おぞましい何かだということを覚えておくことだ』

ヴォーティガーン……貴方は一体、何者なのですか……？

「ごめーん、マスター。しくじっちゃったぁ。あでも、マスターなら何とかできるよね？」
「っッ～～……まッッた”お好(ア)きにどう(ド)ぞ(リ)”かよ畜生ッ!!ブェックシッ!!」